

玉名平野遺跡群 2

－玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2 0 2 3

熊 本 県 教 育 委 員 会

玉名平野遺跡群 2

—玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—



2023

熊本県教育委員会



調査区遠景 菊池川を望む（西から）



調査区遠景 玉名平野を望む（南東から）

口絵 2



北側微高地上の竪穴建物群（西より）



南北方向の水田畦畔（北西より）

序 文

玉名平野遺跡群は、熊本県の北部、阿蘇北外輪山に源を発し、有明海へと西流する一級河川菊池川の右岸、下流域に発達した肥沃な玉名平野に所在する遺跡群です。「田」の文字が書かれた棒状留具が出土した柳町遺跡や生産遺跡である玉名平野条里跡などの遺跡を含む県内有数の遺跡群として知られています。

熊本県教育委員会では、玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業に伴い、令和２年度（２０２０年度）から玉名平野遺跡群の発掘調査を３次にわたって実施してきました。その結果、第１次調査では弥生時代中期の竪穴建物１棟、甕棺墓１基、古代の竪穴建物１棟、木棺墓１基、古代・中世の水田が確認され、第２次調査では古代・中世の水田の広がりが把握されました。この度の第３次調査では、縄文時代晩期から中世に至るまでの遺構・遺物が確認され、玉名平野遺跡群における遺跡の変遷が一部明らかとなりました。

本書は、その第３次調査の成果をまとめた報告書です。研究者のみならず、県民の皆様をはじめ幅広く活用され、地域の文化財を理解する一助となることを切に願います。

最後になりますが、この度の発掘調査並びに本書の作成にあたり、地元の皆様をはじめ関係者、関係機関には多大なる御理解・御協力をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

令和５年（２０２３年）３月２４日

熊本県教育長 白石 伸一

例 言

- 1 本書は、熊本県玉名市秋丸・河崎に所在する玉名平野遺跡群における第3次となる埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、玉名立花線(河崎工区)活力創世基盤交付金(改築)事業に伴い、熊本県知事から依頼を受けて、熊本県教育委員会が実施した。
- 3 現地調査は熊本県教育庁教育総務局文化課が実施し、補助業務を埋蔵文化財サポートシステム・九州文化財研究所共同企業体に委託した。
- 4 出土遺物等の整理は熊本県文化財資料室で行い、出土遺物の実測・トレース・写真撮影を、(株)九州文化財研究所に委託した。
- 5 土壌資料の自然科学分析をパリノ・サーヴェイ(株)に委託した。
- 6 本書の編集は、熊本県文化財資料室で行い、矢野裕介が担当した。
- 7 本書の執筆は、第1～3章・第5章を矢野が行い、第4章はパリノ・サーヴェイ(株)の成果報告をそのまま掲載したため、図・表の番号は報告の通りとなる。
- 8 本書に掲載した出土遺物・実測図・写真等は、熊本県文化財資料室で保管している。
- 9 調査にあたり、以下の方々から助言・協力を得た(順不同・敬称略)。
田中康雄、蛋父雅史、菊池直樹、宇田員将、石松直、竹田宏司、田熊秀幸、高谷和生

凡 例

- 1 遺跡の座標は、平面直角座標系Ⅱ系(世界測地系)を使用し、方位は座標北を指す。
- 2 調査に係るグリッドは10m間隔で設定し、グリッド名は、北西隅($X = -6780$ 、 $Y = -40130$)を起点に、南北方向にアルファベット(北からA～G)、東西方向に数字(西から1～5)を付し、その組み合わせで表記している。
- 3 遺構の名称については、調査時には「S」に番号を付して設定(S01～S141)とし、本報告書においては、遺構の種別名に調査時の番号を付して表記することとした。
- 4 現地での遺構実測は、20分の1の縮尺で行った。
- 5 遺物の実測は原寸で行い、土器を3分の1、石器を1分の1、3分の2、古銭を1分の1の縮尺で掲載した。
- 6 遺構等の土層及び出土遺物の色調は、『新版 標準土色帖』(1967年 農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に従った。
- 7 遺跡分布図は、国土地理院発行45,000分の1の地形図及び熊本県地図統合システムを基に作成した。

玉名平野遺跡群 2

—玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

— 目 次 —

口絵

序文

例言・凡例

第1章 調査の経緯

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の組織	1
1 発掘調査	
2 整理・報告書作成	
第3節 調査の経過	2
1 発掘調査の経過	
2 整理作業の経過	

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	3
1 遺跡の位置	
2 周辺の地形・地質	
第2節 歴史的環境	3
1 周辺の遺跡	
(1) 旧石器時代 (3) 弥生時代 (5) 古代	
(2) 縄文時代 (4) 古墳時代 (6) 中世以降	
2 玉名平野遺跡群	
(1) 遺跡の名称	
(2) これまでの成果	

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法	8
1 調査区の設定	
2 基本層序	
3 調査の方法	
(1) 表土掘削 (3) 包含層掘削、遺構検出・掘削 (5) 写真撮影	
(2) グリッドの設定 (4) 遺構実測	
第2節 遺構・遺物	18
1 縄文時代晩期の遺構・遺物	
2 弥生時代早期の遺物	
3 弥生時代末～古墳時代前期の遺構・遺物	
(1) 竪穴建物跡 (2) 竪穴状遺構・土坑 (3) 溝状遺構 (4) その他の遺物	
4 中世の遺構	
(1) 畦畔 (2) 溝状遺構 (3) 水田層及びその上下層出土の遺物	

第4章 分析	55
--------	----

第5章 総括	65
--------	----

写真図版

抄録

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡地図	第25図	竪穴建物 S029 平・断面及び出土遺物実測図
第2図	玉名平野遺跡群における調査地点図	第26図	竪穴建物 S030 平・断面図
第3図	調査区基本層序図	第27図	竪穴建物 S031 平・断面図
第4図	調査区ベルト及びトレンチ土層断面ポイント図	第28図	竪穴建物 S077 平・断面及び出土遺物実測図
第5図	調査区土層断面図（A-A'）	第29図	竪穴状遺構 S063・S126 及び土坑 S125 平・断面図
第6図	調査区土層断面図（B-B'）	第30図	土坑 S125 出土遺物実測図
第7図	調査区土層断面図（C-C'）	第31図	土坑 S127 平・断面及び出土遺物実測図
第8図	調査区土層断面図（D-D'）	第32図	溝状遺構 S028 平・断面図
第9図	トレンチ 2・4・5 土層断面図	第33図	溝状遺構 S028 出土遺物実測図
第10図	トレンチ 6・7・10 土層断面図	第34図	溝状遺構 S032・S060・S095 平・断面図
第11図	トレンチ 11・12・15 土層断面図	第35図	溝状遺構 S032 出土遺物実測図
第12図	竪穴建物 S128 平・断面図	第36図	土坑 S036・S044 平・断面及び 出土遺物実測図
第13図	調査区遺構配置図（3 面目）	第37図	Ⅸ層出土遺物実測図
第14図	竪穴建物 S128 出土遺物実測図	第38図	調査区遺構配置図（1 面目）
第15図	Ⅶ a 層出土遺物実測図①	第39図	畦畔土層断面
第16図	Ⅶ a 層出土遺物実測図②	第40図	溝状遺構 S007・S008 平・断面図
第17図	Ⅶ a 層出土遺物実測図③	第41図	Ⅱ層出土遺物実測図
第18図	調査区遺構配置図（2 面目）	第42図	Ⅲ層出土遺物実測図
第19図	竪穴建物 S025 平・断面図	第43図	Ⅳ a・Ⅳ c 層出土遺物実測図
第20図	竪穴建物 S025 出土遺物実測図①	第44図	V・Ⅵ層出土遺物実測図
第21図	竪穴建物 S025 出土遺物実測図②	第45図	玉名平野遺跡群第3次調査区と周辺の遺構分布図
第22図	竪穴建物 S026 平・断面図		
第23図	竪穴建物 S026 出土遺物実測図		
第24図	竪穴建物 S027 平・断面及び出土遺物実測図		

表 目 次

第1表	遺跡地名表	第4表	遺物観察表
第2表	遺物観察表	第5表	遺物観察表
第3表	遺物観察表	第6表	遺物観察表

図 版 目 次

図版 1	4 畦畔 S004・009 完掘状況（南から）
1 3 面目完掘状況（西から）	5 畦畔 S005・006 完掘状況（東から）
2 2 面目完掘状況（俯瞰）	6 畦畔 S010 完掘状況（東から）
3 1 面目完掘状況（南から）	7 溝状遺構 S008、畦畔 S011 完掘状況（北西から）
4 竪穴建物 S128 遠景（南から）	8 畦畔 S003、溝状遺構 S007 完掘状況（東から）
5 竪穴建物 S128（東から）	図版 4 竪穴建物 S128 出土遺物
6 竪穴建物 S025・026、溝状遺構 S028 検出状況（南西から）	図版 5 Ⅶ a 層出土遺物①
7 竪穴建物 S025 遺物出土状況（南東から）	図版 6 Ⅶ a 層出土遺物②
8 竪穴建物 S026 遺物出土状況（東から）	図版 7 竪穴建物 S025 出土遺物
図版 2	図版 8 竪穴建物 S025、土坑 a（46・47）出土遺物
1 竪穴建物 S025・026・027 完掘状況（北から）	図版 9 竪穴建物 S026 出土遺物
2 竪穴建物 S029・030・031 溝状遺構 S032 検出状況（西から）	図版 10 竪穴建物 S027（55～57）・S029（58・59）・S077（60） 出土遺物
3 竪穴建物 S029・030・031 溝状遺構 S032 完掘状況（東から）	図版 11 土坑 S125（61～64）・S127（65～67）出土遺物
4 溝状遺構 S095 完掘状況（西から）	図版 12 溝状遺構 S028（68～72）・S032（73・74）、 土坑 S036（76）・S044（77・78）出土遺物
5 竪穴建物 S077 完掘状況（北から）	図版 13 Ⅸ層（79～82）・Ⅱ層（84・85）・Ⅲ層（88）・ Ⅳ a・Ⅳ c 層（91～93・96）出土遺物
6 竪穴状遺構 S063 完掘状況（西から）	図版 14 Ⅳ a・Ⅳ c 層（94・95・97）・V層（98～102）出土遺物 紡錘車（75・83）
7 竪穴状遺構 S126、土坑 S125 検出状況（西から）	図版 15 石器（27～29・86・30～32） 古銭（87・89・90）
8 土坑 125 遺物出土状況（北から）	
図版 3	
1 土坑 127 完掘状況（東から）	
2 畦畔完掘状況（俯瞰）	
3 畦畔 S002・003・004 完掘状況（南西から）	

第1章 調査の経緯

第1節 調査の経緯

今回報告する調査は、平成28年3月に新設された九州新幹線新玉名駅への交通アクセスの利便性を高めることを目的とした県道玉名立花線の県道改良工事に伴う調査である。当該調査の対象区域一帯は、周知の埋蔵文化財包蔵地「玉名平野遺跡群（縄文～中世）」であったことから、平成28年（2016年）9月23日付け玉名工第66号で熊本県県北広域本部玉名地域振興局土木部長から熊本県教育長あてに当該事業対象路線長1,300mの予備調査依頼が提出された。

熊本県教育庁教育総務局文化課は平成29年度（2017年度）から令和2年度（2020年度）にかけて遺跡の広がりや遺構の有無を確認する予備調査を継続的にを行い、計22箇所のトレンチ調査を実施した。その結果、路線のほぼ全域で水田層が確認されるとともに、路線中央付近の河崎天満宮西側部分と路線北側の玉名バイパスへの取り付け部分（柳町遺跡）において遺物が出土するなど、遺跡の広がりが認められると判断されたため、平成31年（2019年）4月24日付け教文第184号で熊本県教育長から熊本県県北広域本部玉名地域振興局土木部長あて予備調査結果報告を提出した。

これを受けて、令和2年（2020年）3月24日付け玉名工第169号で熊本県県北広域本部玉名地域振興局土木部長から熊本県教育長あて路線全域の発掘調査依頼が提出され、熊本県教育庁教育総務局文化課は令和2年（2021年）7月7日～10月26日に第1次調査、令和2年（2020年）12月9日～令和3年（2021年）1月29日に第2次調査をそれぞれ実施した。

今回報告する調査は、これらに続く第3次調査となる。調査対象地については、予備調査において遺構・遺物の存在が明らかとなった16・17・20～21トレンチを包括する面積1248.9㎡（遺構面3面）の範囲を調査対象とし、調査期間は令和3年（2021年）10月から令和4年（2022年）1月まで実施することとした。

第2節 調査の組織

1 発掘調査（令和3年度）

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	宮崎公一〔文化課長〕
調査総括	長谷部善一〔課長補佐〕 宮崎敬士〔主幹（文化財調査担当）〕
調査事務	後藤和也〔課長補佐〕 堀 義之〔主幹（総務担当）〕 佐藤虹夏〔主事〕 大石ひとみ〔主事〕
調査担当	矢野裕介〔主幹〕

2 整理・報告書作成（令和4年度）

整理主体	熊本県教育委員会
整理責任者	宮崎公一〔文化課長〕
整理総括	上村修治〔審議員〕 帆足俊文〔主幹（文化財調査担当）〕
整理事務	藤本麻衣〔課長補佐〕 齋藤 修〔参事（総務担当）〕 佐藤虹夏〔主事〕 大石ひとみ〔主事〕
整理担当	矢野裕介〔主幹〕 唐木ひとみ〔会計年度任用職員〕 稲葉貴子〔会計年度任用職員〕

第3節 調査の経過

1 発掘調査の経過

玉名平野遺跡群第3次調査は、令和3年(2021年)10月18日から令和4年(2022年)1月31日まで実施した。調査対象地には予備調査の結果から3面の遺構面の存在が明らかとなっていたことから、まず表土掘削を行い、包含層掘削完了後、各面毎に遺構検出、遺構掘削、遺構実測、空中写真撮影の順で実施することとした。なお、調査経過の概要は、以下のとおりとなる。

令和3年(2021年)10月18日から表土掘削を開始した。表土掘削は地表下45cm(基本層序Ⅱ・Ⅲ層上面)まで掘削することとし、22日まで及んだ。表土掘削の段階で調査区中央に大溝(S001)が南北に走ることが確認された。25日から27日にかけて調査区内外の環境整備を行った。

10月28日から本格的な掘削作業を開始した。基本層序Ⅳ層上面(1面目)での遺構検出を目的に、調査区北側から基本層序Ⅱ・Ⅲ層(水田層)の掘削を進めるとともに、調査区中央の大溝の掘削を進めた。併せて、調査区の土層確認のため計9本のトレンチ掘削(トレンチ01～09)を行い、土層断面図の作成を進めた。28日にトレンチ01のⅦ層から弥生時代早期の土器片が出土し、29日に調査区の基本層序(Ⅰ～Ⅷ層)を確認した。また11月29日から掘削を開始したトレンチ09において、調査区北側の微高地(以下「北側微高地」という。)と、その南側の自然流路との層序関係が明らかとなった。Ⅲ層となる水田層は固くしめる土壌で掘削作業が難航したが、結果的に水田の畦畔跡が南北2条、東西6条の計8条検出できたことから、12月7日に1面目の完掘状況の空中写真撮影を行った。同日、計6箇所の土壌サンプリングを行った。

12月8日からⅣ層の掘削を開始した。14日、トレンチ09の掘削が完了し、北側微高地の層序として㊸～㊼層が確認され、うち㊼層は北側微高地に設定したトレンチ07の成果と併せて、弥生時代末期～古墳時代前期の遺物包含層であることが把握された。22日から北側微高地の掘削(Ⅴ層上面)を開始した。24日に北側微高地のⅤ層上面までの掘削が完了し、遺構検出を行った結果、竪穴建物7基、溝、ピットなどを検出した。以降、北側微高地の遺構掘削を進め、自然流路内のⅣ層掘削と遺構掘削が完了した令和4年(2022年)1月7日に北側微高地を中心とする2面目の空中写真撮影を実施した。

1月11日より調査区北側半分の掘削作業(Ⅴ・Ⅵ層)を開始した。その結果、調査区西側に北側微高地が延びることが判明した。また調査区南側に設定したトレンチ13・14で自然流路の延長方向も把握できた。18日からⅦa層の掘削を開始し、弥生時代早期の突帯文土器の遺物包含層であることを確認するとともに、縄文時代晩期の竪穴建物跡1基(S128)を検出した。27日にすべての掘削が完了したため、3面目の完掘状況の空中写真撮影、28日に遺構の個別写真撮影を実施した。31日に遺構実測を終え、すべての調査が完了した。

2 整理作業の経過

玉名平野遺跡群第3次調査に伴う整理作業及び報告者作成については、令和4年度(2022年度)に入り熊本県文化財資料室にて実施した。

出土遺物の洗浄、注記、接合作業を行うとともに、遺構実測図等の調査図面及び調査写真等の整理を実施した。その後、発掘調査報告書の作成に伴い、原稿執筆・図版作成を行い、出土遺物の実測・トレース・写真撮影業務については業務委託にて行った。12月に原稿を整え、熊本県出納局管理調達課を通して印刷業務を発注し、令和5年(2023年)3月に報告書を刊行した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

1 遺跡の位置

玉名平野遺跡群は、熊本県北西部、阿蘇北外輪山から有明海へと西流する一級河川菊池川下流域の玉名市に所在する。

玉名平野遺跡群は、その名のとおり菊池川右岸に広がる玉名平野一帯に所在する複合遺跡であり、なかでも今回の調査箇所は、玉名平野遺跡群南東部の玉名市河崎に所在し、菊池川右岸に発達した河岸段丘の縁辺部に位置する。

2 周辺の地形・地質

玉名市域の地形は、北に小岱山地、北東に臼間山地、南東に国見山地、南に金峰山地と三方を山塊に囲まれ、中心に菊池川流域に発達した沖積平野である玉名平野が広がる。玉名平野の北側には小岱山の裾部に連なる玉名台地（洪積台地）が広がり、南側には金峰山地から東に連なる伊倉丘陵性台地が舌状にせり出す。玉名平野遺跡群の北側、特に菊池川右岸の山地に面する地域は、筑紫花崗岩を母体とする小岱山花崗岩の丘陵・山地であり、西側に続く箇所は、いわゆる低位段丘状面にほぼ相当し、数多くの遺跡が存在する。

玉名平野遺跡群が広がる標高6～10 mまでの低地を中心とする地域は、従前までは縄文海進時の海であったと考えられてきたが、河川堆積によって形成されたとの指摘もある。柳町遺跡の調査では平野全域を覆う旧自然流路の状態が一部判明し、古墳時代の遺構分布は微高地上に集中していることが判明している。

第2節 歴史的環境

1 周辺の遺跡

玉名平野遺跡群が存在する玉名市内の遺跡を、以下のとおり時代を追ってみていくことにする（第1図）。

（1）旧石器時代

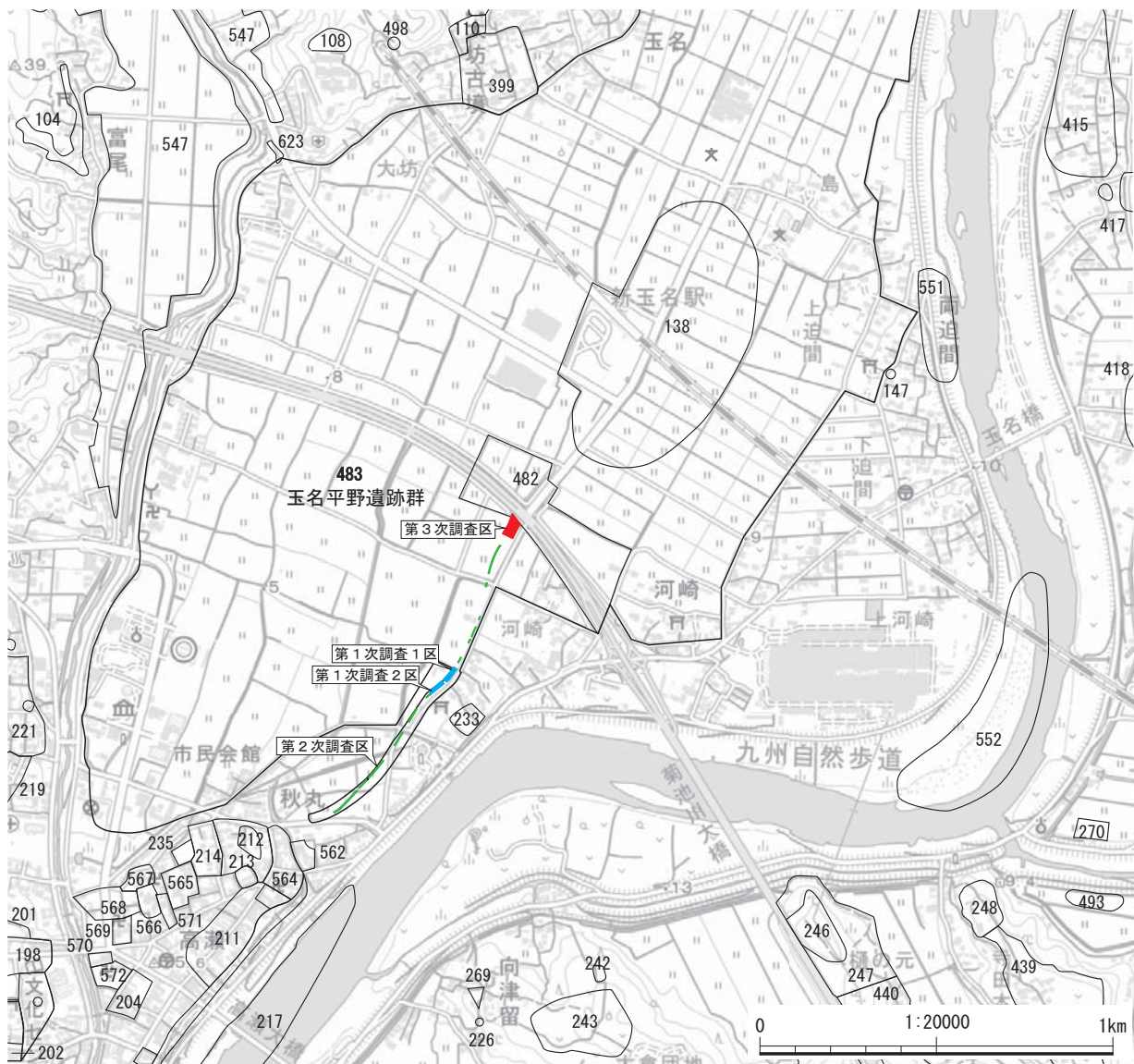
旧石器時代の遺跡の発掘調査事例はないが、玉名平野西側の玉名台地に所在する南大門遺跡（玉名市築地）における後世の遺構から出土した台形様石器や備中原遺跡（玉名市岱明町西寺照寺）から表面採集されたサヌカイト製ナイフ形石器、今泉遺跡（玉名市岱明町上）・年の神遺跡（玉名市岱明町下前原）で発見されたナイフ形石器、玉名平野東側の伊倉丘陵性台地上に位置する吉丸前遺跡（玉名市寺田）で出土した三稜尖頭器などの遺物が認められる。

（2）縄文時代

縄文時代の遺跡は、早期の遺跡として、押型文土器が出土する塚原遺跡（玉名市岱明町下前原）、目倉尾遺跡（玉名市岱明町大野下）がある。縄文海退が進み、縄文時代中期には、菊池川右岸に保田木貝塚（玉名市高瀬）、繁根木貝塚（玉名市繁根木）、左岸に桃田貝塚（玉名市大倉）など、阿高式土器が出土する集落・貝塚が台地・丘陵の裾部に形成される。また菊池川を少し遡上したところに位置する清原台地には若園貝塚（玉名郡和水町江田）があり、貝の分析から本貝塚までの潮遡上が確認されており、これまでに縄文時代晩期の資料も僅かに認められる。

（3）弥生時代

弥生時代の遺跡は、玉名平野周辺に多く見られる。早期の遺跡としては、柳町遺跡（玉名市河崎）がある。水田は確認されていないものの、自然流路内の杭列や突帯文土器が出土しており、菊池川流域における稲作の開始が想定される。前期については、中道遺跡（玉名市岱明町山下）で貝塚が発掘されており、少量の炭



第1図 周辺遺跡地図

第1表 遺跡地名表

遺跡番号	名称	種類	時代	遺跡番号	名称	種類	時代	遺跡番号	名称	種類	時代
104	富尾原横穴群	横穴	古墳	233	金盆山玉飯寺跡	寺社	近世・近代	493	群前遺跡	包蔵地	弥生・中世
108	西原東遺跡	古墳	古墳	235	高瀬官軍墓地	墓	近代	498	西屋敷遺跡	墓	近世・近代
110	大坊寺跡	寺社	中世	242	飯塚古墳	古墳	古墳	547	富尾遺跡	生産	古代
138	両迫間日渡遺跡	包蔵地	弥生・古墳	243	亀頭迫遺跡	包蔵地	古墳	551	迫間船着場跡	水運	古代
147	長慶寺跡	寺社	近世	246	城ヶ辻古墳群	古墳	古墳	552	両迫間川床遺跡	包蔵地	縄文～中世
198	繁根木山寿福寺跡	寺社	中世・近世	247	城ヶ辻城跡	城館	中世	562	常安寺	寺社	近世・近代
201	繁根木遺跡群	包蔵地	弥生・古墳	248	寺田古墳	古墳	古墳	564	光尊寺	寺社	近世・近代
202	繁根木貝塚	貝塚	縄文	269	金地山松林寺跡	寺社	近世・近代	565	蒼園山願行寺	寺社	中世
204	宝成就寺跡	寺社	中世	270	津留中林遺跡	包蔵地	縄文～中世	566	西光寺	寺社	近世・近代
211	高瀬本町通遺跡	包蔵地	中世	399	大坊遺跡	包蔵地	中世	567	大覚寺	寺社	近世・近代
212	保田木貝塚	貝塚	縄文	415	下小田・下屋敷遺跡	包蔵地	弥生	568	永徳寺	寺社	近世・近代
213	保田木城跡・高瀬町奉行所跡	城館	中世・近世	417	上堂前遺跡	包蔵地	中世	569	延久寺	寺社	近世・近代
214	高瀬山清源寺跡	寺社	中世	418	古川遺跡	包蔵地	弥生・中世	570	明教寺	寺社	近世・近代
217	高瀬川床遺跡	包蔵地	縄文～中世	439	寺田本村遺跡	包蔵地	弥生・古墳	571	光浄寺	寺社	近世・近代
219	岩崎原遺跡	包蔵地	弥生・古代	440	寺田山口遺跡	包蔵地	縄文・弥生 古代・中世	572	妙法寺	寺社	近世・近代
221	岩崎城跡	城館	中世	482	柳町遺跡	集落	古代	623	船島官軍本営跡	水制	近世・近代
226	松林寺山古墳	古墳	古墳	483	玉名平野遺跡群	包蔵地	縄文～近世				

化米が採取されている。斎藤山貝塚（玉名市天水町尾田）では、国内でも最古級の鑄造鉄斧が出土したほか、多くの突帯文土器が出土しており、斎藤山式の土器型式が設定されている。

中期には、両迫間日渡遺跡（玉名市両迫間）で杭列を伴う水田跡が確認され、前田遺跡（玉名市月田）では中期から後期にかけての竪穴建物跡が確認されている。また北部九州の影響を受けて、台地上に甕棺墓や支石墓群が多く分布し、前田遺跡、東南大門遺跡（玉名市築地）、北の崎遺跡（玉名市安楽寺）、玉名平野条里跡（古閑前地区）などで甕棺墓群が確認されている。

後期になると、立願寺台地に位置する高岡原遺跡（玉名市山田）では弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡が確認され、内行花文鏡2面が出土している。また山下遺跡（玉名市岱明町）からは当該期の住居跡からセット関係が把握できる土器群が出土している。両迫間日渡遺跡からは弥生後期の水田跡、玉名平野条里跡〔古閑前地区〕（玉名市両迫間）からは弥生時代後期の集落跡を確認している。弥生時代後期の集落跡の多くは標高5m前後の低位洪積段丘上に位置し、野部田式土器の標式遺跡である野部田遺跡（玉名市天水町野部田）もこうした立地にある。

（4）古墳時代

古墳時代の遺跡は、前期の遺跡として玉名平野遺跡群の柳町遺跡がある。柳町遺跡からは「田」の文字が書かれた木製短甲付属棒状留具が出土している。また塚原遺跡や山下木佐貫遺跡（玉名市岱明町山下）では布留式土器を伴う集落が確認されるなど、玉名台地南縁に古墳時代前期の集落が発生する。東南大門遺跡では周溝墓（主体部は木棺墓2基）が確認されている。

玉名平野は小岱山地、臼間山地、国見山地、玉名台地、伊倉丘陵性台地に囲まれ、それぞれの山裾や台地裾に古墳が多く築造されるが、最も古いものに、国見山地裾に築造された山下古墳（玉名市山部田）がある。4世紀末に築造された全長59mの前方後円墳で、主体部に舟形石棺2基などが検出されたが、採土のため、すでに消失している。伊倉丘陵性台地上にも4世紀代に築造された径21m以上の円墳である城ヶ辻古墳群2号墳（玉名市寺田）がある。

中期後半になると、玉名台地上に全長110mの前方後円墳である稲荷山古墳（玉名市繁根木）と径35mの円墳である伝佐山古墳（玉名市繁根木）、伊倉丘陵性台地上に径9mの城ヶ辻古墳群7号墳が築造される。城ヶ辻古墳群7号墳は竪穴系横口式石室との類似性が指摘されている。

古墳時代後期には、臼間山地の山裾に全長約54mの前方後円墳である大坊古墳（玉名市玉名）や、径16mの円墳である永安寺西古墳（玉名市玉名）、径13mの円墳である永安寺東古墳（玉名市玉名）、径20mの円墳、馬出古墳（玉名市玉名）などの装飾古墳が多数築造されるようになる。

（5）古代

古代の玉名郡には『和妙類聚抄』によると、「日置・為太・石津・下宅・宇部・大町・大水・江田」の8郷が所在した。そのうち「日置」は古代豪族日置氏が氏神を祀る式内社である疋野神社一帯（玉名市立願寺）に比定されている。日置氏は、鶯原台地（和水町瀬川）から出土した蔵骨器内で見つかった銅版墓誌に「関白七道西海道大宰府 玉名郡人權擬少領外少初位下日置口公 又治地高野山」とあることから、8世紀中頃に玉名郡の郡司として玉名郡一帯を治めていたと考えられている。

疋野神社周辺は、立願寺廃寺、玉名郡家跡、玉名郡倉跡（いずれも玉名市立願寺）などがあり、古代玉名郡の拠点であったことは確かである。立願寺廃寺からは7世紀末～8世紀末の軒丸・軒平瓦が出土し、8世紀初頭の観世音寺式伽藍配置の遺構が確認されている。また玉名平野内には四ノ坪・三十六（玉名市岩崎）、唐ノ坪・十五（玉名市下村）、三十六（玉名市安楽寺）などの条里制に関連する地名が散見され、柳町遺跡からは現在の地割に沿う8世紀代の大畦畔が検出されている。また「大湊」（玉名市六田）からは8世紀の道路遺構が確認されている。

この条里開発に伴い、玉名市河崎付近で菊池川に合流していた繁根木川は、現在の流路への付替えが行われており、この付替えは、8世紀初めに肥後国司として赴任した道君首名の主導によるものと言われている。その後、9世紀中頃～後半には大宰府によって公営田が設置される。



第2図 玉名平野遺跡群における調査地点図

（６）中世以降

延喜２年（902年）の荘園整理令の発布とともに、最後の班田収授が行われ、律令制は崩壊し、荘園公領制に変化していく。10世紀末から11世紀初頭には、玉名郡は玉名東郷・西郷、山北郷、伊倉郷に地域分化が進み、日置氏も伊倉郷の一員郡司に止まり、承保元年（1074年）に伊倉郷の領主権も売却し、その勢力は大きく衰退していく。

11世紀になると菊池氏が、菊池川水運の掌握を目的に菊池川流域沿いに小規模な安楽寺領を形成していくなか、玉名市安楽寺周辺には安楽寺領玉名荘が成立する。その安楽寺領を土台として、山鹿郡から玉名郡東部にまたがる広大な山鹿荘が成立した。

12世紀初めの鎌倉幕府による荘園の再編により山鹿荘は、山鹿荘と玉名荘に分割され、12世紀中頃には玉名西郷の一部を日宋貿易に大きく関与している筥崎宮に寄進され、近世に至ると、高瀬津は日明貿易の港湾、あるいは年貢米の集積地として重要な役割を果たしていくこととなる。その高瀬に国史跡「熊本藩高瀬米蔵跡」がある。

２ 玉名平野遺跡群

（１）遺跡の名称

玉名平野遺跡群は、令和元年度（2019年度）の遺跡地図の変更に伴い名づけられた周知の埋蔵文化財包蔵地の名称である。それまでは玉名平野条里跡といい、その範囲の条里以外の遺跡にも柳町遺跡、両迫間日渡遺跡などの別の遺跡名が付されて、埋蔵文化財の保護が図られてきた。その関係で、熊本県教育委員会及び玉名市教育委員会が実施する玉名平野遺跡群内の発掘調査では、その調査箇所の遺跡名を付して実施され、発掘調査報告書にもその名称が使用されてきた。このことから、玉名平野遺跡群という遺跡名を付して発掘調査が始まったのは、令和２年度（2020年度）以降となる。

（２）これまでの成果

玉名平野遺跡群内における本格的な発掘調査の始まりは、熊本県教育委員会が一般国道208号線玉名バイパス改築事業に伴い、平成６～８年度（1994～1996年度）、平成９～11年度（1997～1999年度）の２次に亘って実施した柳町遺跡の発掘調査である。平成６～８年度（1994～1996年度）の調査では、縄文時代晩期～古代の遺構・遺物が出土しており、なかでも弥生時代末～古墳時代前期の竪穴建物跡、古代の大坪跡、先述の木製短甲付属棒状留具などが確認されている。続く平成９～11年度（1997～1999年度）の発掘調査では、古墳時代末～古代前期の大溝状遺構や古墳時代前期の竪穴建物跡、井戸跡などの遺構が確認されている。

その後、熊本県教育委員会では、平成12～20年度（2000～2008年度）に県道玉名立花線の拡幅工事に伴う玉名平野条里跡、両迫間日渡遺跡、玉名の平城跡の発掘調査を実施している。これら一連の調査では弥生時代、古墳時代、古代、中世における水田の広がりが確認されるとともに、敷粗朶工法を用いた弥生時代の畦畔を確認している。このほか、平成18年度（2006年度）の両迫間日渡遺跡の発掘調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の敷粗朶工法を用いた畦畔が確認され、平成19年度（2007年度）の玉名平野条里跡（古閑前地区）の発掘調査では、弥生時代後期の竪穴建物、古墳時代前期、後期の竪穴建物及び掘立柱建物が確認され、古墳時代の掘立柱建物の増加から米の保管機能を持った集落の可能性が指摘されている。

一方、玉名市教育委員会による発掘調査では、平成21年度（2009年度）の両迫間日渡遺跡の調査で、古墳時代の祭祀遺構や須恵器・土師器・土製模造品・剣形石製品などの石製模造品などが出土し、令和２年度（2020年度）の玉名平野遺跡群の調査では、古代末の畦畔や水田、木橋が確認されている。

令和２年度（2020年度）から熊本県教育委員会が実施した県道玉名立花線（河崎工区）改築工事に伴う発掘調査は、熊本県が玉名平野遺跡群を遺跡名として使用する初めての調査で、今回の調査で３次を数える。令和２年度（2020年度）に実施した第１次調査では、弥生時代の竪穴建物、中期の甕棺墓（小児骨一部残存）、古代の竪穴建物、土坑墓（成人骨残存）が確認された。第２次調査と併せて、古代から近世にかけての水田の広がりが確認されている（第２図）。

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

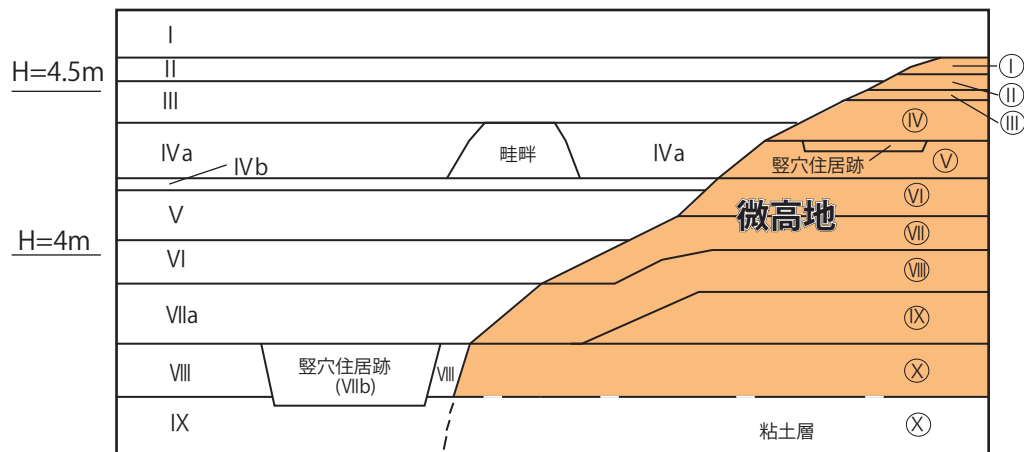
1 調査区の設定

玉名平野遺跡群第3次調査における調査区は、平成31年（2019年）3月18・19日及び令和2年（2020年）11月20日の予備調査の結果から、玉名立花線（河崎工区）の路線上、玉名バイパスに取りつく北端部付近の面積1,234.07㎡の範囲に設定した（第3図）。当該調査区は、柳町遺跡の隣接地に当たる。なお、調査にあたっては、土砂の崩落を防ぐため調査区の四周には事前に矢板を設置した。

2 基本層序

玉名平野遺跡群第3次調査における基本層序については調査区の大部分に自然流路が広がり、北側に微高地が認められることから、Ⅰ層（表土）下位の層序は自然流路内と微高地とではそれぞれ異なる（第4～10図）。

まず、自然流路内であるが、Ⅱ～Ⅸ層までの層序が認められる。Ⅱ層（灰黄褐色砂質土）は近世～現代遺物の包含層で、Ⅲ層（灰黄褐色粘質土）は近世遺物の包含層となる。Ⅳa層（褐灰色粘質土）が中世の水田層で、Ⅳb層（褐灰色粘質土）が床土と考えられる。Ⅴ層（明黄褐色粘質土）に弥生時代末～古墳時代前期の遺物、Ⅵ層（にぶい黄褐色粘質土）に弥生時代の遺物がわずかに包含され、Ⅶa層（褐灰色粘質土）には、弥生時代早期の突帯文土器が多く包含されていたが、北側微高地から流入した遺物と考えられる。Ⅶb層（褐灰色粘質土）はⅦa層より古い堆積土で部分的に認められ、Ⅷ層（褐灰色粘質土）はやや陸地化した段階の堆積層となる。今回の調査では、Ⅷ層を掘り込んだ縄文時代晩期の建物跡が1基検出された。Ⅷ層の下層には、縄文海進に由来する有明海の粘土層と考えられるⅨ層（青灰色粘土）が確認されている。



Ⅰ層：表土
Ⅱ層：灰黄褐色砂質土 10YR6/2
Ⅲ層：灰黄褐色粘質土 10YR5/2
Ⅳa層：褐灰色粘質土 10YR6/1
Ⅳb層：褐灰色粘質土 10YR5/1
Ⅴ層：明黄褐色粘質土 10YR7/6
Ⅵ層：にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3
Ⅶa層：褐灰色粘質土 10YR6/1
Ⅶb層：褐灰色粘質土 10YR5/1
Ⅷ層：褐灰色粘質土 10YR4/1
Ⅸ層：青灰色粘土 5B5/1

①層：にぶい黄褐色土 10YR5/3
②層：にぶい黄褐色砂質土 10YR5/4
③層：灰黄褐色粘質土 10YR5/2
④層：灰黄褐色粘質土 10YR4/2
⑤層：にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3
⑥層：灰黄褐色暗褐色土 10YR4/2
⑦層：暗褐色粘質土 10YR3/3
⑧層：浅黄褐色粘質土 10YR8/4
⑨層：灰白色粘質土 10YR8/2
⑩層：灰白色粘質土 10YR8/1

第3図 調査区基本層序図

一方、北側微高地では①～⑩層までの層序が確認された。①層（にぶい黄褐色砂質土）、②層（にぶい黄褐色砂質土）、③層（灰黄褐色粘質土）までは後世の堆積層である。④層（灰黄褐色粘質土）は弥生時代末から古墳時代前期の遺物が包含され、その下層に⑤層（にぶい黄褐色粘質土）が堆積する。今回の調査では、⑤層に掘り込んだ弥生時代末～古墳時代前期の遺構が確認された。それ以下、⑥層（灰黄褐色暗褐色土）、⑦層（浅黄橙色粘質土）、⑧層（浅黄橙色粘質土）、⑨層（灰白色粘質土）、⑩層（灰白色粘質土）は自然堆積層となる。なお、北側微高地の層序では自然流路内のⅨ層の堆積が認められないことから、縄文海進時においても陸地であったことが確認できる。

3 調査の方法

（１）表土掘削

表土（土層）掘削については、調査区北側から順次実施した。掘削にあたっては、0.4 m³平爪のバックフォを2台使用し、1台は掘削、もう1台は排土運搬の用に供した。基本Ⅱ層上面までの掘削を実施した。

（２）グリッドの設定

調査グリッドの設定は世界測地系第Ⅱ系を基準に、X＝－6,780、Y＝－40,130を始点とし、10 m方眼を単位として設定した。南北行は始点から南へA～Gの7行をアルファベットとし、東西列は始点から東へ1～5の5列を算用数字として、各グリッドの名称は「行名称－列名称」（例：A－1グリッド）で記録した。

（３）包含層掘削、遺構検出・掘削

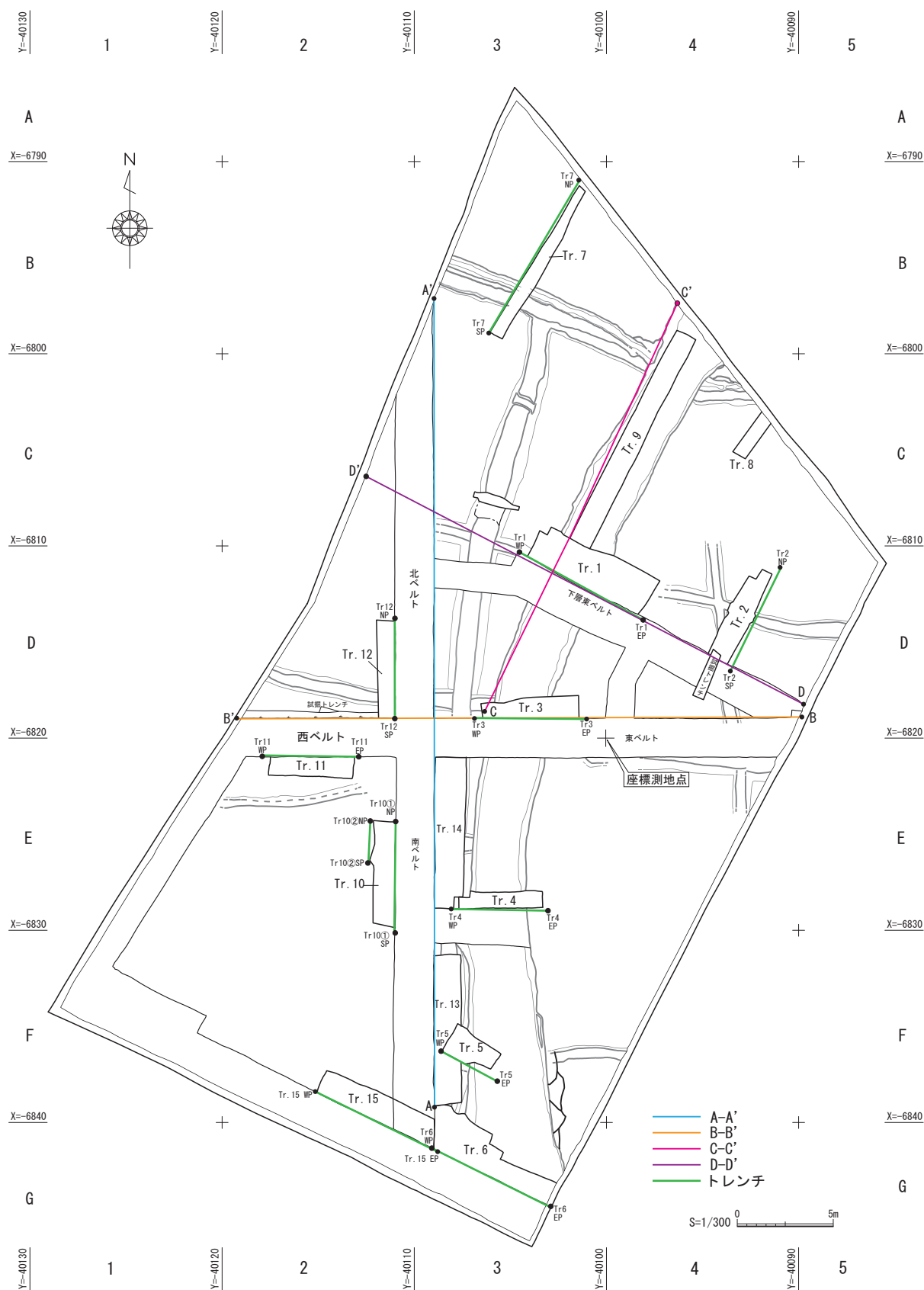
表土掘削後、包含層の掘削については、日照による土壌の硬化が著しいため主に大型スコップ、ジョレンを用い、遺構面3面目までの掘削を段階ごとに実施した。遺構検出・掘削については移植ゴテ、ねじり鎌等を用いて人力にて実施した。

（４）遺構実測

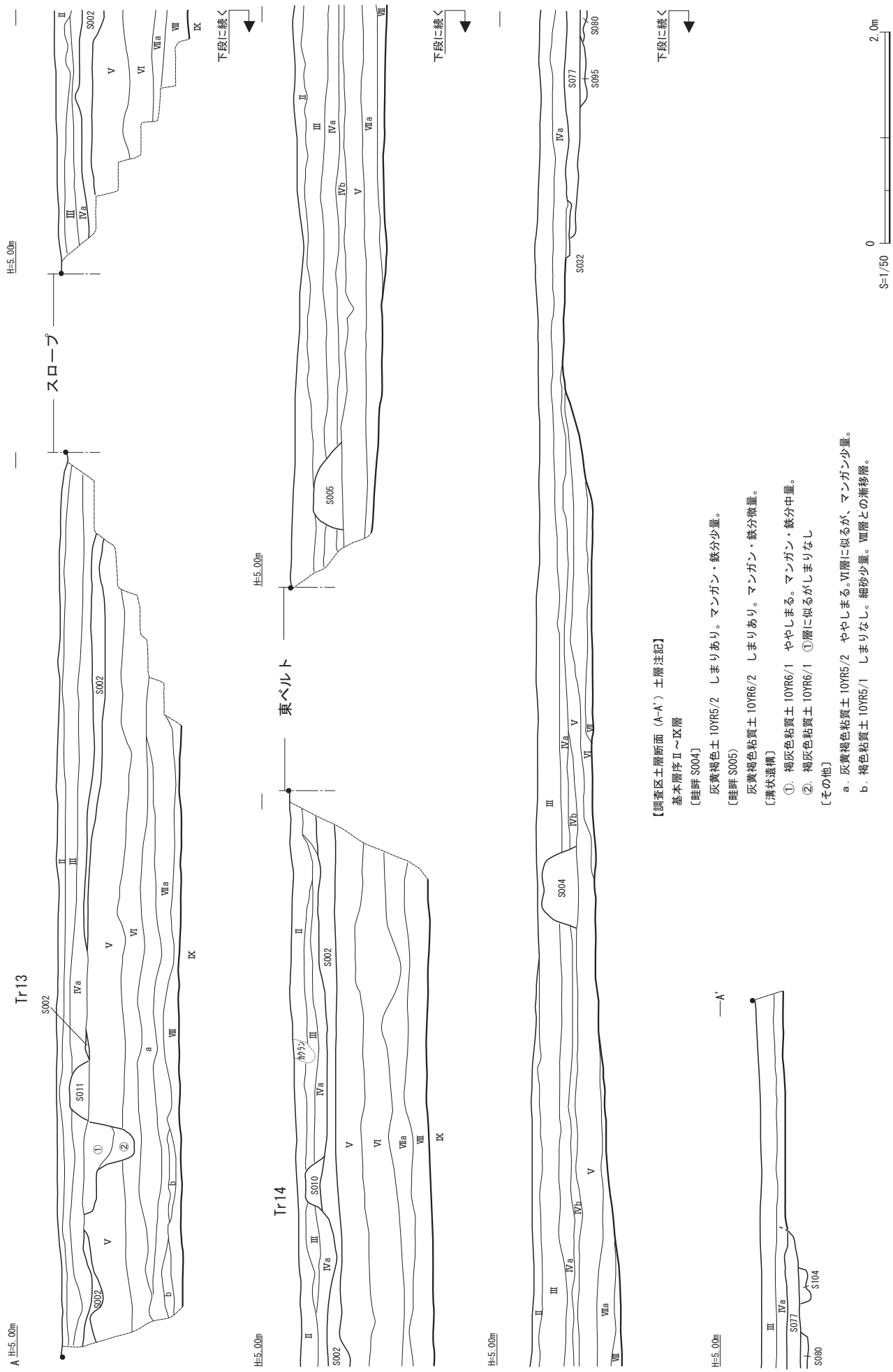
遺構実測の方法については、土層断面図は手実測を基本として、平面遺構実測は光波測距義を用いて手実測した。土層断面実測と平面遺構実測はいずれも縮尺1／20のサイズでA2判の方眼紙を用いた。遺構名は、すべてS番号と001から始まる算用数字の組み合わせ（例：S 001）で遺構の発見順に名付けた。

（５）写真撮影

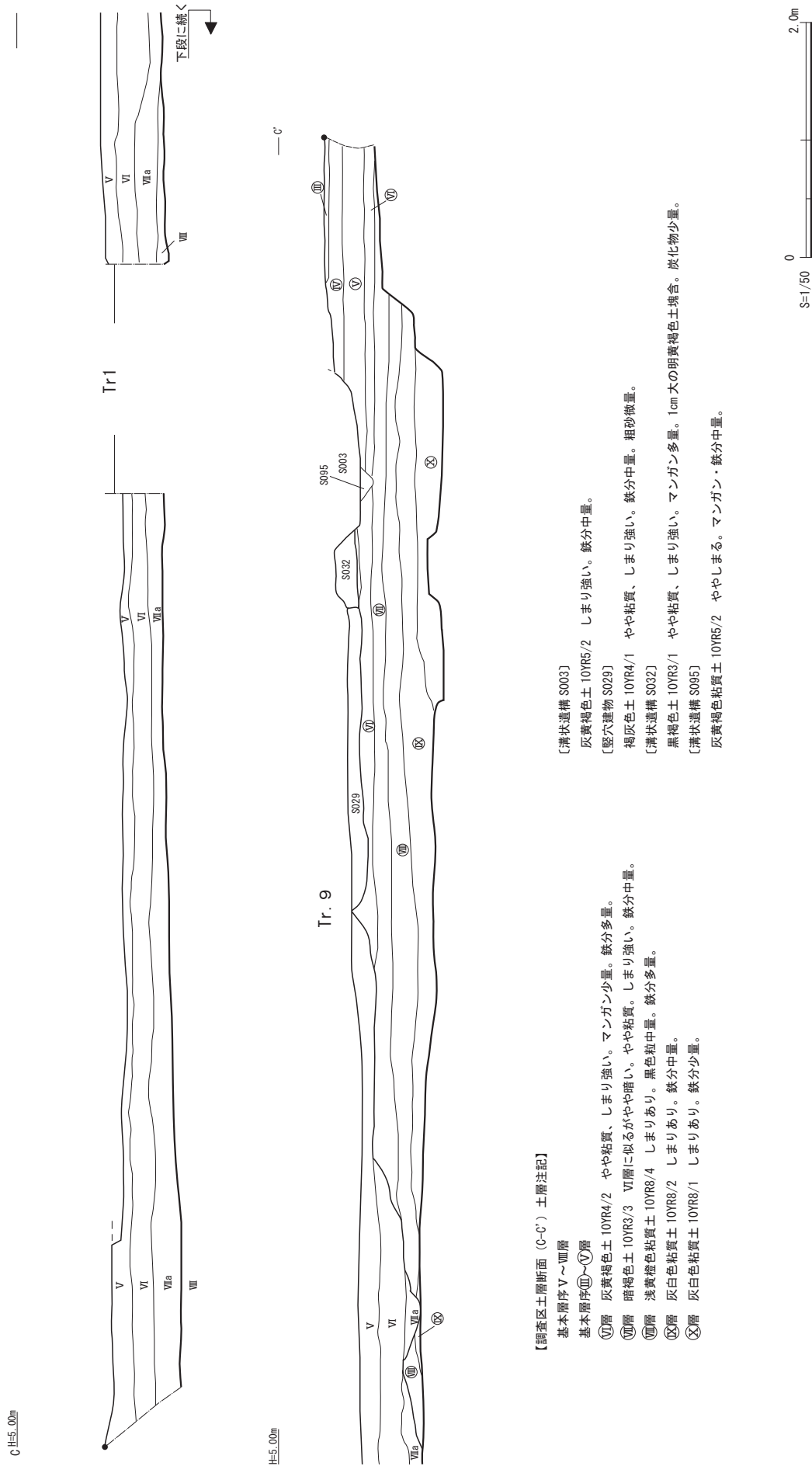
遺構の写真撮影は、フルサイズの一画レフカメラ（ニコンD 810）で撮影した。1カットあたりグレースケール撮影後、露出を①適正、②アンダー、③オーバーの3種類で撮影した。撮影した写真データはJPEGとRAFデータで保存した。空中写真撮影については各遺構面の完掘時に計3回行った。



第4図 調査区ベルト及びトレンチ土層断面ポイント図



第5図 調査区土層断面図 (A—A')



【調査区土層断面 (C-C') 土層注記】

基本層序 V ~ VII 層

基本層序 Ⅹ ~ Ⅶ 層

Ⅶ層 灰黄褐色土 10YR4/2 やや粘質、しまり強い。マンガン少量。鉄分多量。

Ⅵ層 暗褐色土 10YR3/3 VI層に似るがやや暗い。やや粘質。しまり強い。鉄分中量。

Ⅴ層 浅黄橙色粘質土 10YR8/4 しまりあり。黒色粒中量。鉄分多量。

Ⅳ層 灰白色粘質土 10YR8/2 しまりあり。鉄分中量。

Ⅲ層 灰白色粘質土 10YR8/1 しまりあり。鉄分少量。

Ⅱ層 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 ややしめる。マンガン・鉄分中量。

Ⅰ層 灰黄褐色土 10YR5/2 しまり強い。鉄分中量。

Ⅶ層 褐色土 10YR4/1 やや粘質、しまり強い。鉄分中量。粗砂微量。

Ⅵ層 灰黄褐色土 10YR4/1 やや粘質、しまり強い。鉄分中量。粗砂微量。

Ⅴ層 灰黄褐色土 10YR4/1 やや粘質、しまり強い。鉄分中量。粗砂微量。

Ⅳ層 灰黄褐色土 10YR4/1 やや粘質、しまり強い。鉄分中量。粗砂微量。

Ⅲ層 灰黄褐色土 10YR4/1 やや粘質、しまり強い。鉄分中量。粗砂微量。

Ⅱ層 灰黄褐色土 10YR4/1 やや粘質、しまり強い。鉄分中量。粗砂微量。

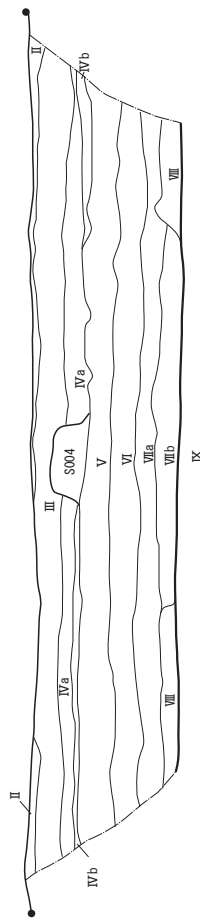
Ⅰ層 灰黄褐色土 10YR4/1 やや粘質、しまり強い。鉄分中量。粗砂微量。

第7図 調査区土層断面図 (C-C')

Tr2 東壁土層断面

NP H=5.00m

— SP



【Tr2 東壁土層注記】

基本層序Ⅱ～Ⅹ層

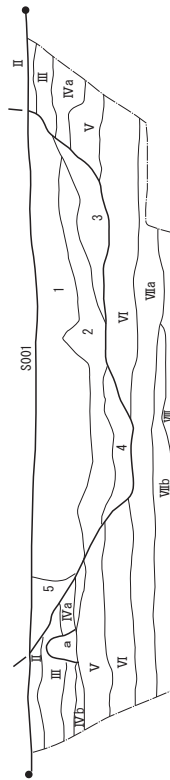
〔畦畔 S004〕

灰黄褐色粘質土 10YR5/2 しまり強い。マンガン少量。黄橙色粒中量。

Tr4 南壁土層断面

EP H=5.00m

— WP



【Tr4 南壁土層注記】

基本層序Ⅱ～Ⅹ層

〔溝 S001〕

1. 灰黄褐色土 10YR5/2 しまりあり。鉄分多量。砂粒多量。(Tr1 南壁 S001、1 層に同じ)
2. 暗青灰色土 5B4/1 やや粘性。ややしまる。砂粒中量。(Tr1 南壁 S001、3 層に同じ)
3. にぶい黄橙色土 10YR5/3 しまりなし。砂粒多量。暗青灰色 5B4/1 粘土ブロック含。
4. 褐灰色粘質土 10YR4/1 しまりなし。マンガン・鉄分少量。
5. にぶい黄橙色土 10YR6/3 しまり強い。砂粒多量。(Tr1 南壁 S001、5 層に同じ)

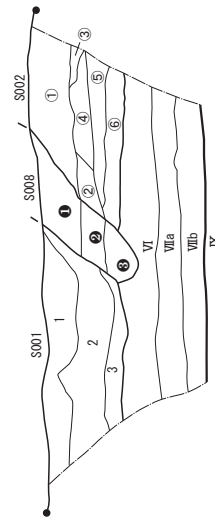
〔その他〕

- a. 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 ややしまる。マンガン少量。鉄分多量。

Tr5 南壁土層断面

EP H=5.00m

— WP



【Tr5 南壁土層注記】

基本層序Ⅵ～Ⅹ層

〔溝 S001〕

1. 灰黄褐色土 10YR5/2 しまりあり。鉄分多量。砂粒多量。(Tr1 南壁 S001、1 層に同じ)
2. 暗青灰色土 5B4/1 やや粘性。ややしまる。砂粒中量。(Tr1 南壁 S001、3 層に同じ)
3. にぶい黄橙色土 10YR5/3 しまりなし。砂粒多量。暗青灰色 5B4/1 粘土ブロック混。

〔畦畔 S002〕

- ①. 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 しまりあり。マンガン中量。鉄分多量。
- ②. 褐灰色粘質土 10YR4/1 ややしまる。マンガン・鉄分中量。
- ③. 褐灰色粘質土 10YR5/2 軟らかい。マンガン・鉄分少量。
- ④. 明黄褐色粘質土 10YR6/5 しまりあり。マンガン少量。鉄分多量。
- ⑤. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4 硬くしまる。マンガン多量。④層に比べ粘性弱め。

〔溝状遺構 S008〕

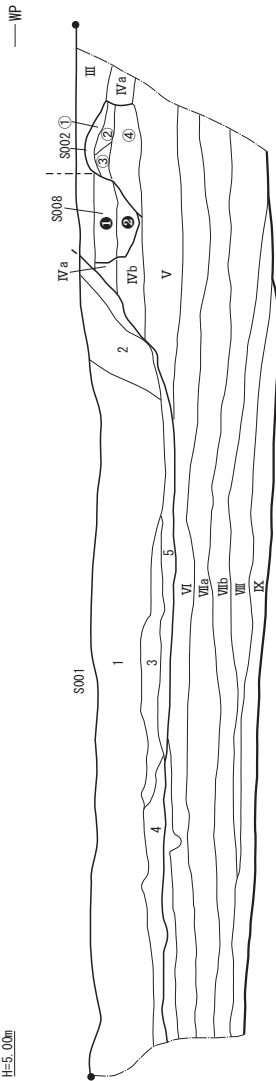
- ①. 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 しまりあり。マンガン少量。鉄分多量。
- ②. 褐灰色粘質土 10YR6/1 ややしまる。マンガン少量。鉄分中量。
- ③. 褐灰色粘質土 10YR5/1 ややしまる。マンガン多量。

第9図 トレンチ2・4・5土層断面図



Tr6 南壁土層断面

EP H=5.00m



【Tr6 南壁土層注記】
基本層序Ⅲ～Ⅸ層

〔溝 S001〕

1. 褐灰色土 10YR4/1 やや粘質。青灰色土混。 細砂多量。
2. 褐灰色土 10YR5/1 1層に似る。5・6層との境に層状に中砂（最大2.0mm）多量。
3. 褐灰色粘質土 10YR4/1 ややしまる。灰白色粒中量。
4. 灰黄褐色土 10YR5/2 灰白色粒多量。
5. 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 ややしまる。細砂少量。
6. 褐灰色粘質土 10YR6/1 ややしまる。マンガン中量。鉄分多量。

〔畦畔 S002〕

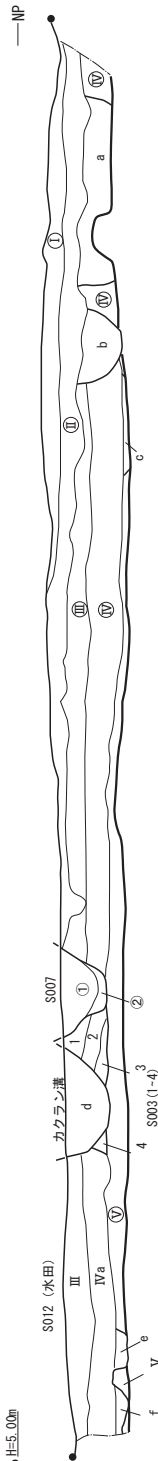
- ① にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4 しまりあり。マンガン少量。
- ② 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 しまりあり。マンガン・鉄分多量。
- ③ 褐灰色粘質土 10YR6/1 しまりあり。マンガン・鉄分少量。
- ④ 褐灰色粘質土 10YR6/2 硬くしまる。マンガン・鉄分多量。

〔溝状遺構 S008〕

- ① にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3 しまりあり。マンガン少量・鉄分中量。
- ② 灰黄褐色粘質土 10YR6/1 しまりあり。マンガン中量。鉄分多量。細砂少量。

Tr7 西壁土層断面

SP H=5.00m



【Tr7 南壁土層注記】

基本層序Ⅲ～Ⅳa層

- ① にぶい黄褐色砂質土 10YR5/3 しまりあり。マンガン中量。
- ② にぶい黄褐色砂質土 10YR5/4 しまりあり。マンガン中量。1～2mm大の砂粒少量。
- ③ 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 ややしまる。マンガン・鉄分中量。
- ④ 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 しまりなし。マンガン中量。鉄分多量。弥生末～古墳初の土器片。
- ⑤ にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3 しまりなし。細砂少量。マンガン中量。

〔畦畔 S003〕

1. にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3 しまりあり。マンガン・鉄分中量。
2. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3 しまりあり。マンガン・鉄分中量。
3. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4 ややしまる。マンガン中量。
4. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/4 ややしまる。3層に似る

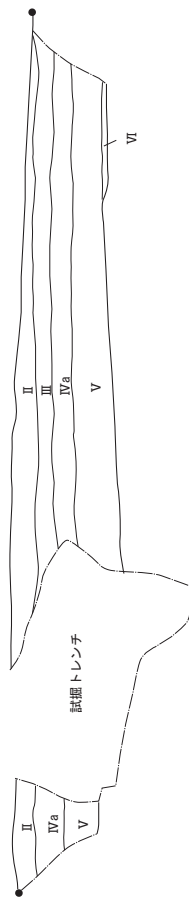
〔溝状遺構 S007〕

- ① 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 しまりあり。マンガン中量。鉄分多量。
- ② 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 しまりあり。マンガン中量。鉄分多量。

Tr10 東壁土層断面

NP H=5.00m

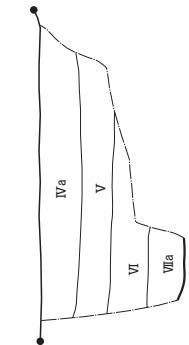
—SP



Tr10 西壁土層断面

Sp H=5.00m

—NP

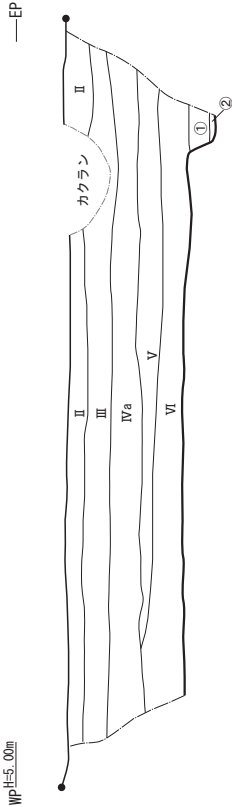


【Tr10 東・西壁土層注記】
基本層序Ⅱ～Ⅳa層

S=1/50 0 2.0m

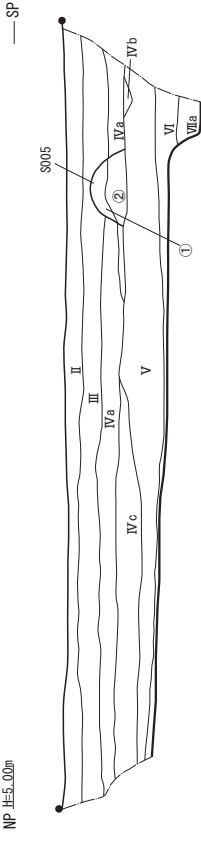
第10図 トレンチ6・7・10土層断面図

Tr11 北壁土層断面



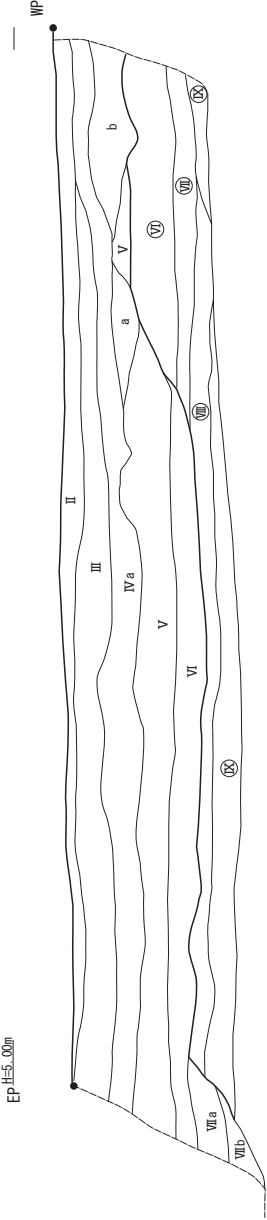
【Tr11 北壁土層注記】
基本層序Ⅱ～Ⅵ層
①. 明黄褐色粘質土 10YR7/6 軟らかい。鉄分少量。炭化物含。
②. 灰白色粘質土 10YR7/1 軟らかい。炭化物含。

Tr12 東壁土層断面



【Tr12 東壁土層注記】
基本層序Ⅱ～Ⅶa層
〔畦畔 S005〕
①. 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 しまり強い。マンガン・鉄分少量。
②. 褐灰色粘質土 10YR5/1 しまり強い。マンガン少量。鉄分中量。

Tr15 南壁土層断面



【Tr15 南壁土層注記】
基本層序Ⅱ～Ⅶb層
基本層序①～⑧層
〔その他〕
a. 褐灰色粘質土 10YR6/1 しまりなし。マンガン多量。鉄分中量。
b. 褐灰色粘質土 10YR6/1 ややしまる。マンガン少量。鉄分中量。



第 11 図 トレンチ 11・12・15 土層断面図

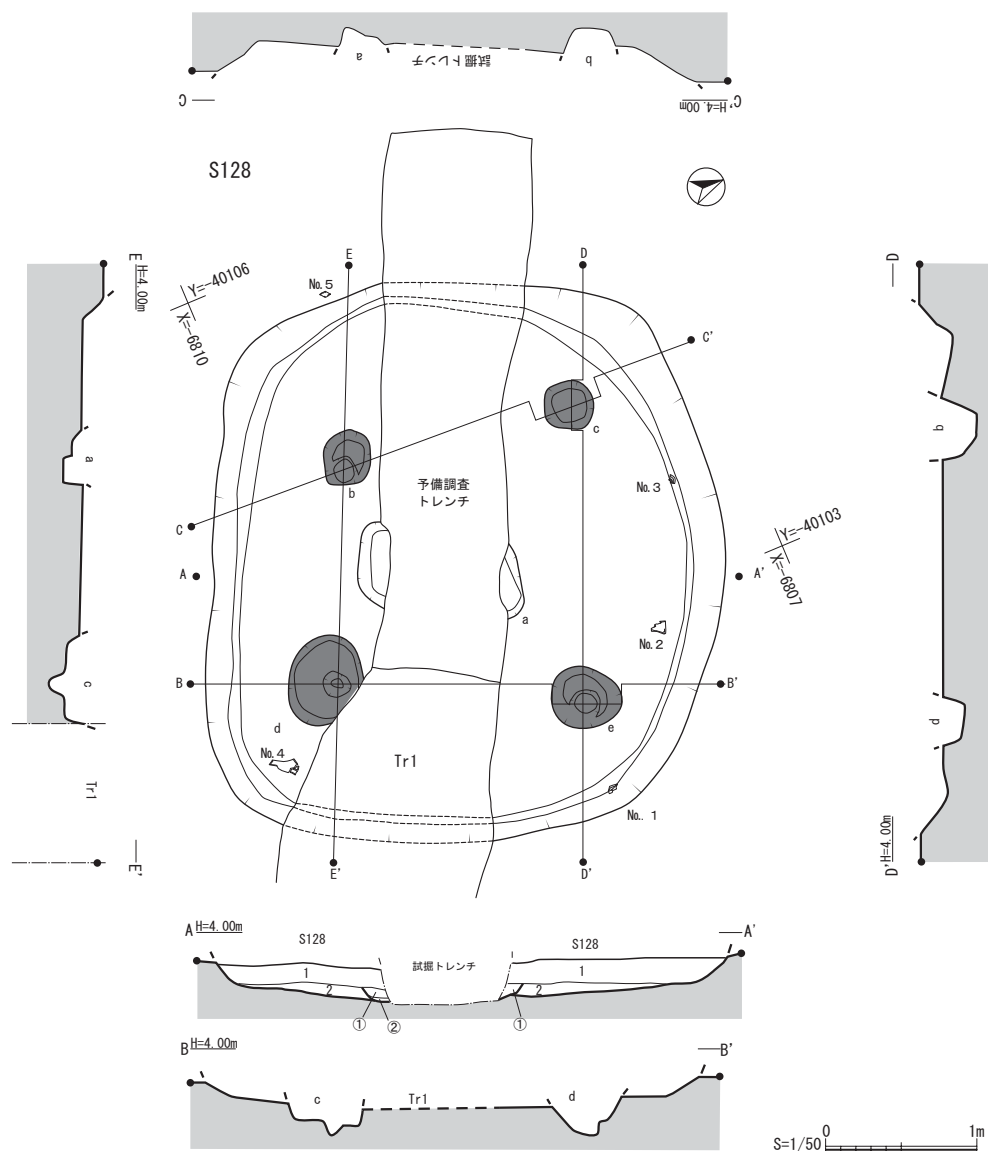
第2節 遺構・遺物

1 縄文時代晩期の遺構・遺物

調査区の北側微高地から自然流路内へ傾斜する斜面上のⅧ層上面において竪穴建物1基（竪穴建物 S128）を検出した（第13図）。

竪穴建物 S128 （第12図）

調査区の北側微高地からやや南に下った自然流路の斜面上で検出された竪穴建物跡である。C 3・D 3 グリッドにまたがって所在する。建物の平面形は南北 3.35 m、東西 3.65 m のやや歪な隅丸方形を呈し、竪穴の深さは最大 22cm を測る。建物中央付近に厚 8cm 程度の貼床状の粘土層（1層）が認められた。予備調査時のトレンチで全体規模は判然としないが、建物中央付近に長軸 1.06 m の歪な楕円形を呈する深さ 10cm の土坑（a）が確認されたが、炉穴の可能性がある。貼床状粘土層の除去後、床面の四隅近くに 4 基の柱穴（b～e）が確認された。柱穴は径 30～58cm のやや歪な円形で、深さ 8～22cm を測る。建物の支柱穴と考えられる。また、竪穴建物 S128 の南縁より約 1.2 m 南に土坑 1 基（土坑 S143）を検出した。平面形状は径 1.2 m の円形を呈する。



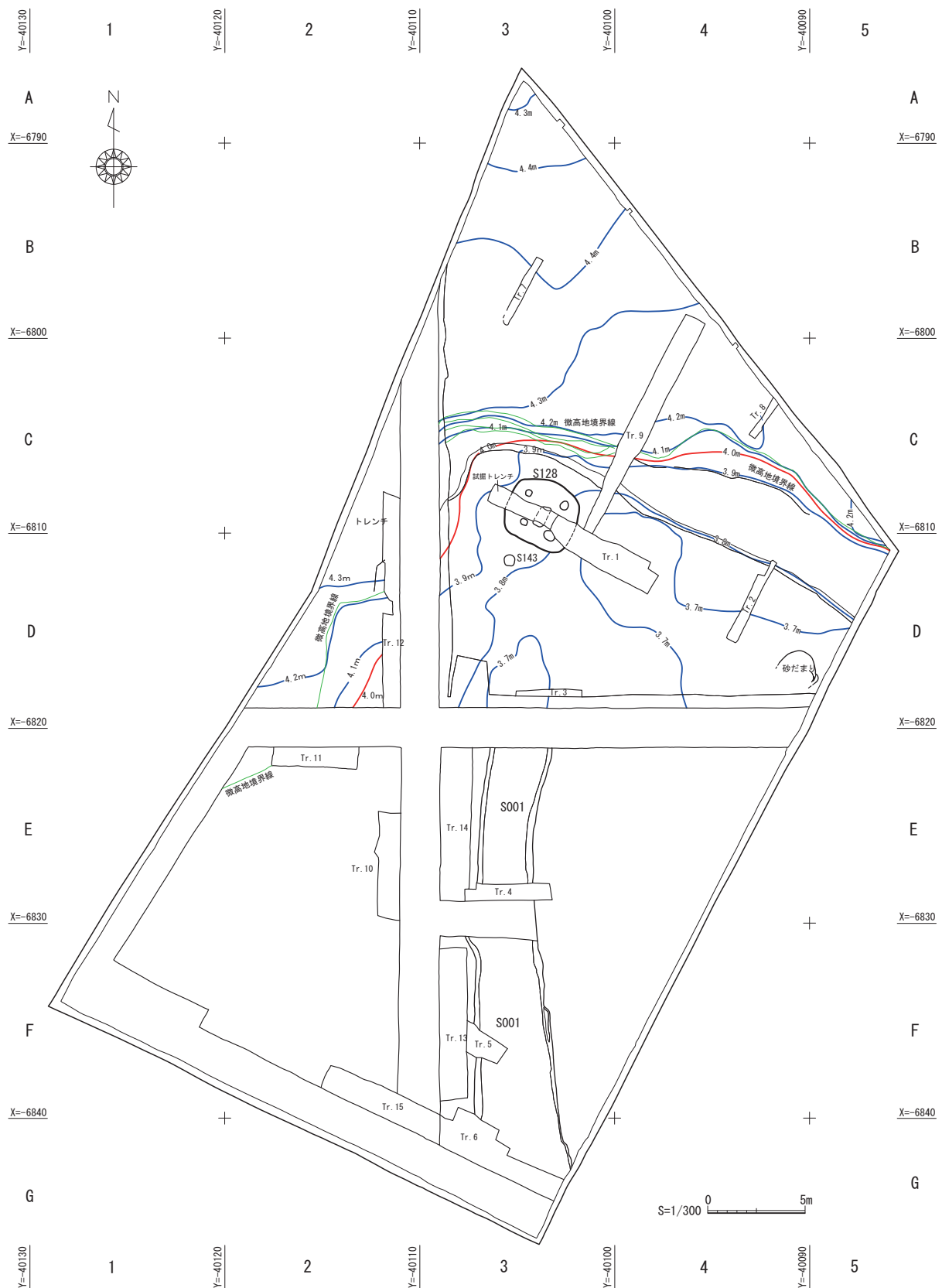
〔竪穴建物 S128〕

1. 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 しまりあり。粗砂中量。明黄褐色土多量。
2. 黄灰色粘質土 10YR5/1 硬くしまる。張床と考えられる。

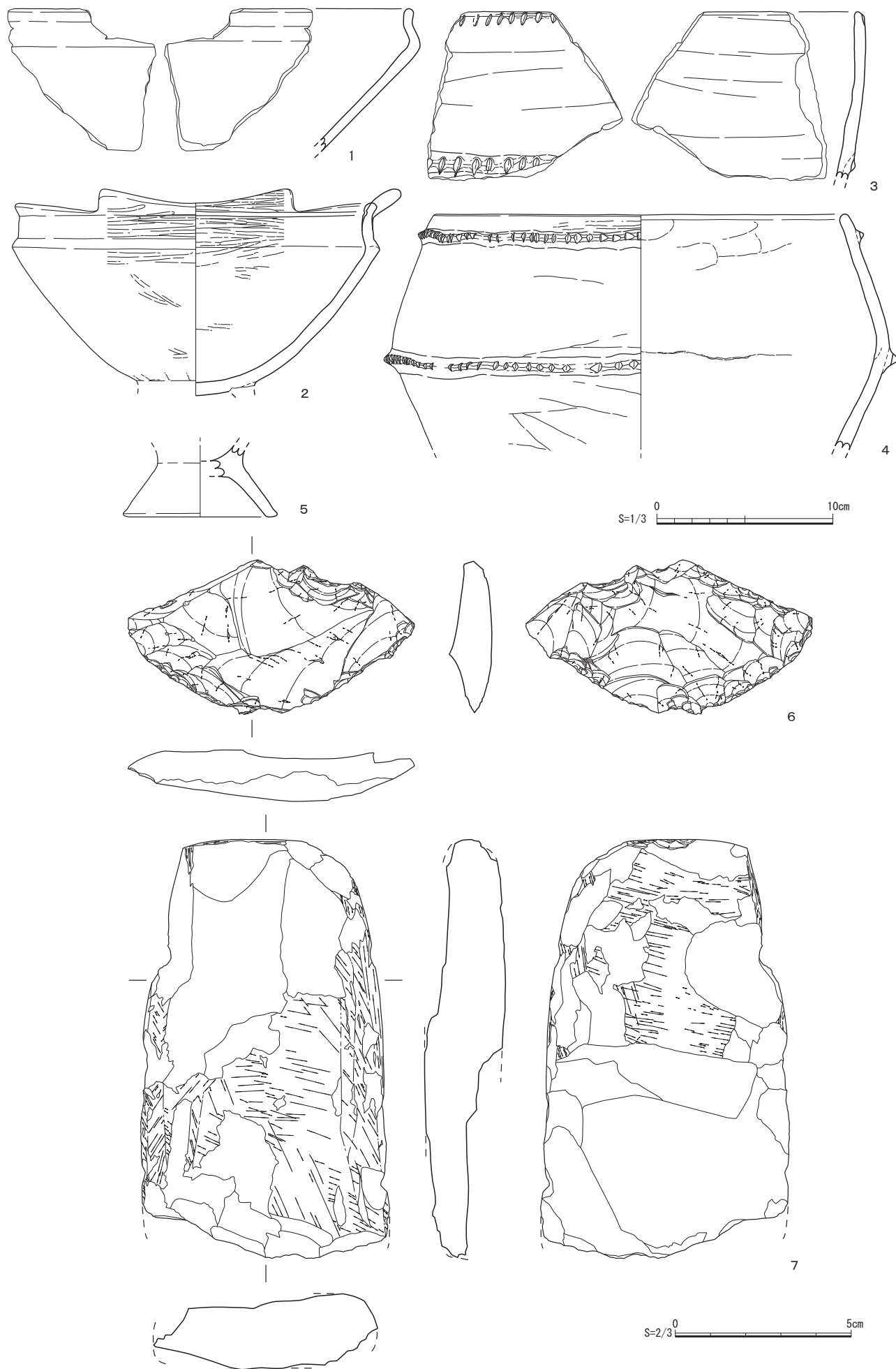
土坑 e

- ①. 褐灰色粘質土 7.5YR5/1 しまりあり。粗砂少量。炭化物少量。
 - ②. 浅黄橙色粘質土 10YR8/3 しまりあり。
- * 炉跡と考えられる

第12図 竪穴建物 S128 平・断面図



第 13 図 調査区遺構配置図 (3 面目)



第 14 図 竪穴建物 S128 出土遺物実測図

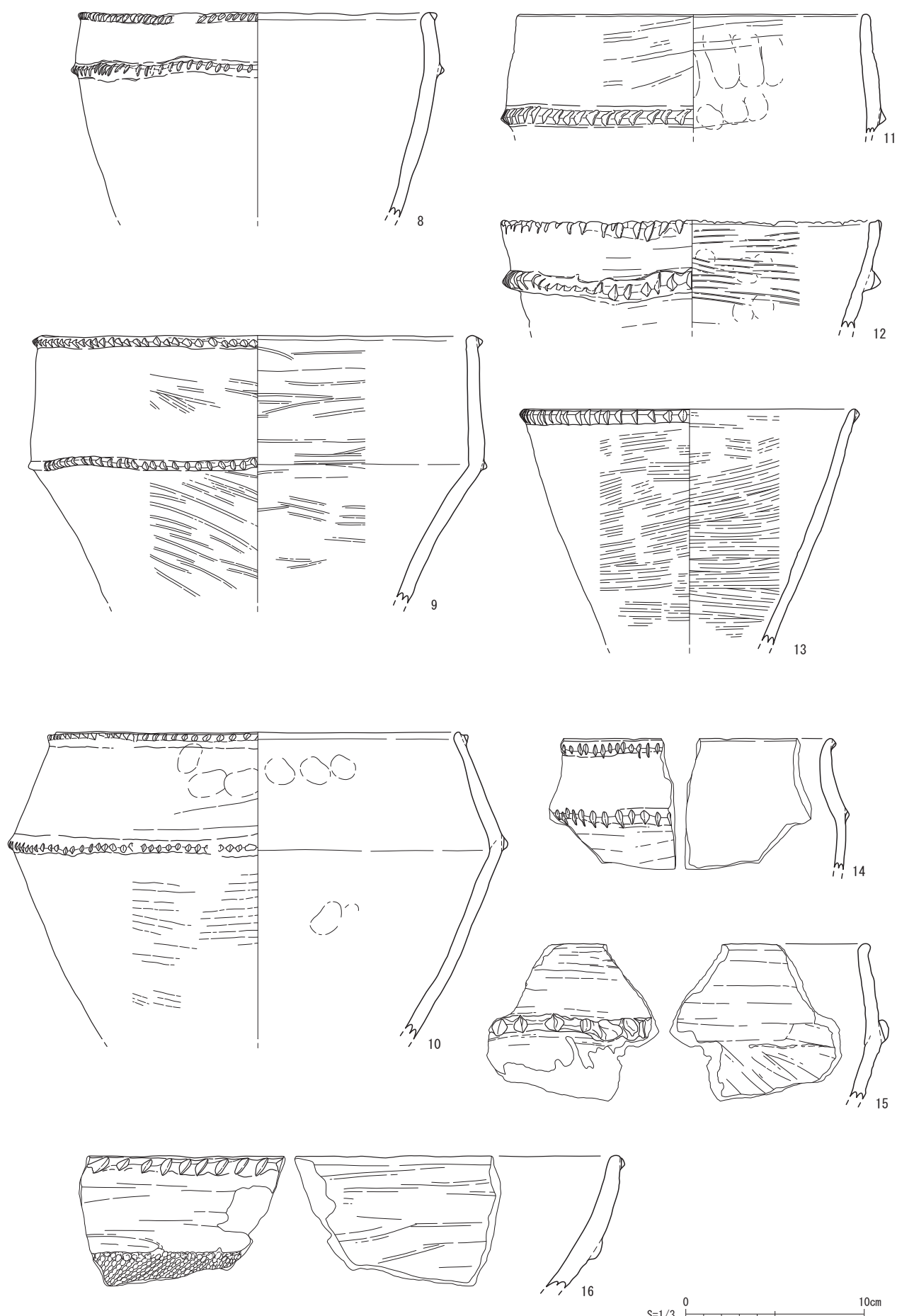
第14図1～7は竪穴建物S128の埋土中からの出土遺物である。1・2は縄文時代晩期の浅鉢である。1は口縁～体部片で、口縁部は屈曲部から短くやや外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げる。2はほぼ完形で、口径19.8cm、器高10.4cmを測る。口縁部は屈曲部からやや外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げる。底部に脚部を持つ形態であるが、欠損する。口縁部の片側にリボン状の突起を付す。3・4は深鉢である。3は口縁～胴部片で、突帯文土器である。胴部に断面三角形の突帯を巡らし、それに刻みを施す。口縁部には外縁に刻目だけが施される。4は口縁～胴部片で、突帯文土器である。復元口径25.0cmを測る。胴部でくの字に屈曲するもので、口縁部よりやや下がった箇所と屈曲部に断面三角形の幅狭な突帯を巡らし、それに刻目が施される。5は甕形土器の脚部片で、脚端部をやや丸く仕上げる。6・7は石器である。6は削器で、石材はサヌカイトである。粗めの剥離により刃部を円弧状に作り出しており、一部欠損する。7は磨製石斧で、石材は層灰岩である。基部側のみ残存し、刃部は欠損する。

2 弥生時代早期の遺物

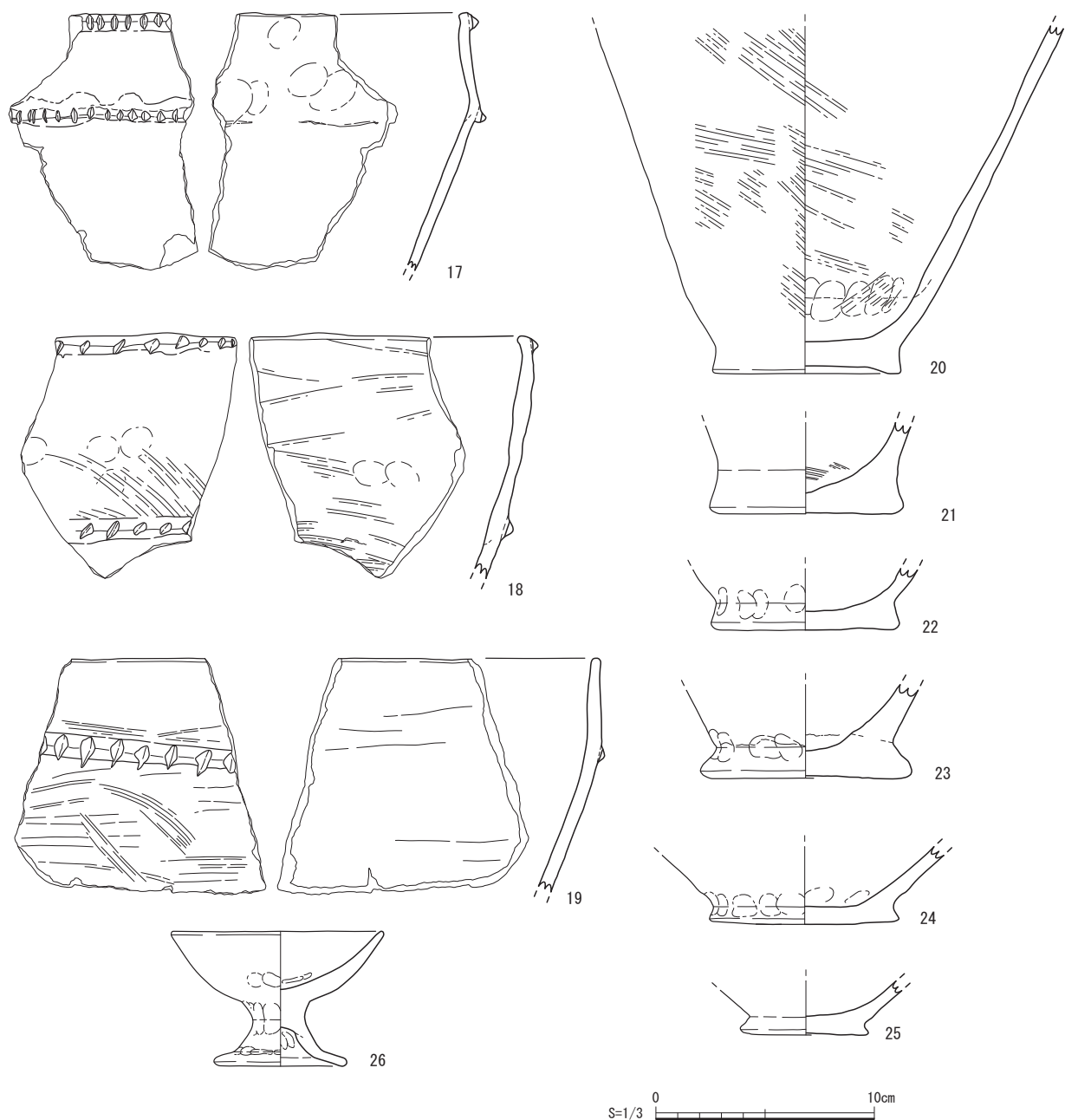
調査区の北側微高地からやや南に下った自然流路内から、弥生時代早期に比定される突帯文土器が比較的主とまった状態で出土した(C3・D3グリッド周辺)。自然流路内の基本層序Ⅶa層からの出土で、特に北側微高地の落ち際近くに摩耗の少ない状態の土器が多く認められた。当該期の遺構は確認できていないものの、こうした出土状況から北側微高地に居住域があったものと思われ、何らかの理由で廃棄された土器群であることが想定される。

第15図8～16は深鉢で、いずれも突帯文土器である。8は口縁～胴部片で、復元口径19.8cmを測る。胴部はくの字に屈曲し、口縁端部に断面台形、屈曲部に断面三角形の突帯を巡らし、それに刻目が施される。9は口縁～胴部片で、復元口径24.0cmを測る。胴部でくの字に屈曲し、口縁部と屈曲部に断面三角形の突帯を巡らし、それに刻目が施される。屈曲部から底部に向かってやや内湾しながら下りていく器形となる。10は口縁～胴部片で、復元口径23.4cmを測る。胴部でくの字に屈曲し、口縁部よりやや下と屈曲部に断面三角形の突帯を巡らし、それに太めの刻目が施される。11は口縁～胴部片で、復元口径19.4cmを測る。胴部はくの字に屈曲し、屈曲部にのみ断面三角形の突帯を巡らし、それに斜めの刻目が施される。12は口縁～胴部片で、復元口径20.8cmを測り、口縁部からそのまま底部へすばまっていく器形となる。口縁部より3.5cm程度下がった箇所に断面三角形の突帯を巡らし、口縁部と突帯部に刻目が施される。13は口縁～胴部片で、復元口径18.5cmを測る。口縁部からそのまま底部へすばまっていく器形となる。口縁端部にのみ断面三角形の突帯を巡らし、それに刻目が施される。14は口縁～胴部片で、胴部はくの字に屈曲し、口縁部と屈曲部に断面三角形の突帯を巡らし、それに刻目が施される。15は口縁～胴部片で、胴部でくの字に屈曲し、屈曲部に幅広の突帯を巡し、それに太めの刻目が施される。胴部外面下位に貝殻条痕が認められる。16は口縁～胴部片である。厚手のもので、口縁部に平たく幅広の突帯を巡らし、太めの刻目を施す。口縁端部より6.0cm下にも突帯を巡らす、刻目を施さない。その下位には縄目文が認められる。

第16図17～19も同じく深鉢で、突帯文土器である。17は口縁～胴部片で、胴部でくの字に屈曲し、口縁部と屈曲部に断面三角形の突帯を巡らし、それに刻目が施される。18は口縁～胴部片で、口縁部からそのまま底部へすばまっていく器形となる。口縁部と8.3cm下に断面三角形の突帯を巡らし、それに太めの刻目が施される。胴部上位の突帯間に斜方向の貝殻条痕が認められる。19は口縁～胴部片で、胴部でくの字に屈曲し、屈曲部にのみ断面三角形の突帯を巡らし、それに太めの刻目が施される。第16図20～23は深鉢の胴～底部片である。20は底径8.5cmを測る。やや上げ底で、胴部下端でややくびれ、胴部は外に開きながら立ち上がる。粘土盤の上に粘土帯を積み上げていった様子がよくわかる資料である。21は底径8.8cmを測る。厚手である。22は復元底径8.0cmを測る。23は底部片で、底径9.8cmを測る。厚手である。第16図24・25は浅鉢の底部片と思われる。24は底径8.7cmを測る。25は底径5.6cmを測り、比較的小型のものである。第16図26は高坏形の土製模造品である。調査時にⅣa層出土として取り上げたものの、上層からの混入遺物として捉えられるものである。口縁～底部までが残存し、復元口径9.7cm、器高6.1cmを測る。坏部は椀状に緩やかに立ち上がり、端部を丸く仕上げる。脚柱は緩やかに開き、端部近くで外に大きく開く。脚端部は肥厚させながら丸く



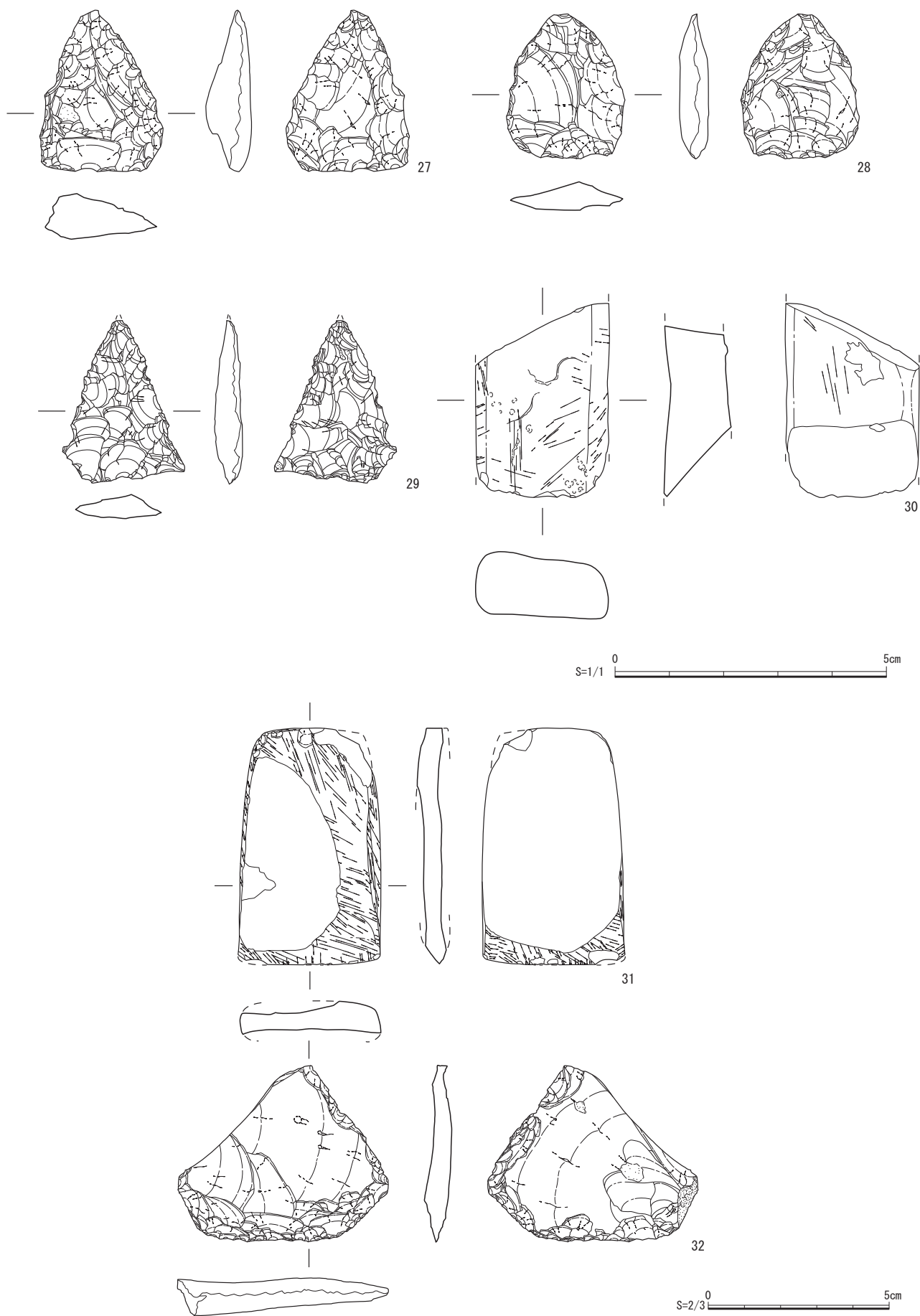
第 15 図 VII a 層出土遺物実測図①



第 16 図 VII a 層出土遺物実測図②

仕上げる。

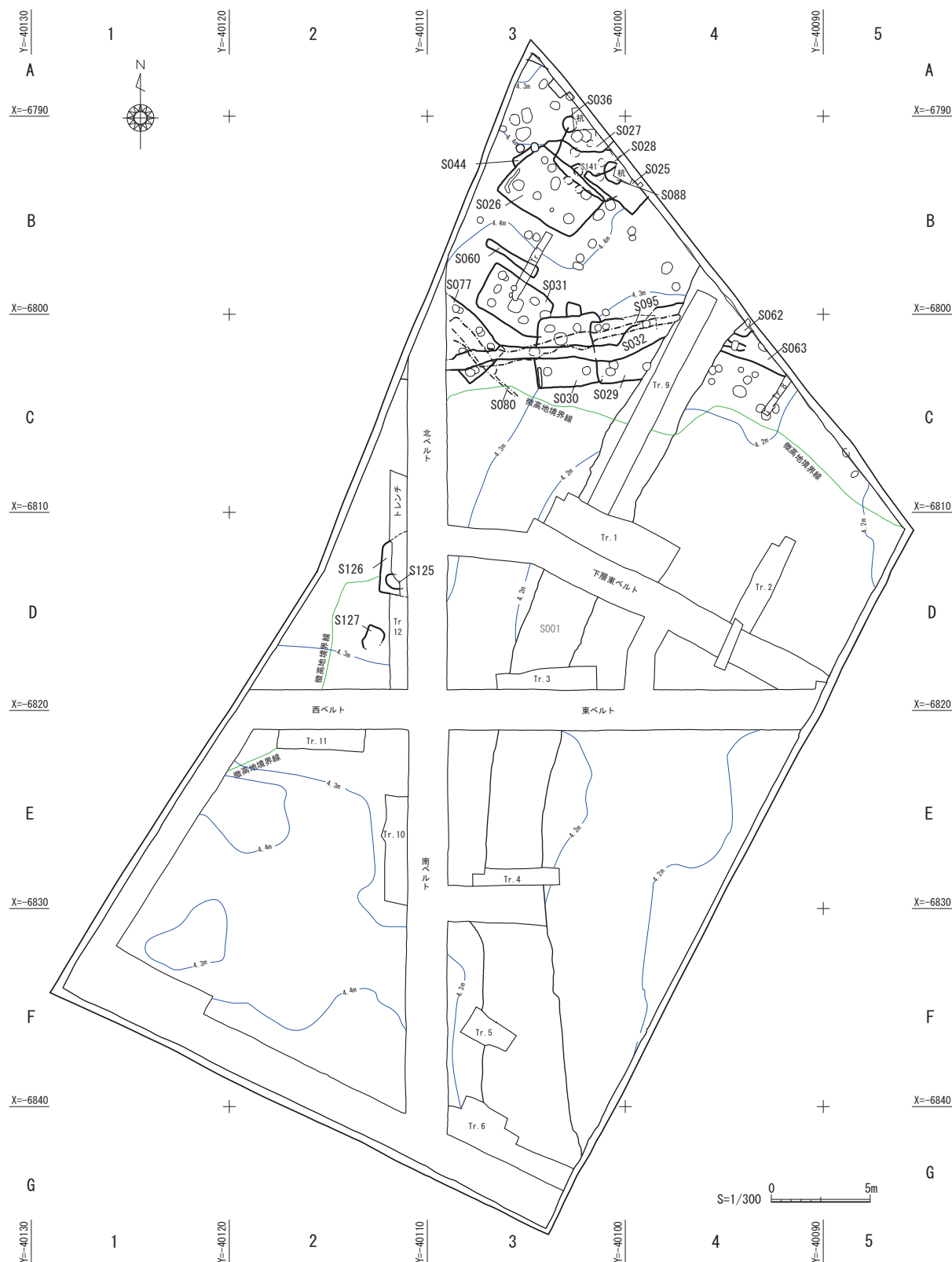
第 17 図 27 ～ 32 は石器である。27 は小型の削器と考えられ、石材はサヌカイトである。平面三角形を呈し、長辺に細かな剥離により刃部を作り出している。28 も小型の削器と考えられ、石材はサヌカイトである。平面三角形様を呈し、長辺に円弧状に刃部を作り出している。29 は石鏃で、石材は黒曜石である。全長 3.0cm の二等辺三角形鏃で、基部の先端は尖り、抉りはない。両面ともに丁寧な剥離により整形されている。30 は細長の磨製石器で、石材は細粒砂岩である。断面隅丸長方形を呈するもので、用途は不明である。31 は小型の磨製石斧で、石材は、層灰岩である。全長 6.5cm、幅 3.9cm を測る。欠損するものの、両面から磨いて刃部を作り出している様子がわかる。32 は削器で、石材はサヌカイトである。刃部を片面からの剥離により円弧状に作り出している。



第 17 図 VII a 層出土遺物実測図③

3 弥生時代末～古墳時代前期の遺構・遺物

調査区の北側微高地上から検出した遺構は、堅穴建物跡 7 基 (S025 ～ 027、029 ～ 031、077)、堅穴状遺構 2 基 (S063、125)、溝 4 条 (S028、032、060、095) とその他に土坑、ピット等がある (第 18 図)。いずれも微高地の基本層序Ⅴ層を検出面とし、標高 4.3 m 付近である。出土した土器から、弥生時代末から古墳時代前期にかけての遺構群と考えられる。以下に、各遺構及び遺物について記述する。



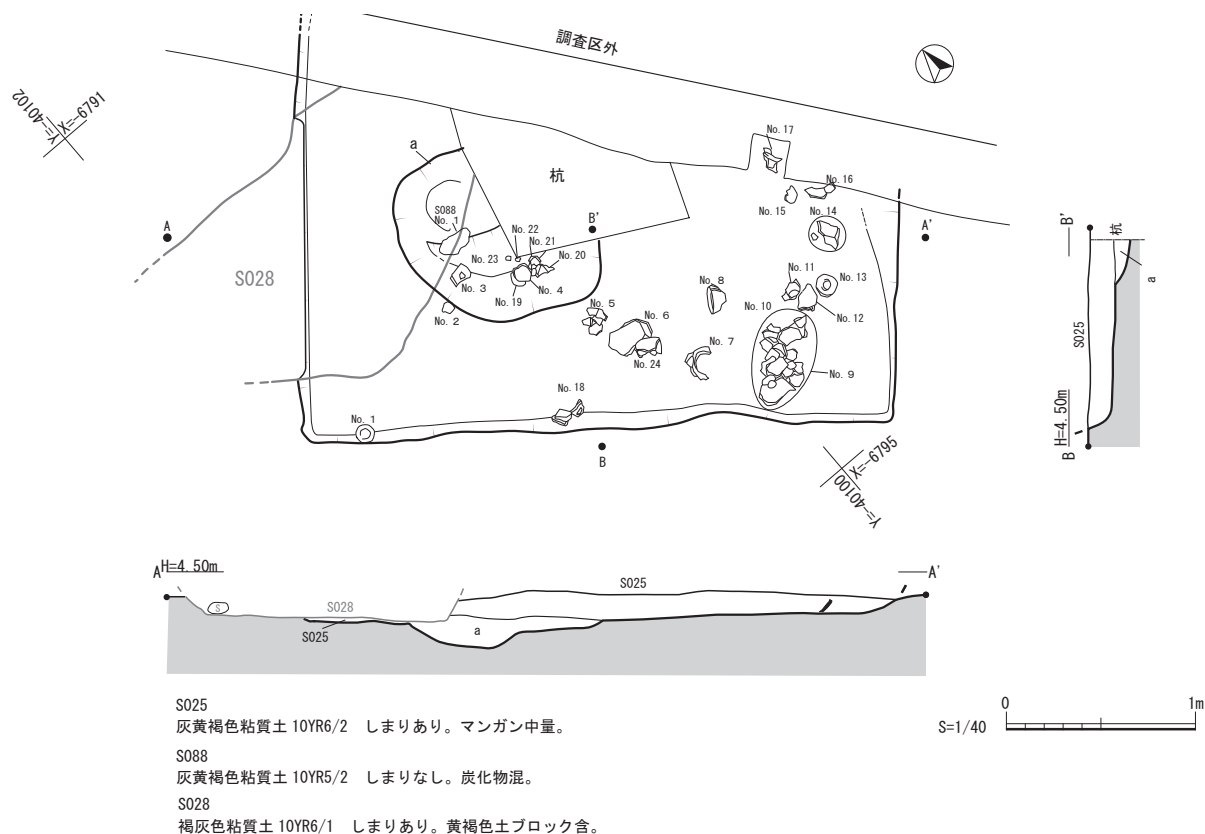
第 18 図 調査区遺構配置図 (2 面目)

（１）竪穴建物跡

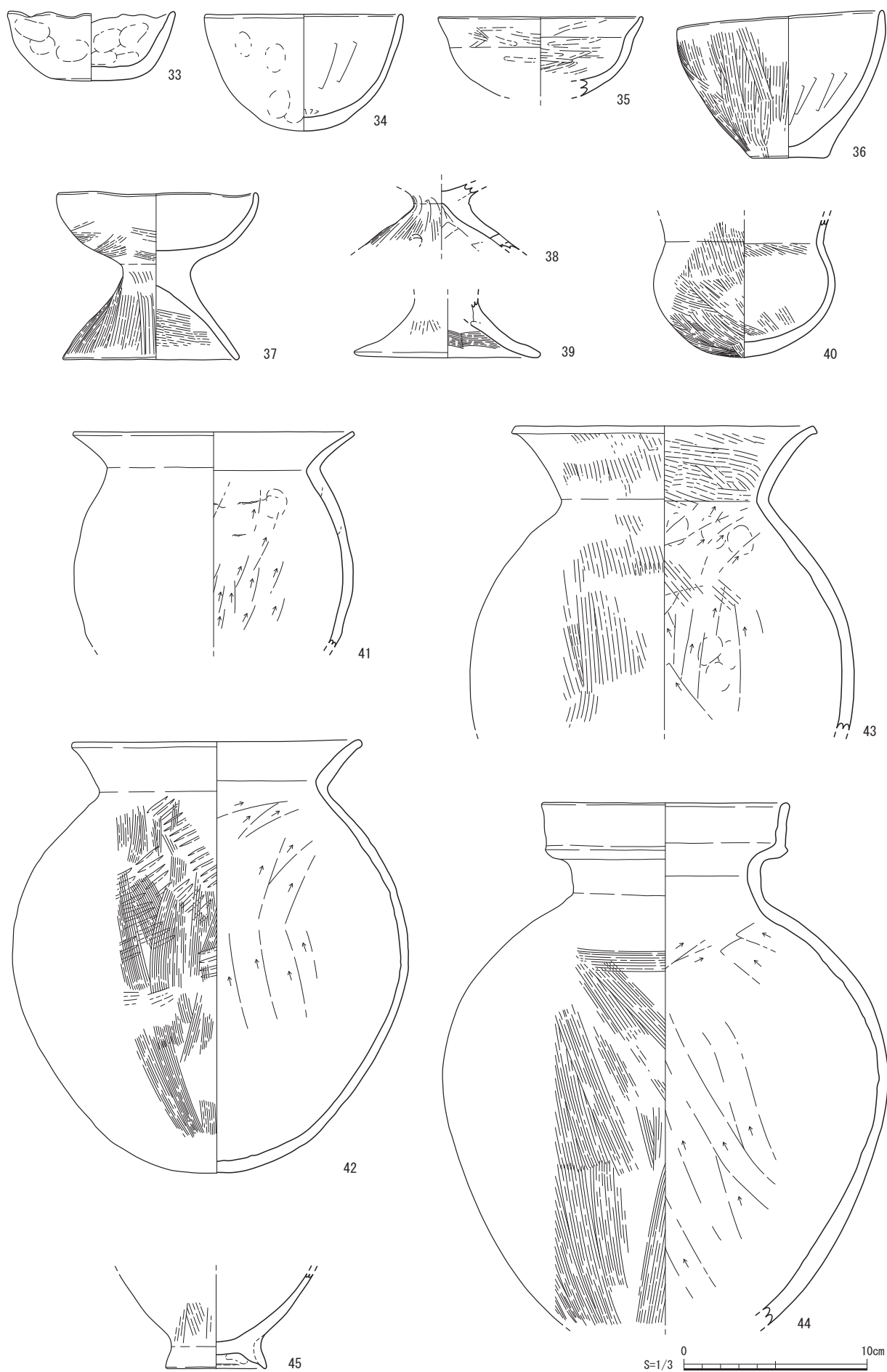
竪穴建物 S025 （第 19 図）

調査区の北側微高地上で検出された竪穴建物跡である。B 3・B 4 グリッドにまたがって所在し、北東側の半分程度は調査区外に展開する。建物の平面形状は東西 3.15 m、南北 1.92 m 以上の方形を呈し、竪穴の深さは最大 12cm を測る。全体規模は判然とせず、柱穴も確認されていないが、東寄りに径 86 ～ 94cm の円形の土坑 (a) を検出した。

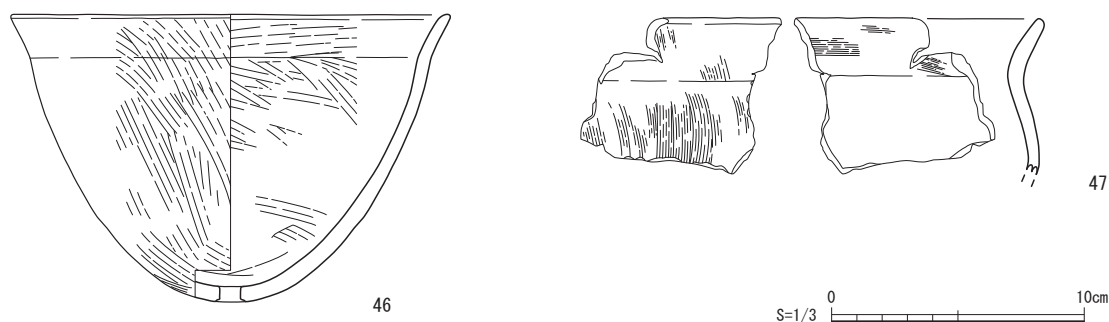
第 20 図 33 ～ 45 は竪穴建物 S025 の埋土中から出土した土器である。33 は坏形の土製模造品である。ほぼ完形で、口径 9.2cm、器高 3.7cm を測る。底部はやや丸みを帯び、体部は直立気味に立ち上がる。口縁部はやや尖り気味で、凹凸が著しい。34 は鉢の口縁～底部片で、復元口径 10.6cm、器高 6.2cm を測る。丸底でやや深い。35 は鉢の口縁～胴部片で、復元口径 11.0cm を測る。丸底で、体部は丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部でくびれを伴い外傾し、端部を尖り気味に仕上げる。36 は小型の鉢形土器である。口縁部が少し欠けるほか、ほぼ完形に接合された。口径 11.6cm、器高 7.4cm、底径 4.4cm を測る。平底で、体部は中位から丸みを帯びながら口縁部へと立ち上がる。37 は小型器台の口縁～底部片である。比較的残りがよく、復元口径 10.9cm、器高 9.0cm を測る。坏部は丸底で、体部は丸みを帯びながら立ち上がり、端部をやや尖り気味に仕上げる。脚部は、そのまま緩やかに外傾する。38 は小型器台の脚部片である。坏部よりそのまま外に開きながら下りることが予想され、穿孔が認められる。39 は小型高杯の脚部片で、脚端部近くで大きく開き、端部はやや尖る。40 は小型丸底壺の頸部～底部片である。やや扁平な器形で、口縁部は僅かなくびれを伴いながらやや外に開くことが予想される。頸部～底部外面に不整方向のハケ目調整が顕著である。41 は小型甕の口縁～胴部片で、復元口径 15.0cm を測る。胴部はやや長胴で、頸部から口縁部は外に開き、端部を丸く仕上げる。胎土に砂粒が多量に含まれる。42 は甕で、ほぼ完形に接合された。口径 15.4cm、器高 22.7cm を測る。胴部最大径はやや上位にあり、底部はやや尖り気味の丸底である。口縁部は短く外傾し、端部付近でやや外反し、端部を丸く仕上げる。胴部外面に斜方向の平行タタキ後、中位から下位にかけて縦方向のナデ調整を施す。胴部・底部外面の一部に赤変、



第 19 図 竪穴建物 S025 平・断面図



第 20 図 豎穴建物 S025 出土遺物実測図①



第 21 図 堅穴建物 S025 出土遺物実測図②

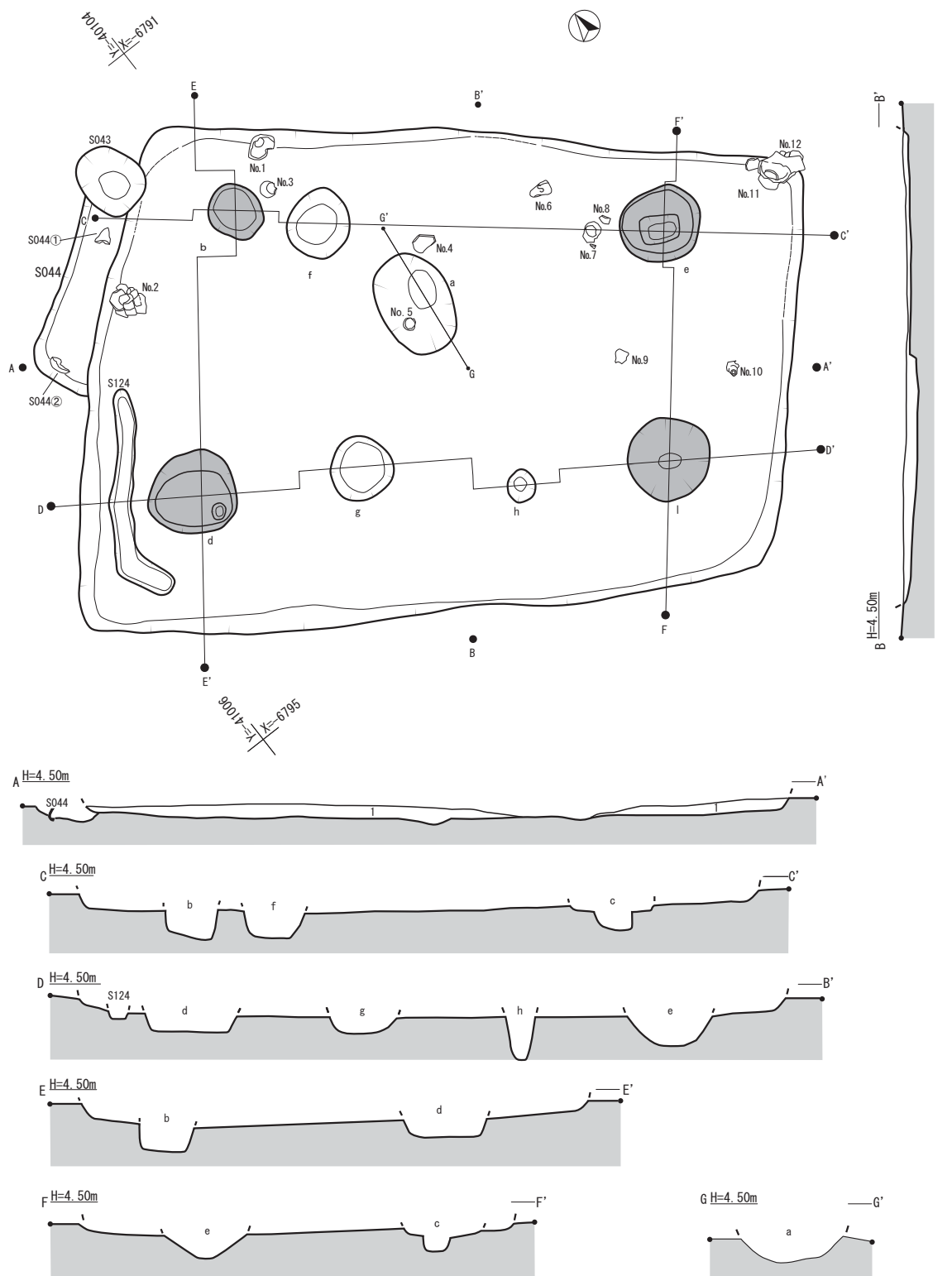
煤付着が認められる。43 は甕の口縁～胴部片で、復元口径 16.2cm を測る。胴部はやや長胴で、胴部最大径がやや下位にあるものと思われる。口縁部は長く、頸部からやや外傾しながら立ち上がり、口縁部近くで外反し、端部を平たく仕上げる。44 は二重口縁壺の口縁～底部片で、口径 13.4cm を測る。胴部最大径は上位にあり、底部は尖ることが予想される。底部外面に煤が付着する。45 は小型台付鉢の底部片である。胴部下位が僅かに残り、器厚は薄い。高台は断面三角形を呈し、端部は尖る。高台には粘土を継ぎ足し成形した痕跡が残る。

第 21 図 46、47 は S025 内の土坑 (a) の埋土中から出土した土器である。46 は甕の口縁～底部片で、復元口径 17.0cm、器高 12.6cm を測る。鉢状の器形を呈し底部中央付近に 0.9cm の穿孔が認められる。底部はやや尖り気味で、胴部はなだらかに外に開き、口縁部付近でやや外反し、端部を尖り気味に仕上げる。47 は小型壺の口縁～胴部片である。胴部上位に胴部最大径があり、口縁部はくびれを伴いながら外に開き、端部を丸く仕上げる。

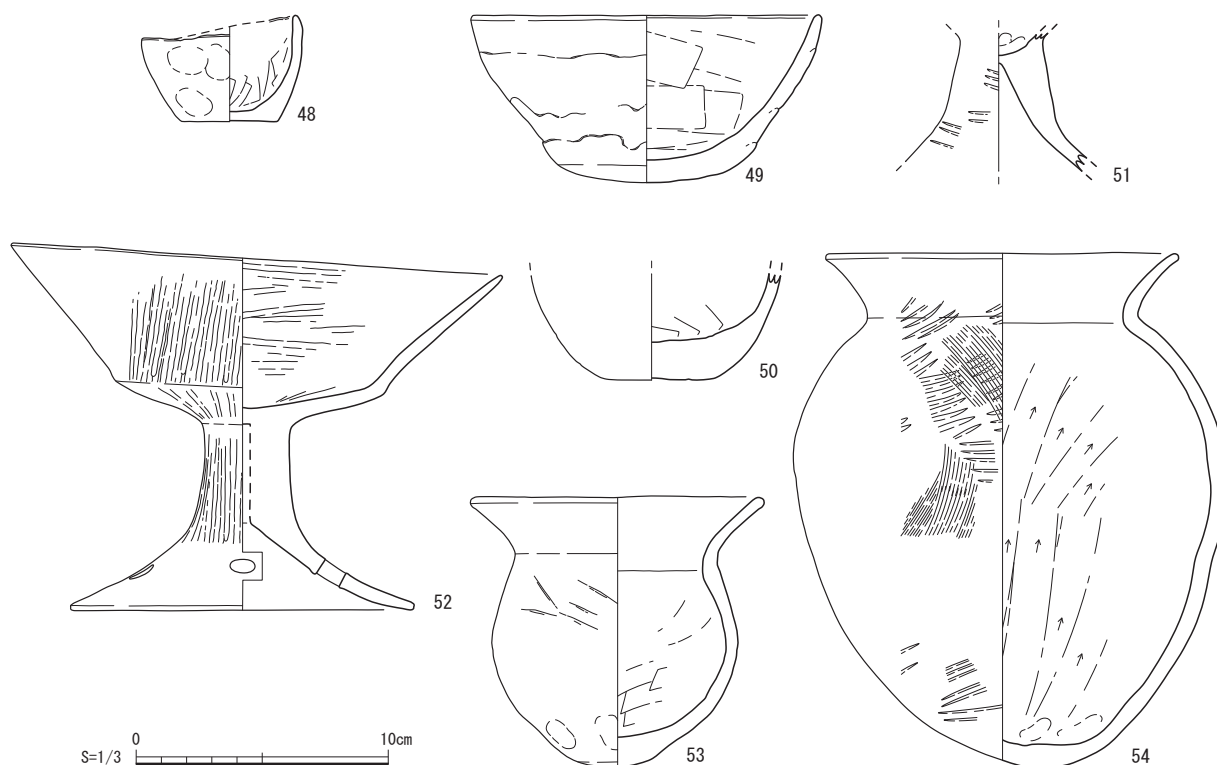
堅穴建物 S026 (第 22 図)

調査区の北側微高地上で検出された堅穴建物跡である。B 3 グリッドに所在する。建物の平面形状は南北 4.63 m、東西 3.20 m のやや歪な長方形を呈し、堅穴の深さは最大 6cm を測る。建物床面中央に長軸 0.65 m の楕円形を呈する深さ 15cm の土坑 (a) を検出した。炉穴の可能性はある。床面の四隅近くに 4 基の柱穴 (b、c、d、e) を検出した。柱穴 4 基は径 31 ～ 58cm のやや歪な円形で、深さ 11 ～ 21cm を測る。建物の支柱穴と考えられる。このほか、3 基の柱穴 (f、g、h) を検出した。

第 23 図 48 ～ 54 は堅穴建物 S026 の埋土中から出土した土器である。48 は坏形の土製模造品で、口径 6.2cm、器高 3.5 ～ 4.2cm、底径 4.1cm を測る。口縁部の大半が欠損するほか、比較的残りがよい。平底で、体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部を尖り気味に仕上げる。歪みが著しい。49 は鉢の口縁～底部片で、口径 13.7cm、器高 6.6cm を測る。底部はやや平たく、体部中位から内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。胎土に砂粒が顕著である。50 は鉢の底部片で、49 に類似する器形になることが予想される。51 は高杯の脚部片である。脚柱は緩やかに外傾し、中途より脚端部に向けて外に開く。52 は高杯の口縁～脚部片で、口径 19.5cm、器高 14.8cm を測る。比較的残りが良い。杯部は平底で、体部はやや外反気味に開き、端部を尖り気味に仕上げる。脚部は脚柱が長く、中途から外傾し、脚端部を丸く仕上げる。4 方向に穿孔が認められる。53 は小型丸底壺の口縁～底部片で、口径 11.2cm、器高 10.8cm を測る。比較的残りがよい。胴部最大径は胴部中位にあり、底部はやや尖り気味となる。口縁部は外に開き、端部を丸く仕上げる。54 は甕の口縁～底部片で、復元口径 13.2cm、器高 20.1cm を測る。比較的残りがよい。胴部最大径は胴部上位にあり、底部はやや尖り気味となる。口縁部はやや外反気味に開き、端部を丸く仕上げる。胴部上位外面に斜方向の平行タキが残る。胴部外面中位から底部にかけて煤が付着する。



第 22 図 竪穴建物 S026 平・断面図



第 23 図 堅穴建物 S026 出土遺物実測図

堅穴建物 S027 (第 24 図)

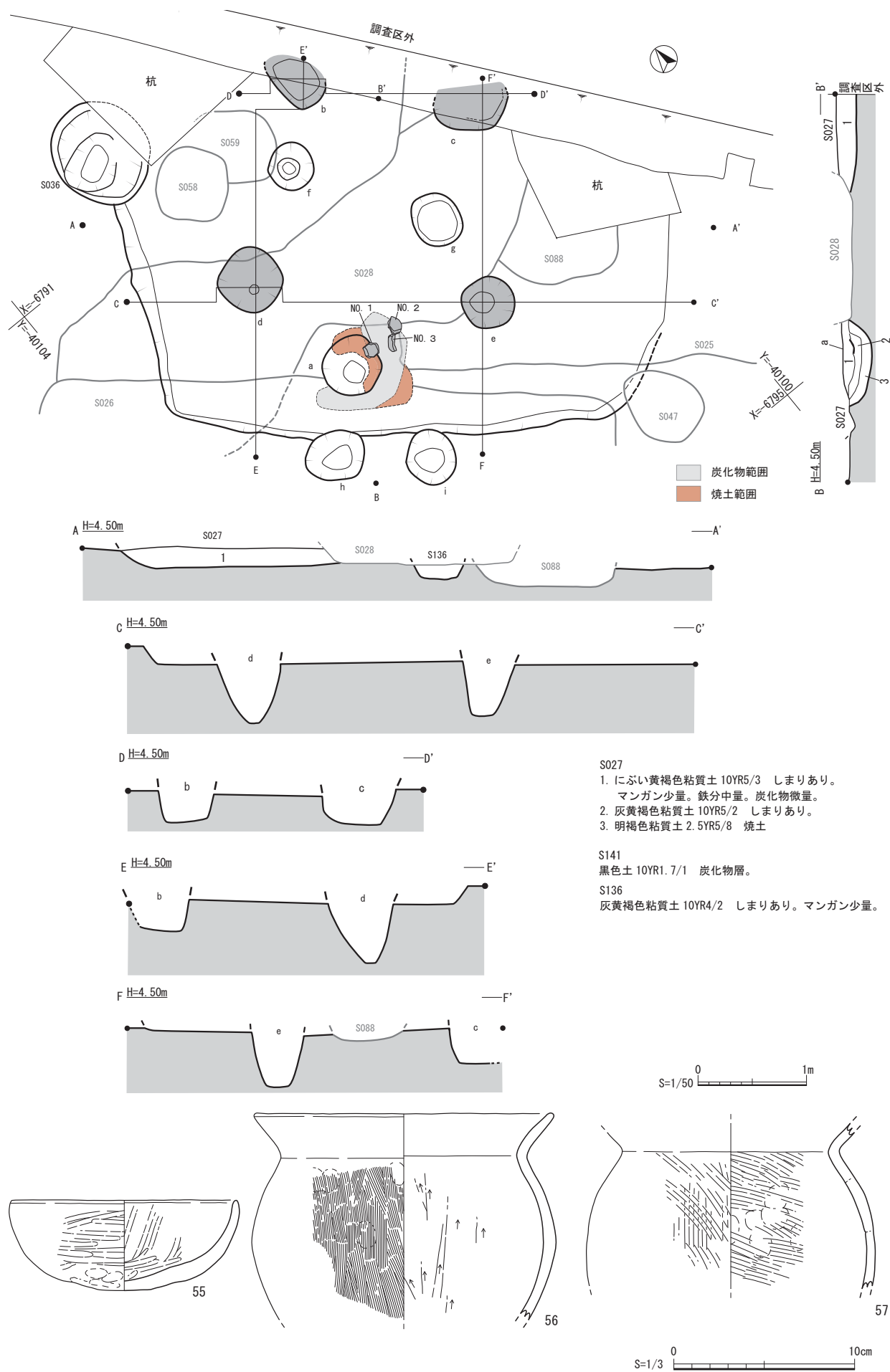
調査区の北側微高地上で検出された堅穴建物跡である。B 3 グリッドに所在し、北東側の調査区外に展開する。堅穴建物 S025、S026 に先行する建物跡である。建物の平面形状は南北 2.64 m 以上、東西 4.06 m のやや歪な方形を呈し、堅穴の深さは最大 14cm を測る。建物の南辺近くに径 61cm、深さ 21cm の土坑 (a) を検出した。焼土が認められることから、炉穴と考えられる。柱穴は 4 基 (b ~ e) を検出し、径 32 ~ 47cm のやや歪な円形で、深さ 22 ~ 43cm を測る。建物の支柱穴と考えられる。このほか床面から柱穴 2 基 (f・g) を検出した。また建物南側の外側に建物に隣接した柱穴 2 基 (h・i) を検出した。土坑 (a) の近くにあることから関連する施設の柱穴と捉えられる。

第 24 図 55 ~ 57 は堅穴建物 S027 の埋土中から出土した土器である。55 は鉢の口縁~底部片で、器高 4.1cm と比較的浅く、皿状のものである。底部は丸みを帯び、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は尖る。底部外面に煤が付着する。56 は甕の口縁~胴部片である。丸底で、やや扁平な器形となる。口縁部は短く外傾し、端部を丸く仕上げる。57 は甕の頸部~胴部片である。胴部は丸く、口縁部は明瞭な屈曲を伴い外傾する。

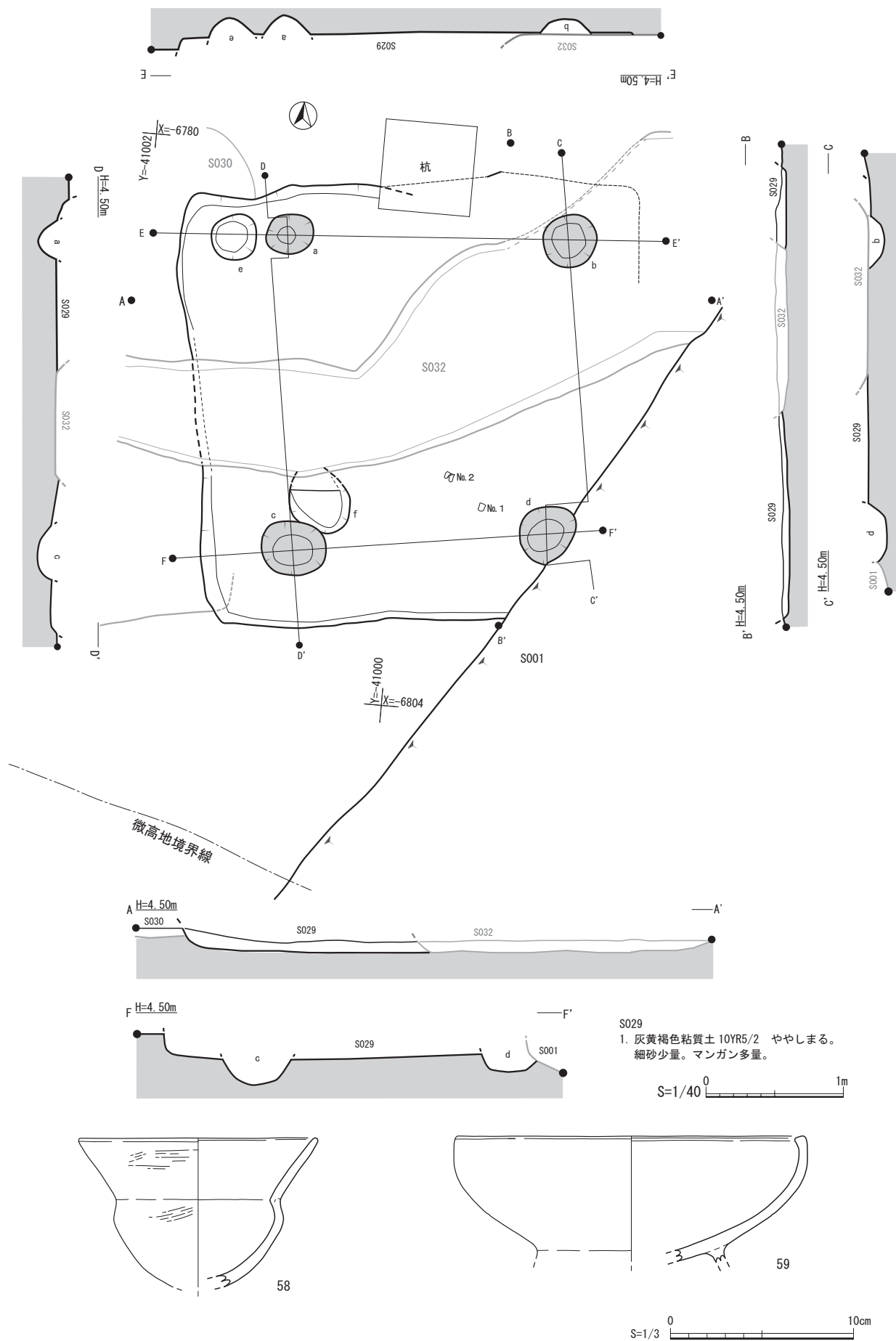
堅穴建物 S029 (第 25 図)

調査区の北側微高地上で検出された堅穴建物跡である。C 3・C 4 グリッドにまたがって所在し、東側は調査区中央を南北に走る大溝 (S001) に切られ、消失する。建物の平面形状は南北 3.15 m、東西 3.35 m の方形を呈し、堅穴の深さは最大 14cm を測る。建物床面の四隅近くに 4 基 (a・b・c・d) の柱穴が確認され、柱穴は径 28 ~ 49cm のやや歪な円形で、深さ 10 ~ 19cm を測る。建物の支柱穴と考えられる。このほか床面から 2 基の柱穴 (e・f) を検出した。

第 25 図 58、59 は堅穴建物 S029 の埋土中から出土した土器である。58 は小型壺の口縁~胴部片である。胴部上位に胴部最大径があり、口縁部は外に長く大きく開き、端部を尖り気味に仕上げる。焼成が不十分のため、灰白色を呈する。59 は鉢の口縁~底部片で、復元口径 18.9cm を測る。底部に脚が付くものであるが、欠損する。体部は内湾しながら立ち上り、端部を平たく仕上げる。



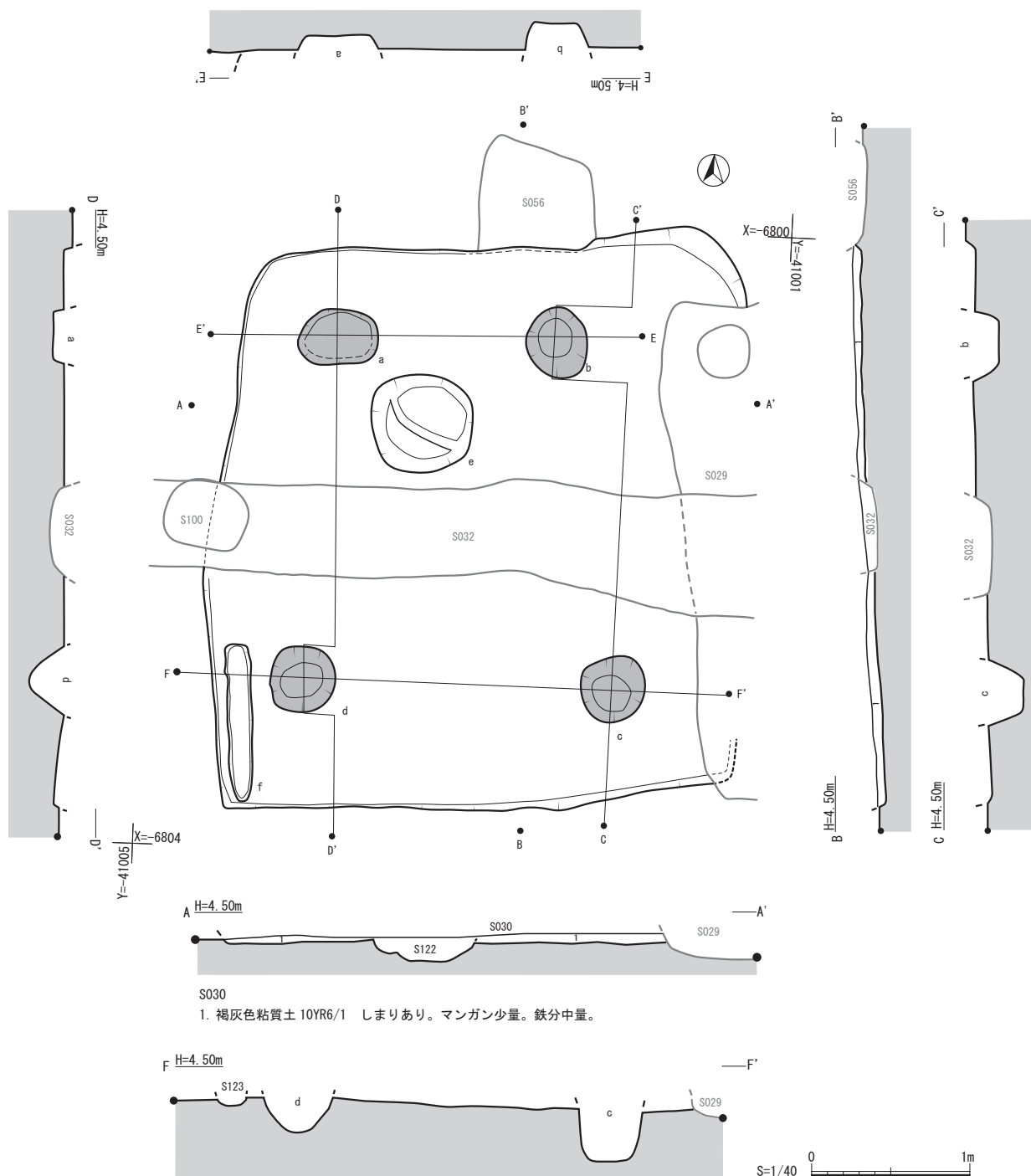
第 24 図 竪穴建物 S027 平・断面及び出土遺物実測図



第 25 図 竪穴建物 S029 平・断面及び遺物実測図

竪穴建物 S030 （第 26 図）

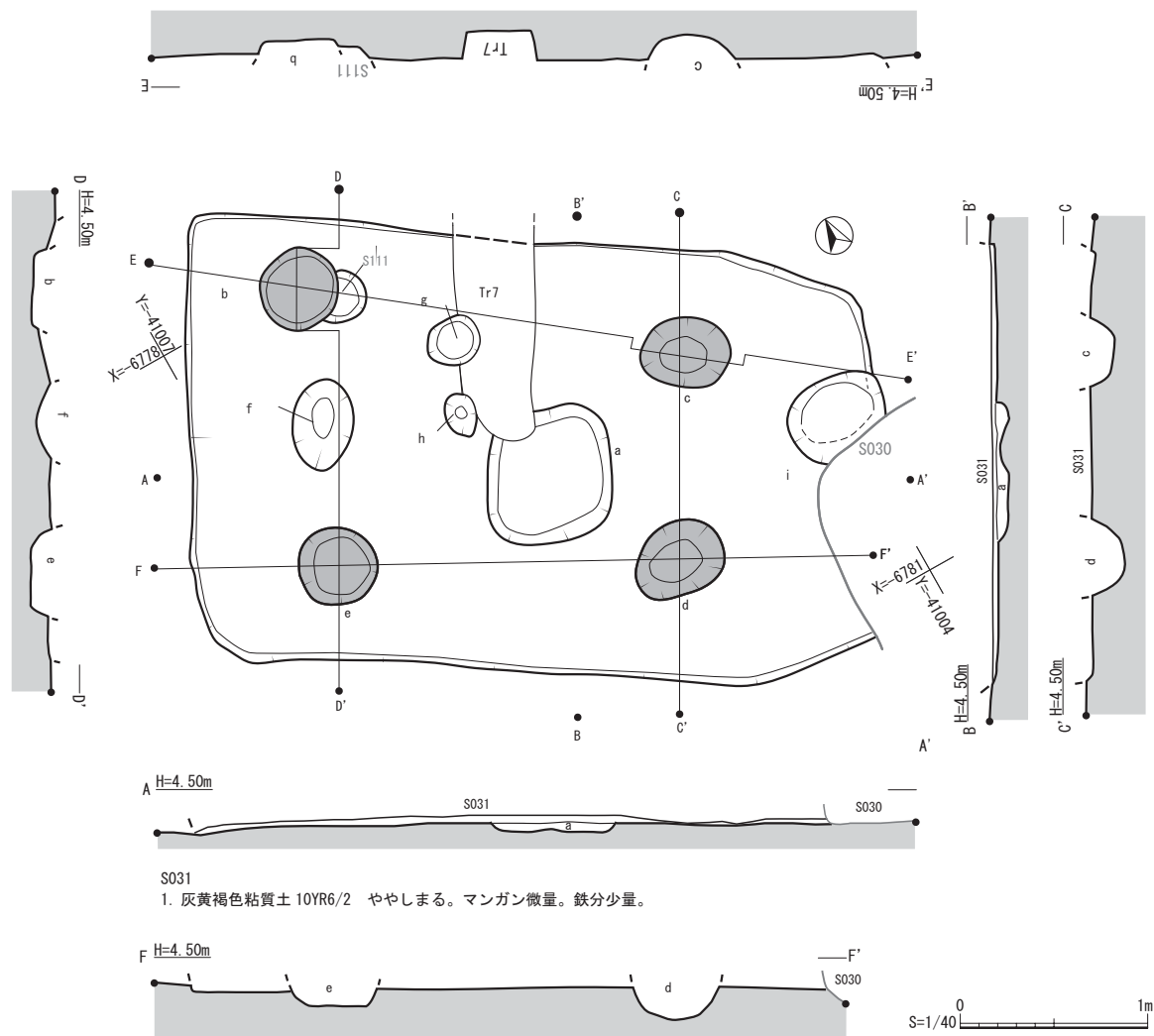
調査区の北側微高地上で検出された竪穴建物跡である。C 3 グリッドに所在し、竪穴建物 S029 と切り合い関係がみられ、先行する建物跡である。建物中央に後世の溝 S032 が走る。建物の平面形は南北 3.65 m、東西 3.27 m のやや歪な方形を呈し、竪穴の深さは最大 6cm を測る。建物床面の四隅近くに 4 基（a・b・c・d）の柱穴を検出した。柱穴は径 32 ～ 49cm のやや歪な円形で、深さ 6 ～ 32cm を測る。建物の支柱穴と考えられる。このほか、建物の北西側に土坑（e）と建物の南西隅に溝状を掘り込み（f）を検出した。



第 26 図 竪穴建物 S030 平・断面図

竪穴建物 S031 （第 27 図）

調査区の北側微高地上で検出された竪穴建物跡である。B 3・C 3 グリッドにまたがって所在する。竪穴建物 S030 と切り合い関係がみられ、先行する建物跡である。建物の平面形状は長軸 3.64 m、短軸 2.36 m のやや歪な長方形を呈し、竪穴の深さは最大 4cm を測る。建物中央に長軸 70cm、短軸 65cm の隅丸方形を呈する深さ 4cm の土坑（a）を検出した。炉穴の可能性ある。床面の四隅近くに 4 基の柱穴（b・c・d・e）を検出した。柱穴は径 35～45cm のやや歪な円形で、深さ 8～17cm を測る。建物の支柱穴と考えられる。このほか 4 基の柱穴（f・g・h・i）を検出した。

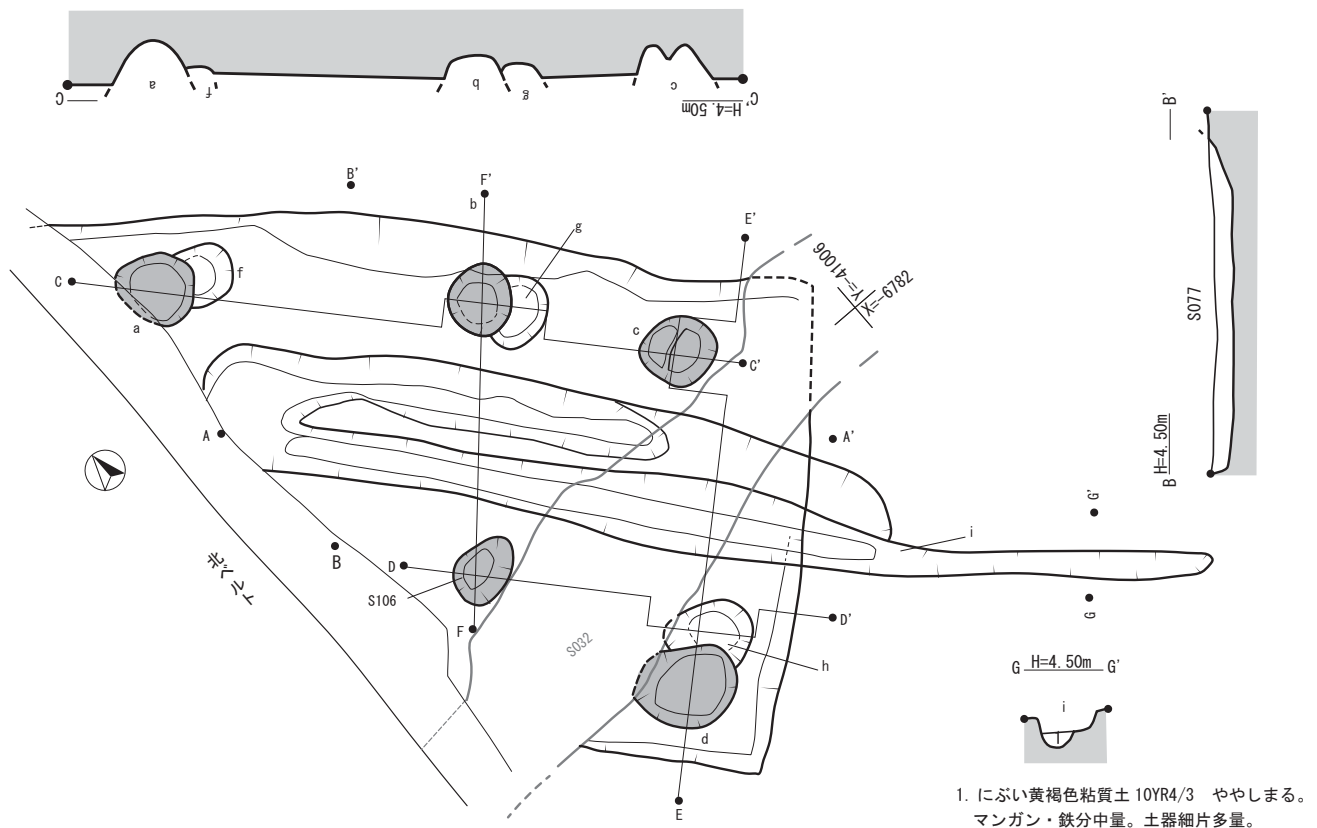


第 27 図 竪穴建物 S031 平・断面図

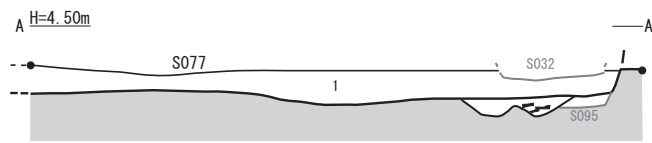
竪穴建物 S077 （第 28 図）

調査区の北側微高地上で検出された竪穴建物跡である。B 3・C 3 グリッドにまたがって所在し、西側は調査区の南北ベルト下に展開する。建物の平面形状は長軸 3.83 m、短軸 2.10 m の長方形を呈し、竪穴の深さは最大 12cm を測る。建物床面の長辺に沿って 5 基の柱穴（a、b、c、d、e）を検出した。柱穴は径 27～42cm のやや歪な円形で、深さ 6～19cm を測る。建物の支柱穴と考えられる。このほか 3 基の柱穴（f・g・h）を検出したが、いずれも前述の柱穴に先行するものである。また建物中央を長軸方向に沿って走り、建物外にも暗渠状に延びて微高地斜面上に開口する小溝（i）を検出した。埋土に土器の細片を多量に含むもので、排水溝の可能性ある。

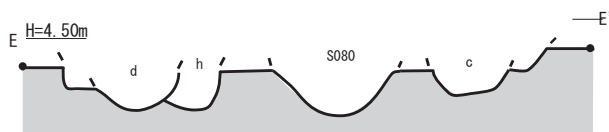
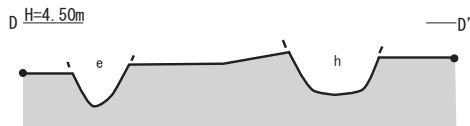
第 28 図 60 は竪穴建物 S077 の埋土中から出土した甕の口縁～頸部片である。明瞭な屈曲を伴い口縁部は外に開き、端部を丸く仕上げる。



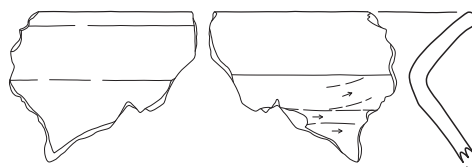
1. にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3 ややしまる。マンガン・鉄分中量。土器細片多量。



S1077
1. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3 ややしまる。マンガン少量・細砂少量含む



S=1/40 0 1m



60

S=1/3 0 10cm

第 28 図 竪穴建物 S077 平・断面及び出土遺物実測図

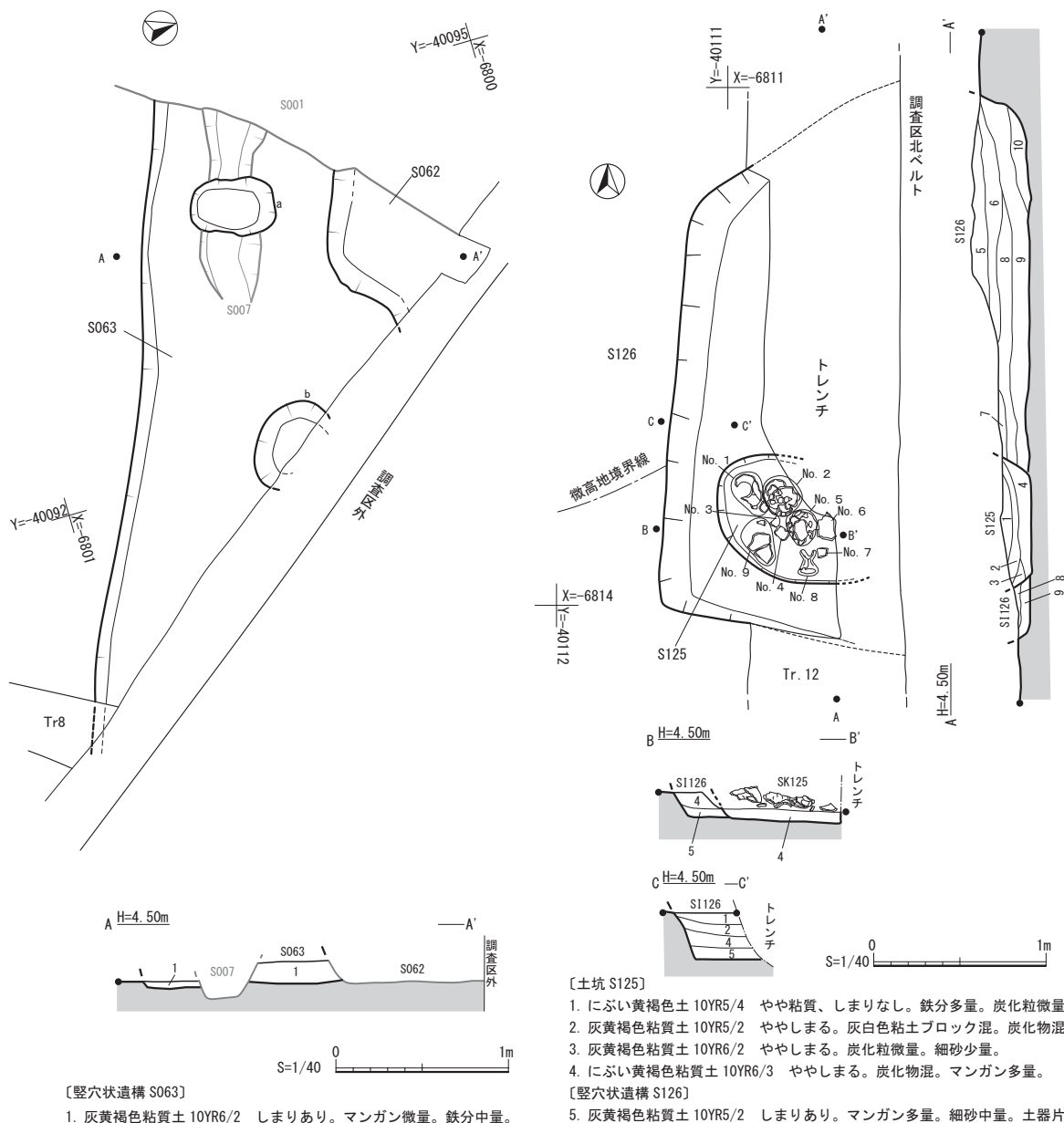
（２） 竪穴状遺構・土坑

竪穴状遺構 S063（第 29 図左）

調査区の北側微高地上で検出された竪穴状遺構である。C 4 グリッドに所在する。西側は大溝（S001）で切られ、北側は調査区外に展開する。長軸 3.43 m 以上、短軸 1.45 m 以上を検出し、竪穴の深さは最大 11cm を測る。床面にピット 2 基（a、b）が認められる。

竪穴状遺構 S126（第 29 図右）

調査区の北側微高地上で検出された竪穴状遺構である。D 2 グリッドに所在し、調査区の南北ベルト及び土層確認のためのトレンチにより全体規模は不明である。土坑（S125）と切り合い関係にあり、先行する遺構である。長軸 2.59 m、短軸 1.03 m を検出し、竪穴の深さは最大 28cm を測る。

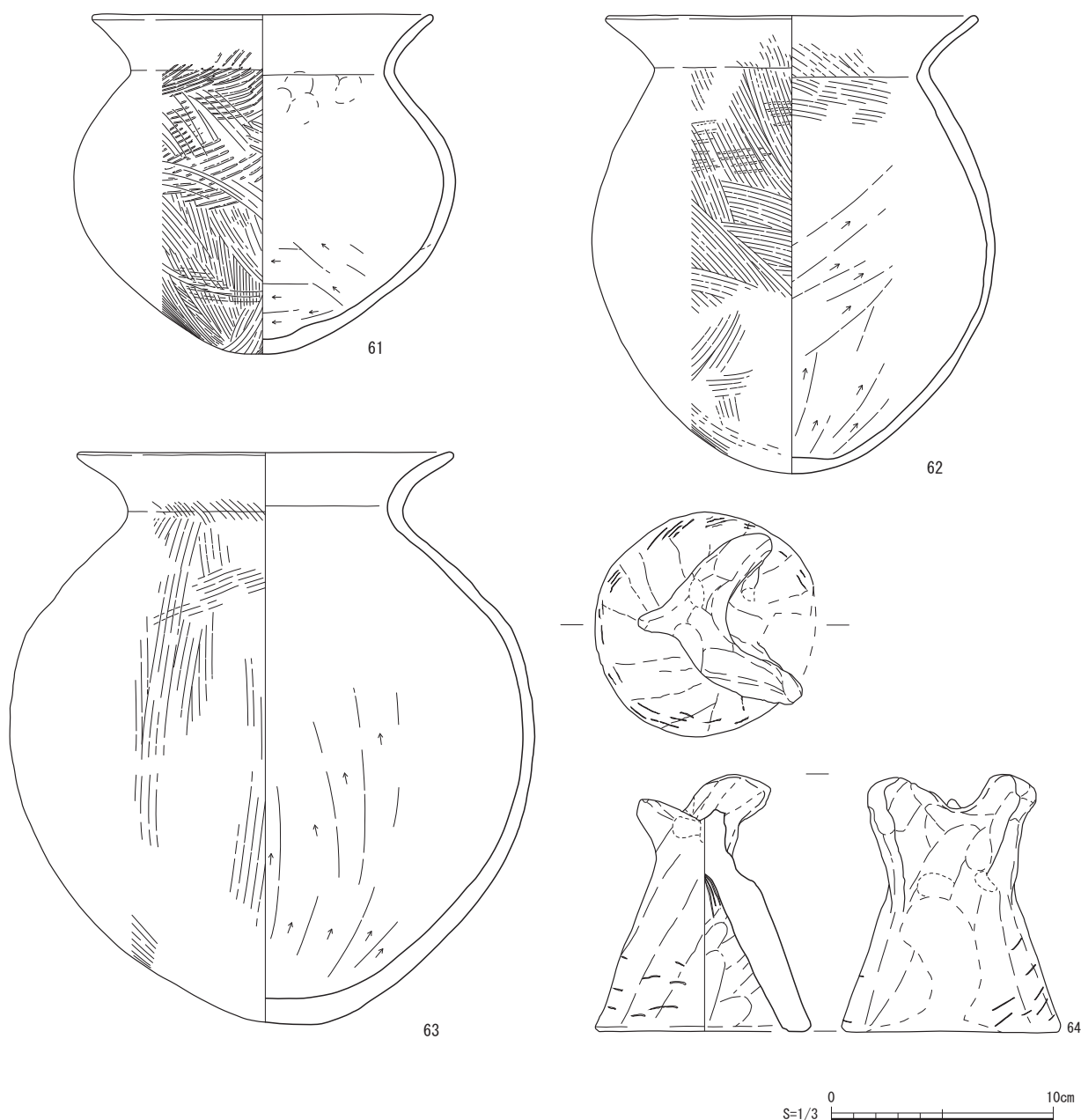


第 29 図 竪穴状遺構 S063・S126 及び土坑 S125 平・断面図

土坑 S125 (第 29 図右)

調査区の北側微高地上で検出された土坑である。堅穴状遺構 S126 と切り合い関係にあり、後出する遺構である。平面形状は長軸 75cm 以上、短軸 76cm の楕円形を呈し、深さ 17cm を図る。土器が集積しており、廃棄土坑の様相を呈する。

第 30 図 61 ～ 64 は土坑 S125 の埋土中からの出土遺物である。61 は甕である。ほぼ完形で、口径 15.1cm、器高 14.8cm を測る。胴部中位に胴部最大径があり、底部はやや尖底気味となる。口縁部は明瞭な屈曲を伴い外に開き、端部を丸く仕上げる。胴部中位より下に煤が付着する。62 は甕である。ほぼ完形で、口径 16.5cm、器高 20.3cm を測る。やや長胴の甕で、底部は尖り気味となる。口縁部は明瞭な屈曲を伴い外に開き、端部を丸く仕上げる。胴部中位より下に煤が付着する。63 は甕の口縁～底部片で、復元口径 16.5cm、器高 26.2cm を測る。胴部中位に胴部最大径があり、底部はやや尖り気味となる。口縁部は大きく開き、端部を丸く仕上げる。胴部下位に煤が付着する。64 は支脚で、上端に 3 方向に分岐する支点を有するものである。



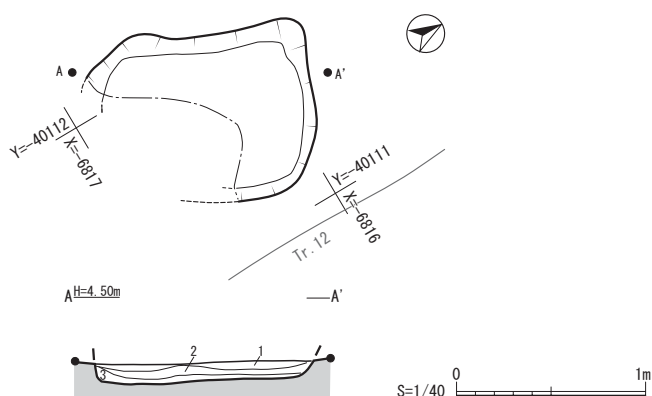
第 30 図 土坑 S125 出土遺物実測図

土坑 S127 (第 31 図)

調査区の北側微高地上で検出された土坑である。D 2 グリッドに所在し、南側は欠損する。平面形状は長軸 1.46 m、短軸 1.11 m の方形を呈し、深さは 13cm を測る。

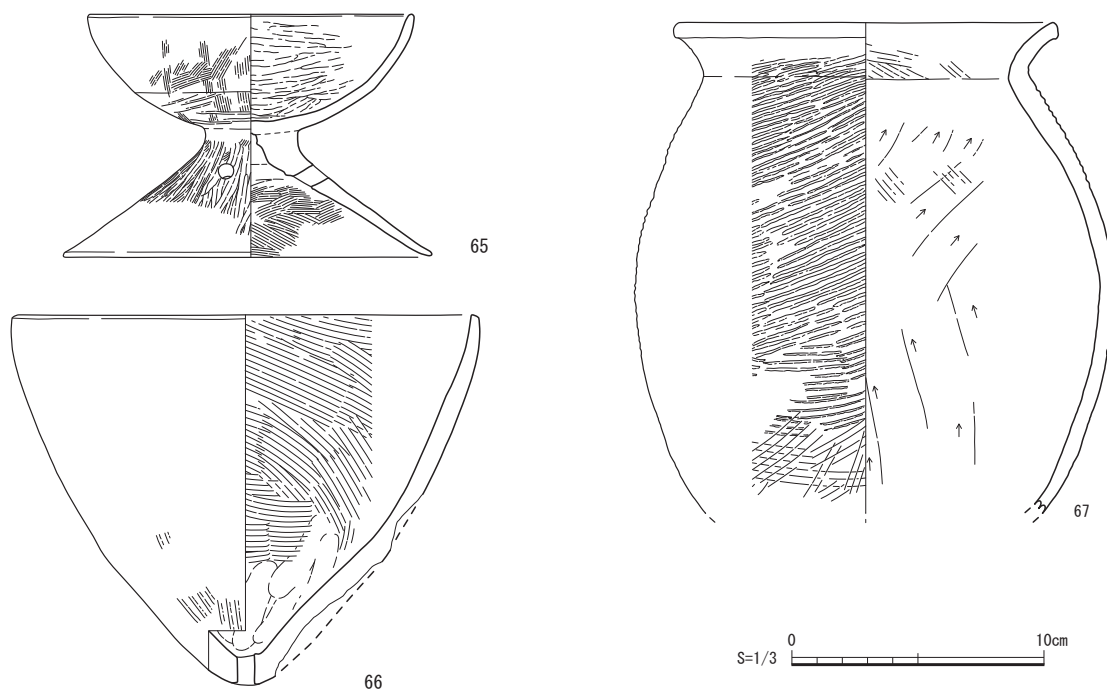
第 31 図 65 ～ 67 は土坑 S127 の埋土中から出土した土器である。65 は高坏の口縁～脚端部片で、復元口径 12.4cm、器高 9.3cm を測る。坏部は丸底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は尖る。脚部はくびれ部から大きく外に開き、端部を尖り気味に仕上げる。3 方向に径 0.7cm の穿孔を配する。66 は甑の口縁～底部片で、尖底の中央に径 0.6cm の穿孔を有する。復元口径 18.5cm、器高 15.2cm を測り、胴部はわずかに内湾しながら立ち上がり、端部を平たく仕上げる。67 は甕の口縁～胴部片で、復元口径 15.2cm を測る。長胴気味の器形で、口縁部は短く開き、端部は下につまみ出し、平たく仕上げる。

S127



S127

1. 暗褐色粘質土 10YR3/3 しまりあり。マンガン・鉄分中量。褐灰色 (10YR5/1) ブロック含。
2. 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 ややしまる。細砂・マンガン少量。土器片含。
3. にぶい黄褐色土 10YR6/4 しまりなし。細砂・マンガン少量。



第 31 図 土坑 S127 平・断面図及び出土遺物実測図

(3) 溝状遺構

溝状遺構 S028 (第 32 図)

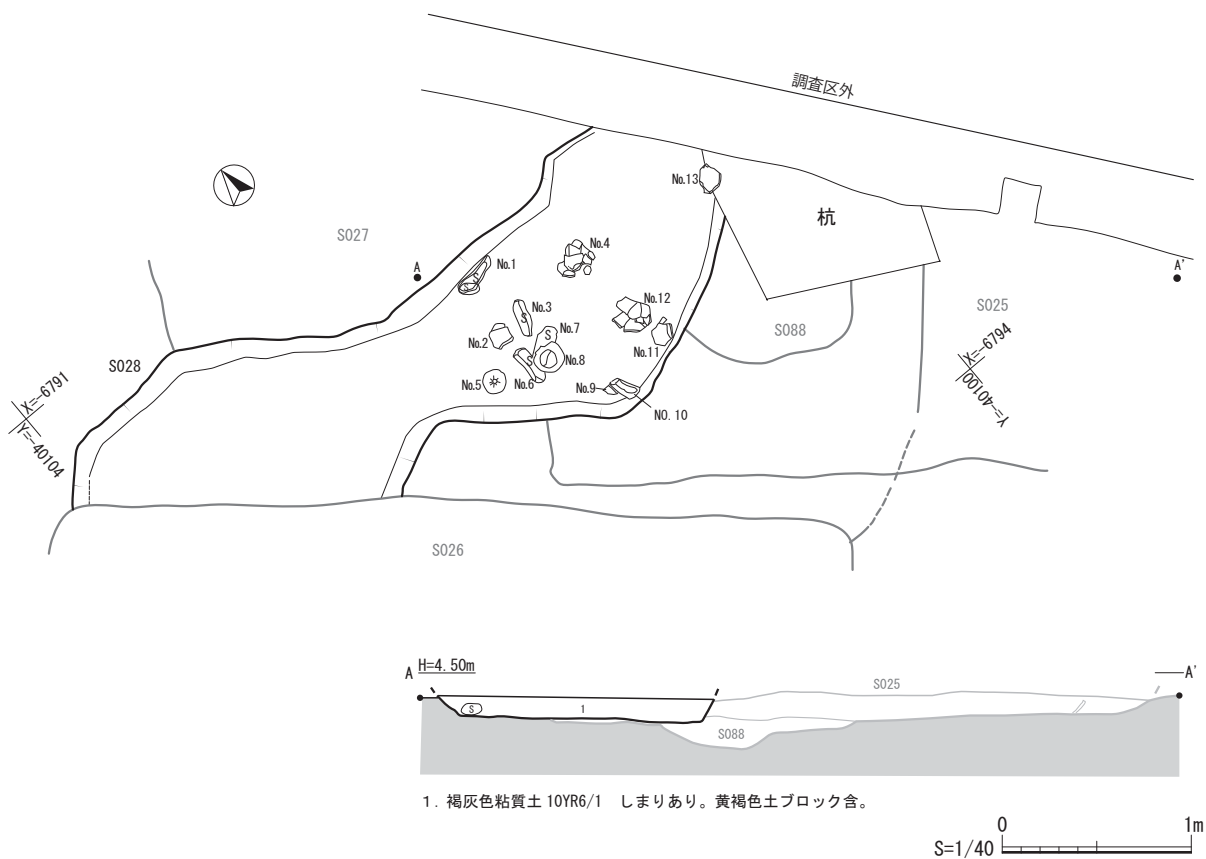
調査区の北側微高地上で検出された東西方向に走る溝跡である。B 3 グリッドに所在し、西側は竪穴建物 S026 で切れ、東側は調査区外へと延びる。竪穴建物 S025 との間に切り合い関係が認められ、後出する溝跡である。検出延長 3.2 m、幅 0.64 ~ 1.18 m で、蛇行しながら延びている。深さは、最大 12cm を測る。

第 33 図 68 ~ 72 は溝状遺構 S028 の埋土中から出土した土器である。68 は甕形の土製模造品で、頸部から胴部までが残存する。69 は鉢である。ほぼ完形品で、口径 11.4cm、器高 6.9cm、底径 4.1cm を測る。平底で、体部は緩やかに外傾しながら立ち上がり、口縁部近くで内湾し、端部を尖り気味に仕上げる。70 は小型丸底壺の口縁～胴部片である。口縁部は短く、胴部の張りがさほどない。器面の摩耗が激しい。71 は壺の口縁部片で、口径 4.7cm を測る。口縁部は直行気味に立ち上がり、端部を平たく仕上げる。72 は甕の口縁～底部片で、復元口径 16.9 cm を測る。比較的残りが良い。胴部中位に胴部最大径があり、底部は丸い。口縁部は短く、外反しながら開き、端部を尖り気味に仕上げる。

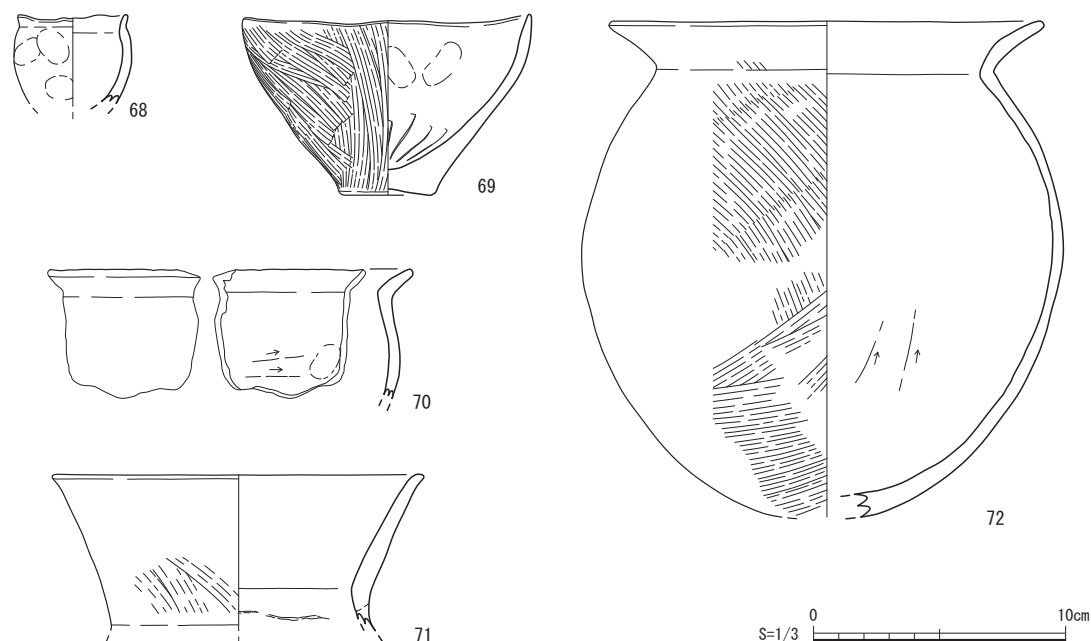
溝状遺構 S032 (第 34 図)

調査区の北側微高地上で検出された東西方向に走る溝跡である。C 2 ~ 4 グリッドに所在し、東側は大溝 (S001) で切れ、西側は調査区外へと展開する。竪穴建物 S029・S030・S077 との間に切り合い関係が認められ、後出する溝跡である。検出延長 11.56 m、幅 0.46 ~ 1.54 m で蛇行しながら延びている。

第 35 図 73 ~ 75 は溝状遺構 S032 から出土した遺物である。73 は高杯の坏部～脚柱部片である。坏部は丸底で、丸みを帯びながら立ち上がることが予想され、脚部は脚柱が短く、裾部でふくらみ気味に開く。74 は二重口縁壺の口縁部片である。やや外反しながら大きく開き、端部を平たく仕上げる。75 は紡錘車である。やや扁平な球形を呈し、中央に径 3.0mm の穿孔を配する。



第 32 図 溝状遺構 S028 平・断面図



第 33 図 溝状遺構 S028 出土遺物実測図

溝状遺構 S060 (第 34 図)

調査区の北側微高地上で検出された東西方向に走る溝状遺構である。B 3 グリッドに所在し、トレンチ 7 で一部消失している。検出延長 2.96 m、幅 0.28 ～ 0.564 m を測る。

溝状遺構 S095 (第 34 図)

調査区の北側微高地上で検出された東西方向に走る溝跡である。溝状遺構 S032 との間に切り合い関係が認められ、先行する溝跡である。さらに竪穴建物 S029・S030、溝状遺構 S032、竪穴建物 S077 にも先行する。検出延長 12.0 m、残存幅 0.31 ～ 0.99 m を測る。

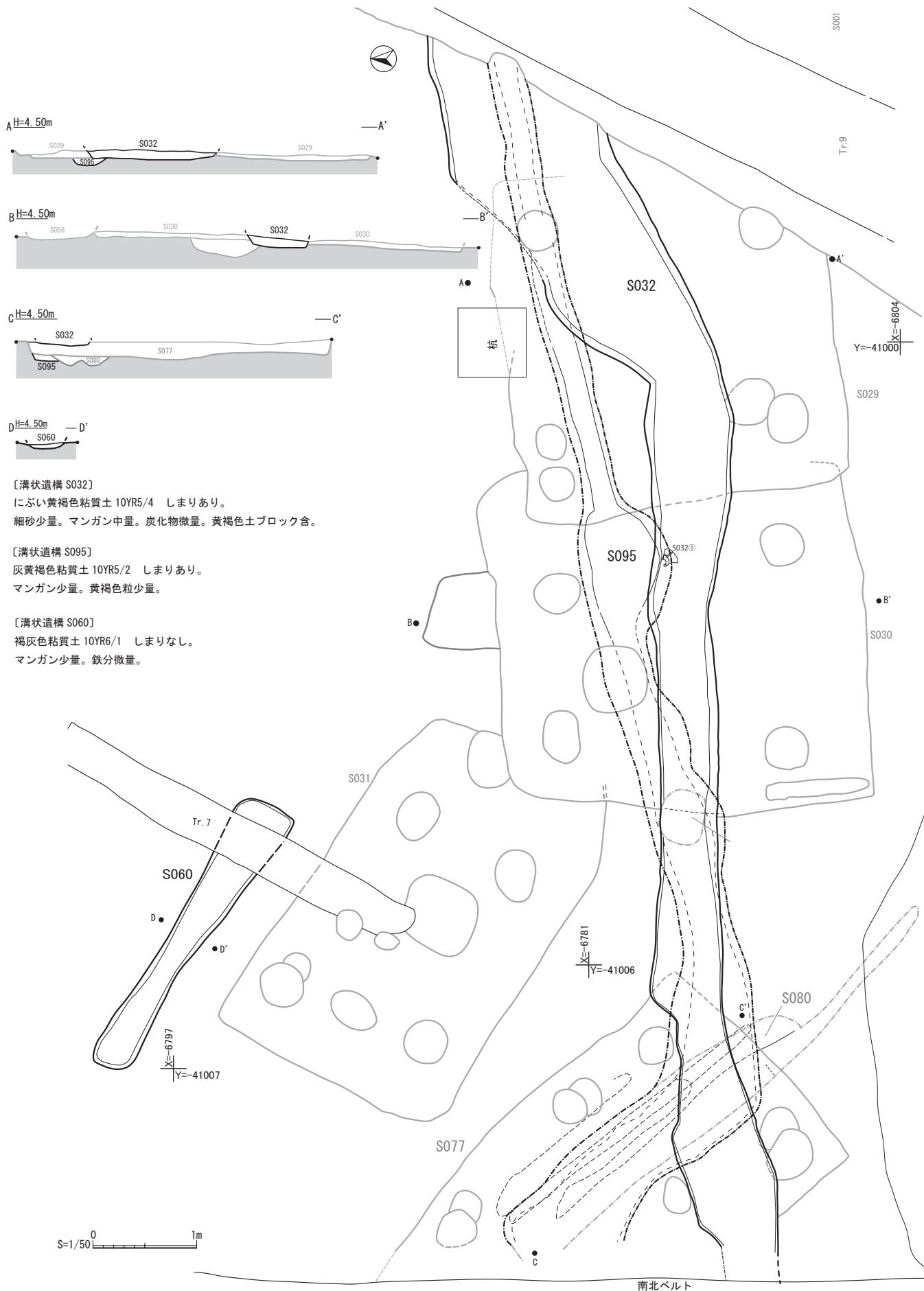
(4) その他の遺物

ここでは、その他の遺構あるいは遺物包含層から出土した弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器を掲載する。

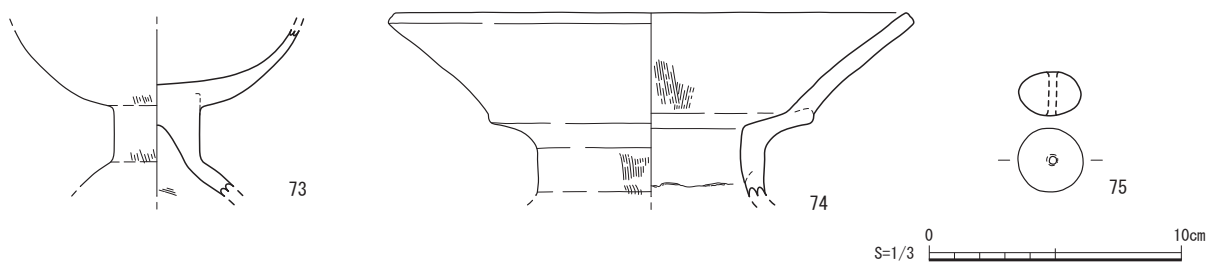
第 36 図 76 は土坑 S036 の埋土中から出土した甕の胴部片である。胴部中位に胴部最大径があり、やや長胴気味である。胴部外面の下位に煤が付着する。

第 36 図 77、78 は土坑 S044 の埋土中から出土した土器である。77 は鉢である。ほぼ完形品で、口径 15.2cm、器高 9.5cm を測る。頸部のくびれを有するもので、基石状の胴部に、やや外傾する直口気味の口縁部を有する。口径と胴部最大径はほぼ同一となる。78 は甕の口縁～底部片で、口径 14.5cm を測る。胴部のやや上位に胴部最大径があり、底部は尖り気味となる。口縁部はやや外傾しながら直口気味に立ちあがり、口縁端部付近でやや外反し、端部は尖る。

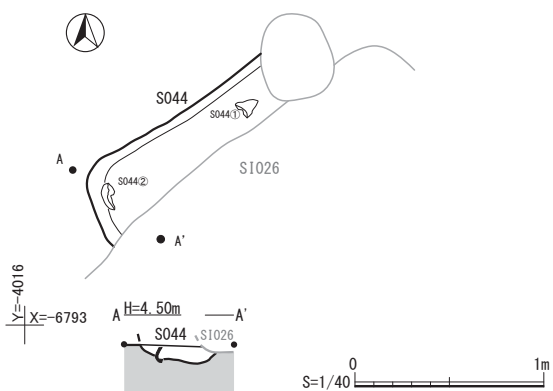
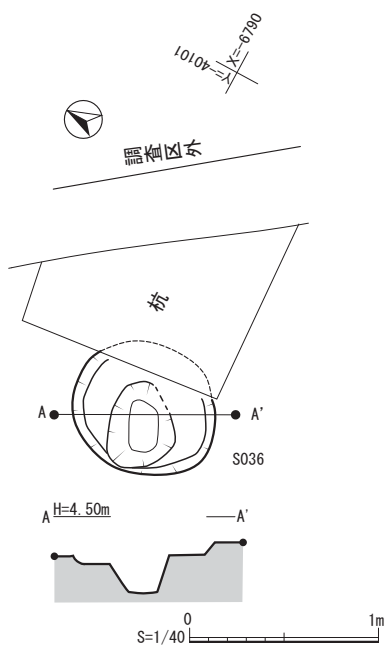
第 37 図 79 ～ 83 は北側微高地の基本層序Ⅳ層から出土した土器である。79 は坏の口縁～底部片で、復元口径 9.4 cm、器高 2.9cm を測る。丸底で口縁端部は、尖り気味に仕上げている。80 は甕の口縁～胴部片である。口縁部は外傾し、端部を丸く仕上げる。81 は甕の口縁～頸部片で、口縁部は明瞭なくびれを伴いながら外傾し、端部を平たく仕上げる。内外面ともに摩耗が激しい。82 は甕の口縁～胴部片である。口縁部は明瞭に屈曲を伴いながら外傾し、端部を平たく仕上げる。83 は紡錘車である。算盤玉状の形状で、中央に径 3.0mm の穿孔を配する。



第 34 図 溝状遺構 S032・S060・S095 平・断面図

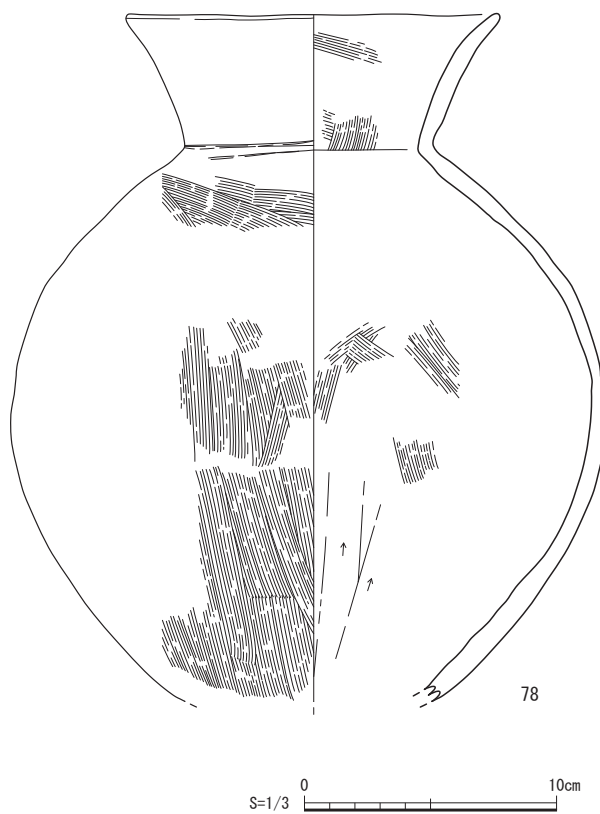
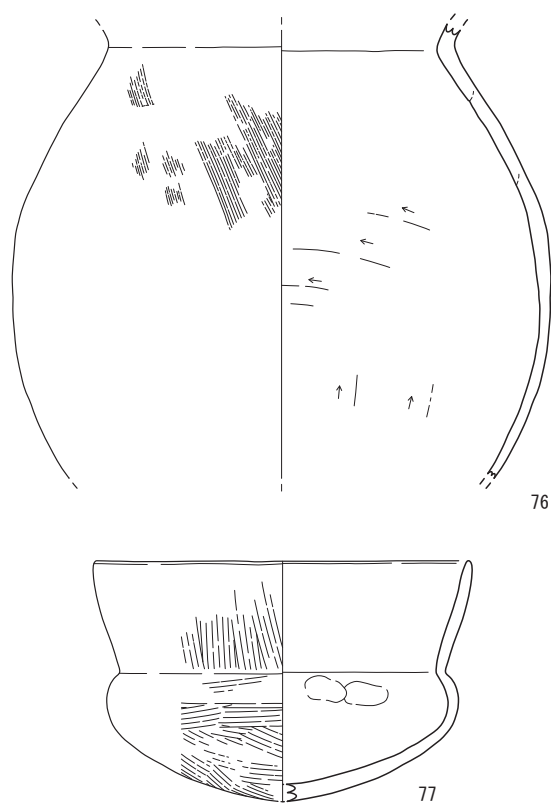


第 35 図 溝状遺構 S032 出土遺物実測図



〔土坑 S044〕

にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3 ややしまる。粗い。マンガン微量。土器含。



第 36 図 土坑 S036・S044 平・断面及び出土遺物実測図



第 37 図 Ⅳ層出土遺物実測図

4 中世の遺構

調査区の北側微高地を除く南側一帯から、水田に伴う遺構として畦畔 8 条(S002～006、009～011)と 13 区画、2 条の溝状遺構(S007・008)を検出した(第 38 図)。基本層序Ⅳb 層が水田の床土と考えられ、その上面の標高は 4.2～4.3 m を測る。以下に、各遺構について記述する。

(1) 畦畔

畦畔 S002(第 39 図)

調査区の南北方向に延びる畦畔である。北側微高地を起点に、南側に 41.4 m 分を検出した。断面台形を呈し、裾部幅 1.2～2.2 m、高さ 40cm を測る。他の畦畔より一回り大きく、中畦畔の可能性がある。

畦畔 S009(第 39 図)

調査区の南北方向に延びる畦畔である。畦畔 S002 より 12.5～15.0 m 東に平行して延び、延長 13.8 m 分を検出した。断面台形で、裾部幅 0.8～1.0 m、残存高 25cm を測る。

畦畔 S003(第 5 図)

調査区の東西方向に延びる畦畔である。北側微高地の南縁に位置し、後世の攪乱で大部分欠損する。延長 17.4 m 分を検出した。断面形状は不明で、残存幅 0.7 m、残存高 12cm を測る。

畦畔 S004(第 4 図)

調査区の東西方向に延びる畦畔である。畦畔 S003 の 10.5～12.0 m 南に平行して延び、延長 21.7 m 分を検出した。断面台形で、裾部幅 0.8～1.3 m、残存高 36cm を測る。

畦畔 S005(第 4 図)

調査区の東西方向に延びる畦畔である。畦畔 S004 の 7.2～9.3 m 南に平行して延び、延長 26.8 m 分を検出した。断面台形で、裾部幅 0.6～1.0 m、残存高 27cm を測る。

畦畔 S006(第 39 図)

調査区の東西方向に延びる畦畔である。畦畔 S005 の 5.3～6.7 m 南に平行して延び、痕跡を含めて延長 7.8 m 分を検出した。断面台形で、裾部幅 0.4 m、残存高 9 cm を測る。畦畔 S005 とは間隔が狭い。

畦畔 S010(第 39 図)

調査区の東西方向に延びる畦畔である。畦畔 S005 の 7.3 m 南に平行して延びるものと思われる。大部分は欠損し、僅かに 1.6 m 分を検出した。断面台形で、裾部幅 9.2 m、残存高 15cm を測る。

畦畔 S011(第 39 図)

調査区の東西方向に延びる畦畔である。畦畔 S010 の 11.6 m 南に平行して延び、痕跡を含めて延長 10.2 m 分を検出した。断面台形で、裾部幅 0.7 m、残存高 22cm を測る。

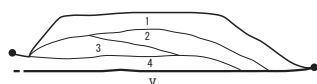


第 38 図 調査区遺構配置図 (1 面目)

S002

WP H=5.00m

— EP

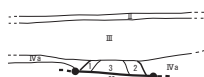


S002

1. 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 しまりあり。マンガン・鉄分中量。
2. 褐灰色粘質土 10YR6/2 しまり強い。マンガン中量。鉄分多量。
3. 褐灰色粘質土 10YR5/1 しまり強い。マンガン中量。鉄分少量。
4. 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 しまりなし。マンガン少量。鉄分中量。

S006

SP H=5.00m — NP



S006

1. 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 ややしまる。マンガン少量。
2. にぶい黄褐色粘質土 10YR6/3 しまりあり。マンガン微量。鉄分中量。
3. 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 しまりあり。マンガン中量。

S009

WP H=5.00m

— EP



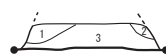
S009

1. 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 しまりあり。マンガン少量。鉄分多量。
2. 褐灰色粘質土 10YR6/1 ややしまる。マンガン少量。鉄分中量。
3. 褐灰色粘質土 10YR5/1 しまりなし。マンガン少量。鉄分中量。
4. にぶい黄褐色粘質土 10YR7/2 しまりなし。マンガン微量。黄橙色ブロック（2～3mm 大）含。

S010

SP H=5.00m

— NP



S010

1. 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 しまりあり。マンガン少量。鉄分中量。
2. にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3 しまりあり。マンガン少量。鉄分多量。
3. 褐灰色粘質土 10YR5/1 しまりあり。マンガン多量。

S011

SP H=5.00m

— NP



S011

1. 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 しまりあり。マンガン少量。鉄分多量。



第 39 図 畦畔土層断面図

（２）溝状遺構

溝状遺構 S007（第 40 図）

調査区の北側微高地の南縁に東西方向に延びる溝状遺構である。畦畔 S003 に隣接する北側に位置し、延長 16.5 m 分を検出した。残存幅 65cm、残存深 31cm を測る。

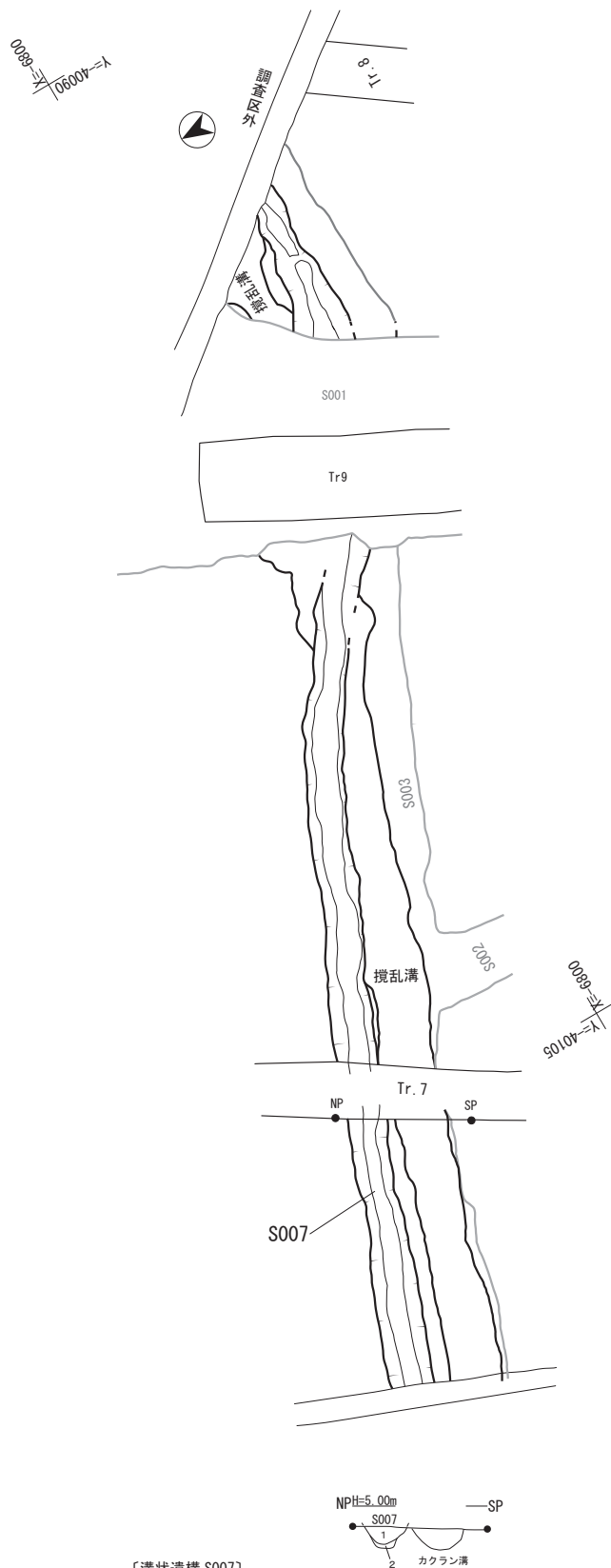
溝状遺構 008（第 40 図）

調査区の畦畔 S011 を起点に、畦畔 S002 の東側に平行して南側に延びる溝状遺構である。延長 2.3 m 分を検出した。残存幅 62cm、残存深 31cm を測る。

（３）水田層及びその上下層出土の遺物

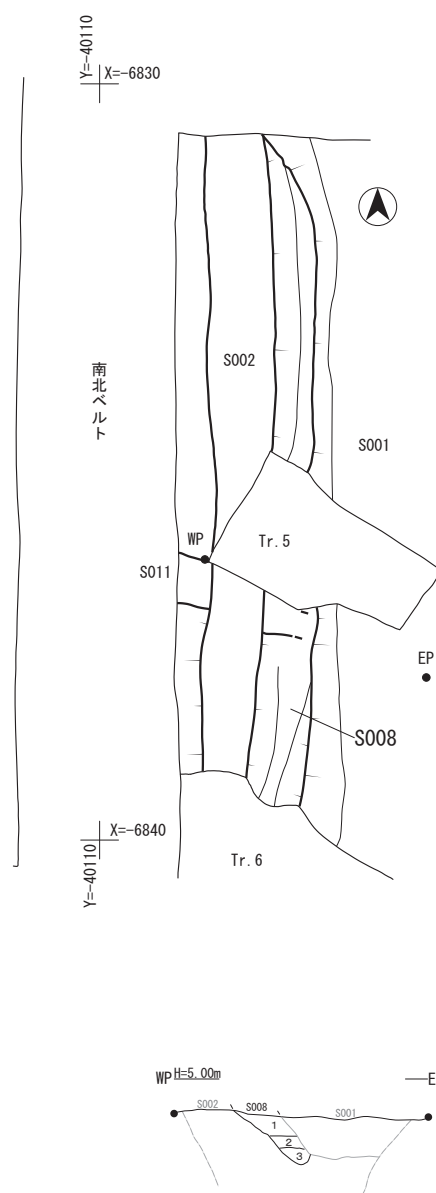
Ⅱ層出土遺物

第 41 図 84～87 は基本層序Ⅱ層から出土した遺物である。84、85 は須恵器である。84 は高台付坏の底部片である。底部はやや丸みを帯び、底部端にやや外反する断面三角形を呈する高台を付す。体部は丸みを帯びながら立ち上がることが予想される。85 は蓋の天井部片で、天井部中央に径 2.4cm のボタン状のつまみを付す。全体的に赤焼けている。86 は石包丁で、全体の 3 分の 1 程度が残存する。石材は粘板岩である。刃部は両面からの磨きにより作り出しており、一部残存する穿孔も両面から磨きにより角をとる状況が認められる。87 は「寛永通宝」である。寛文 8 年（1668 年）以前の古寛永となる。



〔溝状遺構 S007〕

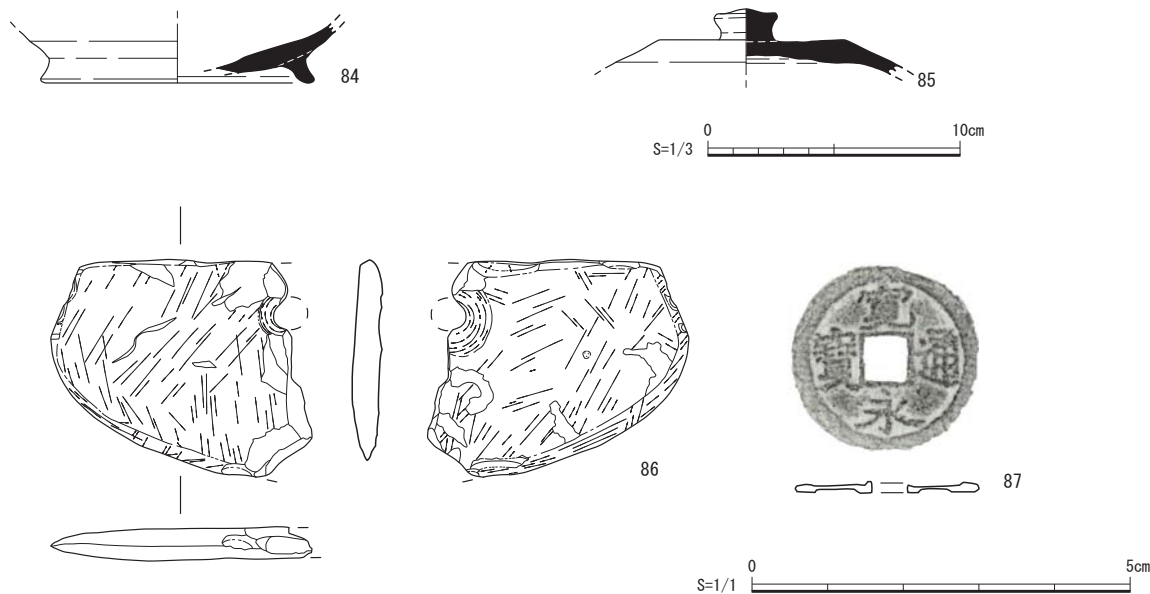
1. 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 しまりあり。マンガン中量。鉄分多量。
2. 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 しまりあり。マンガン中量。鉄分多量。



〔溝状遺構 S008〕

1. 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 しまりあり。マンガン少量。鉄分多量。
2. 褐灰色粘質土 10YR6/1 ややしめる。マンガン少量。鉄分中量。
3. 褐灰色粘質土 10YR5/1 ややしめる。マンガン多量。

第 40 図 溝状遺構 S007・S008 平・断面図



第 41 図 II 層出土遺物実測図

Ⅲ層出土遺物

第 42 図 88 ～ 90 は基本層序Ⅲ層から出土した遺物である。88 は須恵器高台付坏の口縁～底部片である。平底で、底部端に断面逆台形を呈する高台を付す。体部は直線的に外傾し、口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。89、90 は古銭である。89 は「元豊通寶」である。1078 年鑄造の貨幣である。90 は「開元通宝」と思われる。

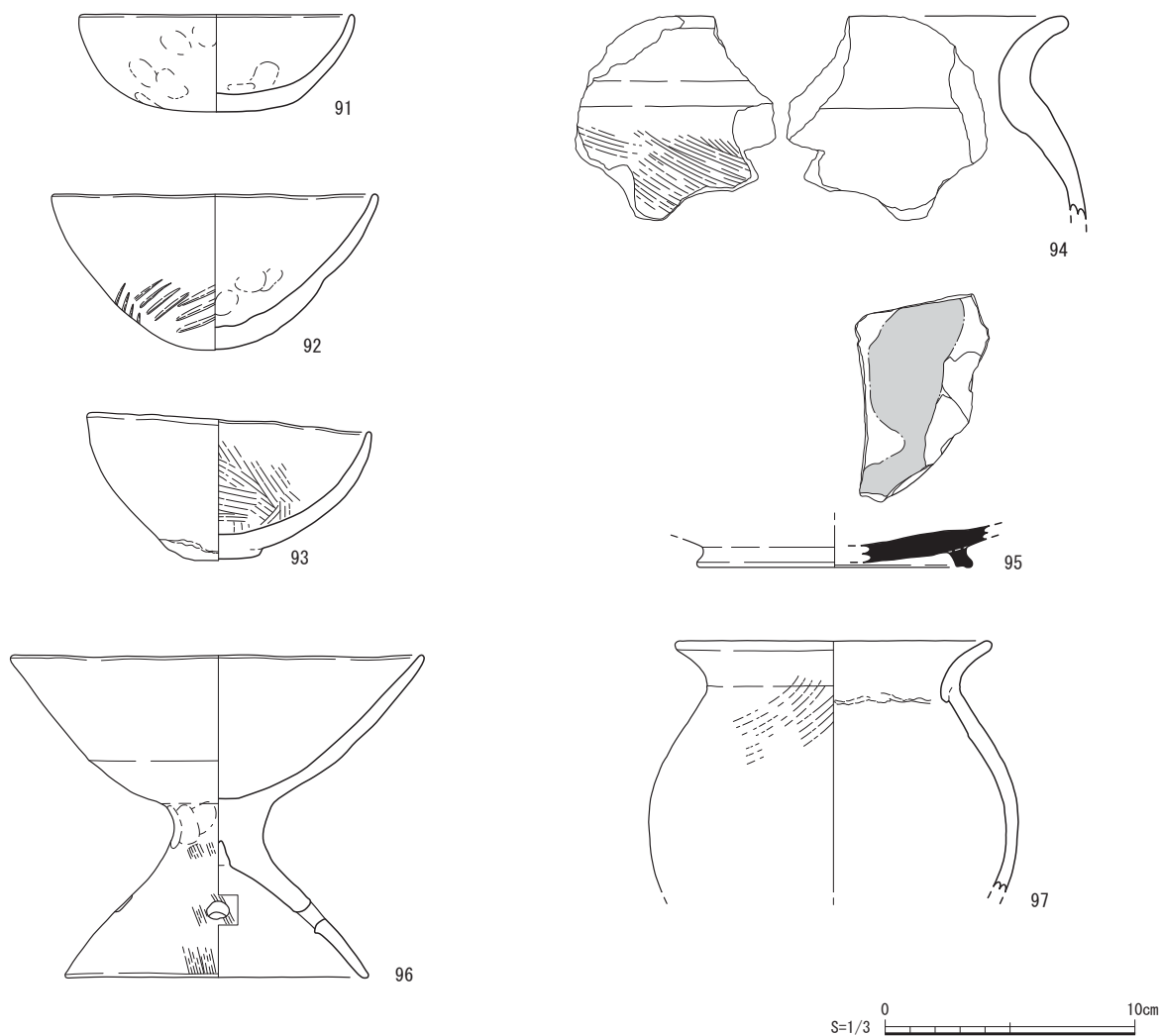


第 42 図 Ⅲ層出土遺物実測図

Ⅳa・Ⅳc 層出土遺物

第 43 図 91 ～ 97 は基本層序Ⅳa 層から出土した遺物である。91 ～ 94 は土師器である。91 は坏で、口縁部を欠くほか、ほぼ完形である。復元口径 11.1cm、器高 3.4cm を測る。丸底で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。92 は鉢の口縁～底部片である。比較的残りが良く、復元口径 12.3cm、器高 6.0cm を測る。尖り気味の底部を持ち、体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。底部外面に板状圧痕が認められる。93 は鉢で、口縁部の一部を欠くほか、ほぼ完形である。口径 11.4cm、器高 5.3cm を測る。底部に粘土の継ぎ足しによる凸状の隆起が認められるものの、丸底を意識しており、体部は内湾しながら立ちあがり、口縁端部を丸く仕上げる。94 は甕の口縁～胴部片で、外面に丹塗りが残存する。器壁は厚く、頸部から胴部に向かって薄くなるものと思われる。口縁部は外反しながら開き、端部を丸く仕上げる。95 は須恵器の高台付坏の底部片である。比較的大型のもので、底部端より内側に端部をやや外側につまみ出す高台を付す。高台に僅かに自然釉が付着する。内外面に火襷痕が認められる。

第 44 図 96・97 は基本層序Ⅳc 層から出土した土器である。96 は高坏である。ほぼ完形のもので、口径 16.5cm、器高 13.2cm を測る。坏部は丸底から外に開き、口縁端部を丸く仕上げる。脚部は脚柱が太めで短く、端部に向かって大きく開き、端部を丸く仕上げる。4 方向に 0.8cm 大の穿孔を配する。97 は甕の口縁～胴部片で、口径 12.8cm を測る。胴部中位に胴部最大径があり、口縁部はくびれを伴いながら外に開き、端部を丸く仕上げる。頸部下の外面に斜方向の板状圧痕が認められる。



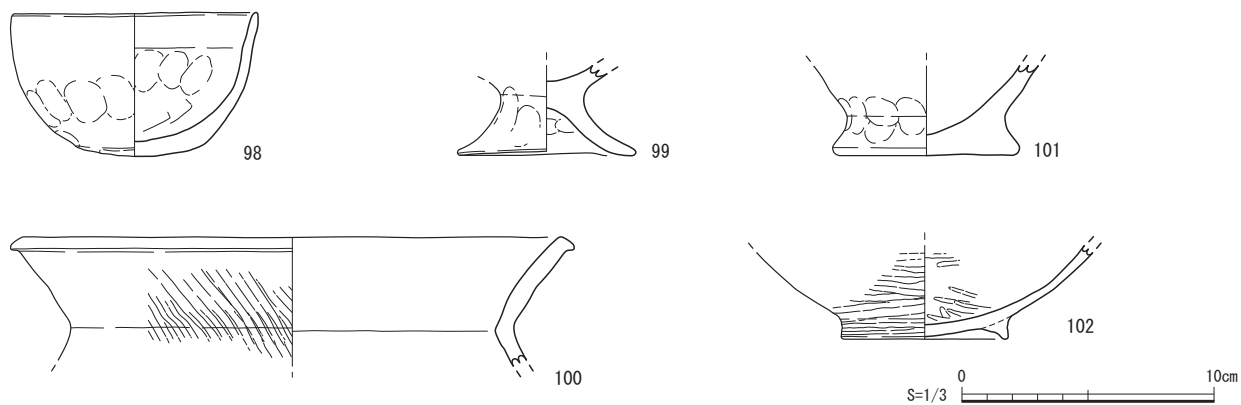
第 43 図 IV a・IV c 層出土遺物実測図

V 層出土遺物

第 44 図 98～101 は基本層序 V 層から出土した土器である。98 は坏である。ほぼ完形で、口径 9.7cm、器高 5.3cm を測る。丸底で、口縁端部に向けて直に立ち上がる。99 は高坏形の土製模造品と考えられる。脚部は端部に向かって外反し、端部を尖り気味に仕上げる。100 は甕の口縁～頸部片である。比較的大型で、口縁部は外に開き、端部を平たく仕上げる。101 は縄文土器の甕形土器である。底部片で、摩耗が激しく、外面が煤けている。

VI 層出土遺物

第 44 図 102 は土師器の椀と思われる土器の体～底部片である。丸底で、断面三角形の高台を付す。調査時に VI 層出土として取り上げたものの、上層からの混入遺物として捉えられるものである。



第 44 図 V・VI層出土遺物実測図

第2表 遺物観察表

遺物番号	図版番号	種別	器種	遺構名	取上げ 番号	層位	残存率	法量cm		調整		色調		胎土	焼成	備考
								口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
1		縄文土器	浅鉢	S128	No. 2	-	細片	-	(8.1)	-	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/2にふい黄橙	2. 5Y7/1 灰白	石英、長石、角閃石	良好 外面黒斑あり、 内面摩滅
2		縄文土器	浅鉢	S128	-	1	口縁部 1/3	(19.8)	(11.7)	-	工具ナデ、ミガキ、ナデ	ミガキ、沈線	10YR7/2にふい黄橙	10YR3/1 黒褐	石英、長石、角閃石	良好 内外面スス付着、内面 沈線1条、脚貼付痕あり
3	14	弥生土器	深鉢	S128	-	1	口縁部小片	-	(9.5)	-	工具ナデ、ヨコナデ、刻目	ヨコナデ、工具ナデ	10YR7/2にふい黄橙	10YR6/1 褐灰	石英、長石、角閃石、 赤色粒	良好 刻目突帯1条貼付
4		弥生土器	深鉢	S128	No. 4	-	口縁部 1/2	(23.0)	(13.3)	-	条痕、ナデ、ヨコナデ	ナデ	10YR7/2にふい黄橙	10YR7/2にふい黄橙	石英、長石、角閃石、 黒曜石、赤色粒	良好 外面スス付着、内面黒 斑あり、刻目突帯2条 貼付
5		弥生土器	甕	S128	No. 3	-	脚部 1/4	-	(4.1)	(8.0)	ヨコナデ	ナデ	5YR7/6 橙	2. 5YR6/6 橙	石英、長石、角閃石、 黒曜石	良好 内外面黒斑あり
8		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	口縁部 1/3	(19.2)	(11.4)	-	ナデ、ヨコナデ、ナデ	ナデ、ヨコナデ	5YR5/3にふい赤褐	7. 5YR5/3にふい褐	石英、長石、角閃石、 赤色粒	不良 内外面スス付着、外面 炭化物付着、刻目突帯 2条貼付
9		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	口縁部 1/4	(24.0)	(14.9)	-	条痕、ナデ	条痕、ナデ	7. 5YR5/2 灰褐	7. 5YR7/4にふい橙	石英、長石、角閃石、 雲母、赤色粒	良好 刻目突帯2条貼付
10		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	口縁部 2/5	22.6	(17.1)	-	指オサエ、条痕、ナデ、 ヨコナデ	指オサエ、ナデ、ヨコナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	石英、長石、角閃石	良好 外面スス付着、内面黒 斑、刻目突帯2条貼付
11	15	弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	口縁部 1/4	(19.4)	(6.6)	-	条痕、ナデ、ヨコナデ	ナデ、条痕、指オサエ	10YR7/1 灰白	10YR6/1 褐灰	石英、長石	良好 外面スス付着、刻目突 帯1条貼付
12		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	口縁部 1/3	(20.8)	(6.0)	-	工具ナデ、ヨコナデ、ナデ	指オサエ、条痕	7. 5YR6/3にふい褐	10YR6/2 灰黄褐	石英、長石、角閃石、 雲母、角閃石、赤色粒	良好 刻目突帯1条貼付
13		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	口縁部 1/4	(18.5)	(13.2)	-	条痕、ヨコナデ	条痕	5YR6/4にふい橙	10YR8/1 灰白	石英、長石、黒曜石	良好 外面スス付着、刻目突 帯1条貼付
14		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	口縁部小片	-	(7.3)	-	条痕、ヨコナデ	条痕、ヨコナデ	7. 5YR4/2 灰褐	5Y2/1 黒	石英、長石、雲母	良好 刻目突帯2条貼付
15		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	口縁部小片	-	(8.7)	-	条痕、ナデ	工具ナデ、条痕、ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/1 灰白	石英、長石、雲母	良好 刻目突帯1条貼付
16		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	口縁部小片	-	(7.3)	-	条痕、ヨコナデ、組織痕	条痕、ナデ、ヨコナデ	10YR3/2 黒褐	10YR5/1 褐灰	石英、長石、角閃石、 雲母	良好 外面スス付着、刻目突 帯1条貼付
17		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	-	-	(11.7)	-	ナデ、ヨコナデ	ナデ	7. 5YR4/1 褐灰	7. 5YR4/1 褐灰	石英、長石、角閃石、 雲母	良好 内面黒斑あり 刻目突帯2条貼付
18	16	弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	口縁部小片	-	(12.2)	-	指オサエ、条痕、ナデ、 ヨコナデ	条痕、ヨコナデ	10YR2/1 黒	10YR7/2にふい黄橙	石英、長石、角閃石、 雲母、赤色粒	良好 刻目突帯2条貼付
19		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	口縁部小片	-	(10.8)	-	条痕、ナデ、ヨコナデ	条痕、ナデ	5YR8/1 灰白	7. 5YR7/2 明褐灰	石英、長石、角閃石	良好 内外面黒斑あり 刻目突帯1条貼付
20		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	底部 4/5	-	(15.9)	(8.1)	条痕、ナデ	指オサエ、条痕、ナデ	2. 5YR7/1 灰白	2. 5YR7/1 灰白	石英、長石、赤色粒	良好

第3表 遺物観察表

遺物 番号	図版 番号	種別	器種	遺構名	取上げ 番号	層位	残存率	法量cm		調整		色調		胎土	焼成	備考
								口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面		
21	16	弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	底部完存	-	(4.2)	8.0	ナデ		2. 5YR6/6 橙		石英、長石、角閃石、 黒曜石、赤色粒	良好
22		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	底部 1/3	-	(2.7)	(8.0)	指オサエ、ナデ		7. 5YR6/3 にぶい褐		石英、長石、赤色粒	良好
23		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	底部完存	-	(4.3)	9.7	指オサエ、ナデ		10YR7/1 灰白		石英、長石、赤色粒	良好 外面黒斑あり
24		弥生土器	深鉢	D3	-	VII a	底部完存	-	(3.5)	8.7	指オサエ、ナデ、ヨコナデ		10YR5/2 灰黄褐		石英、長石、角閃石、 赤色粒	良好 内面黒斑あり
25		弥生土器	浅鉢	D4	-	VII a	底部完存	-	(2.5)	5.9	ナデ		2. 5Y8/1 灰白		石英、長石	良好 内面黒斑あり
26		弥生末～ 古墳前期	高坏	D3	-	VII a	口縁部 1/8	(9.5)	6.1	(6.1)	指オサエ、ナデ、ヨコナデ		10YR7/3 にぶい黄橙		石英、長石、赤色粒	良好
33	7	弥生末～ 古墳前期	坏	S025	No. 1	-	ほぼ完形	9.0	3.8	4.3	指オサエ、ナデ		7. 5YR7/4 にぶい橙		石英、長石、角閃石、 雲母	良好 口縁歪み強い
34		弥生末～ 古墳前期	坏	S025	No. 24	-	口縁部 1/2	(10.6)	6.4	-	指オサエ、工具ナデ、 ナデ、ヨコナデ		7. 5YR5/2 灰褐		石英、長石、角閃石、 赤色粒子	良好 外面スス付着
35		弥生末～ 古墳前期	鉢	S025	-	-	口縁部 1/4	(11.1)	(4.4)	-	ミガキ、ナデ		7. 5YR7/4 にぶい橙		石英、長石、雲母	良好
36		弥生末～ 古墳前期	小型鉢	S025	No. 8	-	ほぼ完形	(11.1)	8.0	3.8	ハケメ、ナデ		5YR5/6 明赤褐		石英、長石、角閃石、 雲母、黒曜石	良好
37		弥生末～ 古墳前期	高坏	S025	No. 17	-	口縁部 1/2 脚部 1/3	(10.5)	9.1	9.5	ハケメ、ヨコナデ		5YR6/6 橙		石英、長石、雲母、 黒色粒、赤色粒	良好
38		弥生末～ 古墳前期	高坏	S025	-	-	脚部接合部完存	-	(3.5)	-	ハケメ、工具ナデ、ナデ		5YR7/6 橙		石英、長石、黒曜石、 赤色粒	良好 穿孔 2 箇所残存?
39	20	弥生末～ 古墳前期	高坏	S025	No. 13	-	脚部	-	(3.2)	9.8	ハケメ、ナデ、ヨコナデ		5YR6/6 橙		石英、長石、雲母、 黒曜石	良好 内外面黒斑あり
40		弥生末～ 古墳前期	小型丸底 壺	S025	No. 4	-	底部完存	-	(7.5)	-	ハケメ、ナデ		7. 5YR7/4 にぶい橙		雲母	良好
41		弥生末～ 古墳前期	甕	S025	No. 3	-	口縁部小片、 頸部～胴部 1/3	(15.2)	(11.7)	-	ナデ、指オサエ、ナデ、 ヨコナデ		7. 5YR7/6 橙		石英、長石、雲母、 赤色粒	良好 全体に摩滅、 外面スス付着
42		弥生末～ 古墳前期	甕	S025	No. 10	-	胴部 3/4 口縁部完存	15.6	23.5	-	タタキ、ハケメ、ヨコナデ		5YR7/8 橙		石英、長石、角閃石、 黒曜石	良好 外面スス付着
43		弥生末～ 古墳前期	壺	S025	No. 14	-	口縁部 1/3	(16.2)	(16.5)	-	ハケメ、ナデ、ヨコナデ		10YR7/3 にぶい黄橙		石英、長石、雲母、 赤色粒	良好 外面スス付着
44		弥生末～ 古墳前期	壺	S025	No. 6	-	口縁部完存 胴部 1/3	(13.2)	(28.4)	-	ハケメ、ナデ、ヨコナデ		10YR8/3 浅黄橙		石英、長石、角閃石	良好 外面黒斑あり
45	21	弥生末～ 古墳前期	甕	S025	No. 11	-	底部	-	(5.2)	5.3	指オサエ、ハケメ、ナデ、 ヨコナデ		5YR5/6 明赤褐		石英、長石、角閃石、 雲母、黒曜石	良好
46		弥生末～ 古墳前期	甕	S025(a)	S088 No. 1	-	口縁部 1/5	(17.2)	11.3	-	ハケメ、ナデ、ヨコナデ		10YR7/2 にぶい黄橙		石英、長石、雲母、 赤色粒	良好 底部穿孔 1 箇所、 外面黒斑あり
47		弥生末～ 古墳前期	甕	S025(a)	-	-	細片	-	(6.2)	-	ハケメ、ナデ、ヨコナデ		10YR6/4 にぶい黄橙		石英、長石	良好 外面黒斑あり

第4表 遺物観察表

遺物 番号	図版 番号	種別	器種	遺構名	取上げ 番号	層位	残存率	法量cm		調整			色調		胎土	焼成	備考
								口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
48		弥生末～ 古墳前期	坏	S026	No. 5	-	底部完存	6.1	4.2	3.8	指オサエ、ナデ	工具ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	石英、長石、雲母、 黒曜石、赤色粒	良好	口縁歪み強い
49		弥生末～ 古墳前期	鉢	S026	No. 1	-	口縁部 1/2	13.7	6.6	7.0	工具ナデ、ナデ、ヨコナデ	工具ナデ、ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英、長石、雲母、 黒曜石、赤色粒	良好	内外面黒斑あり
50		弥生末～ 古墳前期	鉢	S026	No. 3	-	底部	-	(4.2)	4.5	ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英、長石、角閃石、 雲母、黒曜石、赤色粒	良好	外面黒斑あり
51	23	弥生末～ 古墳前期	高坏	S026	No. 10	-	脚部	-	(5.4)	-	タタキ、ナデ	指オサエ、ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	石英、長石、角閃石	良好	
52		弥生末～ 古墳前期	高坏	S026	No. 9	-	-	(19.3)	14.6	13.2	ミガキ、ナデ、ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英、長石、雲母、 角閃石、黒曜石	良好	裾部穿孔4箇所
53		弥生末～ 古墳前期	小型丸底 壺	S026	No. 7	-	口縁部 1/4 底部完存	(11.1)	10.7	29.0	指オサエ、工具ナデ、ナデ、 ヨコナデ	工具ナデ、ナデ、ヨコナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	石英、長石、雲母、 赤色粒	良好	外面黒斑あり
54		弥生末～ 古墳前期	甕	S026	No. 12	-	胴部 2/3 口縁部 1/3	(13.6)	20.4	-	タタキ、ハケメ、ヨコナデ	ケズリ、ヨコナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	石英、長石、角閃石、 黒曜石	良好	外面スス付着、 黒斑あり
55		弥生末～ 古墳前期	鉢	S027	No. 1	-	口縁部 1/2	(12.4)	(5.0)	(3.8)	指オサエ、ミガキ、ナデ、 ヨコナデ	ミガキ、ナデ、ヨコナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR6/2 灰黄褐	石英、長石	良好	外面黒斑あり
56	24	弥生末～ 古墳前期	甕	S027	-	-	口縁部 1/4	(16.2)	(11.4)	-	指オサエ、ハケメ、ヨコナデ	ヘラケズリ、ナデ、 ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英、長石、雲母、 赤色粒	良好	外面スス付着
57		弥生末～ 古墳前期	甕	S027	-	-	頸部 1/3	-	(9.1)	-	ハケメ、ヨコナデ	指オサエ、ハケメ、ヨコナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	石英、長石、角閃石、 雲母、赤色粒	良好	外面スス付着
58	25	弥生末～ 古墳前期	壺	S029	-	-	口縁部小片 頸部 1/5	(12.9)	(8.1)	-	ハケメ、ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	石英、長石、雲母、 黒曜石、赤色粒	良好	
59		弥生末～ 古墳前期	鉢	S029	-	-	口縁部 1/6	(18.9)	(6.8)	-	ナデ、ヨコナデ、ナデ	ナデ、ヨコナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	石英、長石、角閃石、 雲母、赤色粒	良好	
60	28	弥生末～ 古墳前期	甕	S077	-	-	細片	-	(5.8)	-	ナデ、ヨコナデ	ケズリ、ヨコナデ	2.5YR7/1 灰白	10YR8/2 灰白	石英、長石、黒曜石	良好	
61		弥生末～ 古墳前期	甕	S125	No. 2	-	口縁部 1/6	(15.0)	15.3	3.0	タタキ、ハケメ、ヨコナデ	指オサエ、ケズリ、ナデ、 ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英、長石、雲母、 赤色粒	良好	外面スス付着、 内外面黒斑あり
62	30	弥生末～ 古墳前期	甕	S125	No. 1	-	口縁部 1/3	(16.3)	20.6	丸底	タタキ、ハケメ、ナデ、 ヨコナデ	ハケメ、ケズリ、ナデ、 ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	石英、長石	良好	外面スス付着
63		弥生末～ 古墳前期	甕	S125	No. 5	-	口縁部 2/5	(16.6)	25.7	-	ハケメ、ナデ、ヨコナデ	ケズリ、ナデ、ヨコナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	石英、長石	良好	外面スス付着
65	11	弥生末～ 古墳前期	高坏	S127	-	2	口縁部 1/6	(12.8)	9.6	(14.3)	ハケメ、ミガキ、ナデ、 ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	石英、長石、角閃石、 雲母、赤色粒	良好	穿孔3箇所
66	31	弥生末～ 古墳前期	甕	S127	-	1	口縁部 1/5	(18.9)	14.6	丸底	タタキ、ハケメ、ナデ、 ヨコナデ	ナデ、ハケメ、ヨコナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白	石英、長石、雲母、 赤色粒	良好	全体に破裂痕あり、 内外面黒斑あり、 底部穿孔1箇所
67		弥生末～ 古墳前期	甕	S127	-	2	口縁部 1/2	14.9	(19.4)	-	タタキ、ハケメ、ヨコナデ	ケズリ、ハケメ、ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英、長石、赤色粒	良好	外面スス付着
68		弥生末～ 古墳前期	甕	S028	-	-	口縁部～胴部細片	(4.3)	(3.5)	-	指オサエ、ナデ	指オサエ、ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	石英、長石、雲母	良好	
69	33	弥生末～ 古墳前期	鉢	S028	No. 5	-	ほぼ完形	11.2	7.1	3.4	ナデ、ハケメ	指オサエ、工具ナデ、ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	石英、長石、角閃石、 雲母	良好	

第5表 遺物観察表

遺物番号	図版番号	種別	器種	遺構名	取上げ 番号	層位	残存率	法量cm		調整		色調		胎土	焼成	備考
								口径	器高 底径	外面	内面	外面	内面			
70	33	弥生末～ 古墳前期	甕	S028	-	-	口縁部～胴部	-	(5.1)	ナデ、ヨコナデ	ケズリ、ナデ、ヨコナデ	5YR6/8 橙	7.5Y7/4 にぶい橙	石英、長石、黒曜石	良好	内面黒斑あり
71		弥生末～ 古墳前期	壺	S028	No.8	-	口縁部 3/4	(14.2)	(6.2)	ナデ、ハケメ、ヨコナデ	ケズリのちナデ、ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英、長石	良好	内面黒斑あり
72		弥生末～ 古墳前期	甕	S028	No.4	-	口縁部 1/2 胴部 1/2	(16.9)	(19.6)	ハケメ、ヨコナデ	ケズリ、ヨコナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	石英、長石、雲母、 黒曜石、赤色粒	良好	
73	35	弥生末～ 古墳前期	高坏	S032	-	-	脚柱部	-	(6.6)	ハケメ、ナデ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	石英、長石、雲母	良好	
74		弥生末～ 古墳前期	壺	S032	No.1	-	口縁部 1/4	(20.2)	(7.3)	ハケメ、ナデ、ヨコナデ	ハケメ、ナデ、ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/1 灰白	石英、長石	良好	
76	36	弥生末～ 古墳前期	甕	S036	-	-	頸部 1/6	-	(17.7)	ハケメ、ナデ、ヨコナデ	ケズリ、ナデ、ヨコナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	石英、長石、赤色粒	良好	外面スス付着、摩耗
77		弥生末～ 古墳前期	鉢	S044	No.2	-	口縁部小片 底部 1/2	(14.7)	9.5	丸底 ハケメ、ヨコナデ	指オサエ、ハケメ、ナデ、 ヨコナデ	10YR8/2 灰白	7.5YR8/6 浅黄橙	石英、長石、角閃石、 雲母、赤色粒	良好	外面黒斑あり
78		弥生末～ 古墳前期	壺	S044	No.1	-	胴部 1/3 口縁部ほぼ完存	(14.6)	(27.2 [~])	ハケメ、ヨコナデ	ケズリ、ハケメ、ヨコナデ	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR5/6 明褐	石英、長石、角閃石、 雲母、黒曜石	良好	外面黒斑あり
79	37	弥生末～ 古墳前期	坏	B3	-	-	口縁部 1/2	(9.4)	2.6	ナデ	ナデ	7.5YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR7/3 にぶい黄橙	石英、長石	良好	外面黒斑あり
80		弥生末～ 古墳前期	甕	B3	-	㊦	口縁部 1/6	(12.6)	(5.0)	ハケメ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	石英、長石、赤色粒	良好	外面スス付着
81		弥生末～ 古墳前期	甕	B3	-	-	口縁部 1/6	(18.7)	(3.6)	剥落により不明	剥落により不明	2.5YR6/8 橙	7.5YR6/6 橙	石英、長石、角閃石、 赤色粒	不良	
82	41	弥生末～ 古墳前期	甕	B3	-	-	頸部 1/6	(16.2)	(5.2)	タタキ、ハケメ、ヨコナデ	指オサエ、ナデ、ヨコナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	石英、長石、赤色粒	良好	
84		須恵器	高台付坏	D2	-	Ⅱ	底部 1/4	-	(2.3)	回転ヘラケズリ、ナデ、 回転ヘラ切り	回転ナデ、不定方向ナデ	10YR8/1 灰白	10YR7/1 灰白	長石、黒色粒	不良	
85		須恵器	蓋	F4	-	Ⅱ	つまみ部完存 項部 3/5	-	(2.6)	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ、不定方向ナデ	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/3 にぶい橙	石英、長石	不良	
88	42	須恵器	高台付坏	C2	-	Ⅲ	底部	(14.1)	4.1	回転ナデ、回転ヘラ切り、 ナデ	回転ナデ、不定方向ナデ	2.5YR5/2 灰赤	10YR6/1 褐灰	石英、長石	良好	
91		弥生末～ 古墳前期	坏	C4	-	Ⅳ a	口縁部 2/3	(10.8)	3.9	指オサエ、ヨコナデ	指オサエ、ナデ、ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	石英、長石、角閃石、 雲母、赤色粒	良好	外面黒斑あり
92	43	弥生末～ 古墳前期	鉢	C4	-	Ⅳ a	口縁部 1/3	(12.8)	6.2	タタキ、ナデ、ヨコナデ	指オサエ、ナデ、ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	石英、長石、角閃石、 雲母、赤色粒	良好	
93		弥生末～ 古墳前期	鉢	D2	-	Ⅳ a	口縁部 1/2 底部完存	11.2	5.8	ナデ、ヨコナデ	ハケメ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英、長石、雲母	良好	外面黒斑あり 焼き歪み
94		弥生末～ 古墳前期	甕	C3	-	Ⅳ a	口縁部小片	-	(8.1)	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ナデ、ヨコナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	石英、長石、角閃石、 赤色粒	良好	内外面赤色顔料
95	14	須恵器	高台付坏	E4	-	Ⅳ a	底部 1/4	-	(1.7)	ヘラ切り、ナデ	回転ナデ、ナデ	N71 灰白	N71 灰白	石英、長石、黒色粒	良好	内面にスリ面か
96		弥生末～ 古墳前期	高坏	D2	-	Ⅳ c	底部 3/4 口縁部ほぼ完存	(16.2)	12.9	指オサエ、ハケメ、ヨコナデ	摩滅により不明	5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	石英、長石、角閃石、 雲母、角閃石、赤色粒	良好	脚部穿孔 4箇所

第6表 遺物観察表

遺物挿図 番号	図版 番号	種別	器種	遺構名	取上げ 番号	層位	残存率	法量cm			調整		色調		胎土	焼成	備考
								口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面			
97	43	弥生末～ 古墳前期	甕	D2	-	IV c	口縁部 1/2	(12.2)	(10.1)	-	ハケメ、ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	10YR6/2 灰黄褐	石英、長石	良好		
98		弥生土器	坏	C3	-	V	ほぼ完存	(9.6)	5.7	4.7	指オサエ、ナデ	指オサエ、工具ナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	石英、長石	良好		
99		弥生土器	高坏	C3	-	V	脚部ほぼ完存	-	(3.6)	6.9	指オサエ、ナデ、ヨコナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	石英、長石、角閃石、 雲母、赤色粒、 結晶片岩	良好	外面黒斑あり	
100	44	弥生土器	甕	D3	-	V	口縁部 1/4	(21.4)	(5.1)	-	ハケメ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	石英、長石、雲母、 黒色粒、赤色粒	良好		
101		弥生土器	深鉢	C3	-	V	底部 1/2	-	(3.6)	(6.8)	指オサエ、ナデ	ナデ	5YR4/3 にぶい赤褐	石英、長石、角閃石、 赤色粒、結晶片岩	不良	外面スス付着	
102		土師器	碗	D3	-	VI	口縁部 底部 1/5	-	(3.7)	(6.3)	ミガキ、ナデ	ミガキ	7.5YR4/1 褐灰	石英、長石	良好		

(土製品)

遺物挿図版 番号	挿図 番号	種別	器種	遺構名	取上げ 番号	層位	残存率	法量cm		調整				色調		胎土	焼成	備考
								口径	器高	底径	外面	内面	外面	内面	外面			
64	30	土製品	支脚	S125	-	-	ほぼ完存	9.6	9.6	9.8	ヘラケズリ、ナデ、指オサエ	ヘラケズリ、ナデ	7.5YR7/3 にぶい黄橙	石英、長石	良好			
75	35	土製品	紡錘車	S032	-	-	完存	1.7	2.5	-	ナデ	-	10YR8/2 灰白	石英、長石	良好	穿孔1箇所		
83	37	土製品	紡錘車	B3	-	㊾	完存	2.5	2.9	-	ナデ	-	7.5YR6/4 にぶい橙	石英、長石	良好	穿孔1箇所		

(石器)

遺物挿図版 番号	図版 番号	種別	器種	石材	遺構名	取上げ 番号	層位	残存率	法量cm				備考
									長さ	幅	厚さ	重さ	
6	14	石器	削器	サヌカイト	S128	⑤	-	完形（ガジリ有）	4.39	8.10	1.48	41.59g	面下半部欠損
		石器	磨製石斧	石英片岩	S128	-	I	-	11.88	7.03	2.30	242.00g	
27		石器	小型削器	サヌカイト	C-3	-	V - VII a	完形（ガジリ有）	2.94	2.28	0.83	4.39g	
28		石器	小型削器	サヌカイト	D-3	-	VII a	完形（ガジリ有）	2.66	2.19	0.51	3.03g	
29	15	石器	石鏃	黒曜石	D-3	-	VII a	-	2.99	2.22	0.52	2.35g	頂部欠損
30		石器	磨製石器	細粒砂岩	D-3	-	VII a	-	3.58	2.47	1.32	16.76g	上下部分欠損、鉾分付着
31		石器	磨製石斧	層灰岩	D-3	-	VII a	表面 1/2 程度残存、裏面刃部のみ残存	6.51	3.91	1.00	34.06g	
32		石器	削器	サヌカイト	D-3	-	VII a	完形（ガジリ有）	4.86	5.79	1.02	21.52g	
86	41	石器	石包丁	粘板岩	D-2	-	II	1/3 残存	2.86	3.42	0.46	6.19g	

(古銭)

遺物挿図 番号	図版 番号	銭種	層位	外縁外形 (cm)	外縁内径 (cm)	内郭外形 (mm)	内郭内径 (mm)	外縁厚 (mm)	文字面厚 (mm)	質量 (g)	備考
87	41	寛永通寶	II	2.35	1.975	6.75	5.5	1.1	0.4	2.82	
89	15	元龜通寶	III	2.36	2.0	8.5	6.5	1.0	0.8	2.98	
90	42	開元通寶	III	2.11	2.05	7.25	6.65	0.75	0.65	3.22	

第4章 分 析

玉名平野遺跡群（第3次）の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

玉名平野遺跡群の第3次調査区は、熊本県玉名市河崎に所在し、菊池川下流域に広がる玉名平野に位置する。調査区からは、中世の水田面、弥生時代終末から古墳時代前期の生活面、縄文時代晩期の生活面の3面が確認されている。

本分析調査では、中世の水田面およびそれに伴う畦畔の試料を対象に、古環境に関する情報や水田の検証などを目的として、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

試料は、中世とされる水田層のⅣa層より5点、（試料番号1～4、6）、水田に伴う畦畔の③層より1点（試料番号5）の、計6点である。採取遺構などの詳細は、結果と合わせて表に示す。

調査区の基本層序によれば、縄文海進に伴い形成された有明海粘土層（Ⅸ層）が最下層に確認され、上位に向かって有明海が陸地化する際の堆積層（Ⅷ層）、弥生時代早期の遺物包含層Ⅶa層、弥生時代中・後期の遺物包含層（Ⅵ層）、弥生時代終末期～古墳時代前期の遺物包含層（Ⅴ層）、中世の水田床土（Ⅳb層）と水田層（Ⅳa層）、近世の以降包含層～現代の表土（Ⅲ～Ⅰ層）などが確認されている。

これら6点の試料全点について、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数する（化石の少ない場合は、この限りではない）。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種などの重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt(1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot(1985-1991)、Desikachary(1987)、Lange-Bertalot(2000)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示す。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察す

る上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

(2) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が 100 個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個/g 未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め（100 単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表 1 に示す。分析した 6 試料のうち、試料番号 1 (S019 の IV a 層)、試料番号 2 (S017 の IV a 層)、試料番号 3 (S012 の IV a 層)、試料番号 4 (S015 の IV a 層) の 4 試料から珪藻化石が産出したが、試料番号 5 (S002

の③層)、試料番号 6 (S022 の IV a 層) は無化石であった。検出された珪藻化石の保存状態は、全体的に壊れた殻が多く、不良である。

試料番号 1 (S019 の IV a 層) からは、2 個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で流水不明種の *Fragilaria* spp.、*Pinnularia* spp. 等である。

試料番号 2 (S017 の IV a 層) からは、2 個体産出した。産出した分類群は、淡水～汽水生種と淡水生種で構成

表 1. 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	S019	S017	S012	S015	S002	S022
	塩分	pH	流水		Ⅳ a 層 1	Ⅳ a 層 2	Ⅳ a 層 3	Ⅳ a 層 4	③層 5	Ⅳ a 層 6
Rhopalodia gibberula (Ehr.) Mueller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	1	-	-	-	-
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	1	-	-	-
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	0	-	-	-	1	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	1	1	-	-
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	l-ph	0	-	-	1	-	-	-
海水生種					0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	1	0	0	0	0
淡水生種					2	1	3	2	0	0
珪藻化石総数					2	2	3	2	0	0

凡例

塩分: 塩分濃度に対する適応性

pH: 水素イオン濃度に対する適応性

流水: 流水に対する適応性

Euh : 海水生種

al-bi: 真アルカリ性種

l-bi: 真止水性種

Euh-Meh: 海水生種 - 汽水生種

al-il: 好アルカリ性種

l-ph: 好止水性種

Meh : 汽水生種

ind : pH 不定性種

ind : 流水不定性種

Ogh-Meh: 淡水生種 - 汽水生種

ac-il: 好酸性種

r-ph: 好流水性種

Ogh-hil: 貧塩好塩性種

ac-bi: 真酸性種

r-bi: 真流水性種

Ogh-ind: 貧塩不定性種

unk : pH 不明種

unk : 流水不明種

Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種

Ogh-unk: 貧塩不明種

環境指標種

A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海水藻場指標種 C2: 汽水藻場指標種

D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 汽水砂質干潟指標種

E1: 海水泥質干潟指標種 E2: 汽水泥質干潟指標種 F: 淡水底生種群 (以上は小杉,1988)

G: 淡水浮遊生種群 H: 河口浮遊性種群 J: 上流性河川指標種 K: 中～下流性河川指標種

L: 最下流性河川指標種群 M: 湖沼浮遊性種 N: 湖沼沼沢湿地指標種 O: 沼沢湿地付着生種

P: 高層湿原指標種群 Q: 陸域指標種群 (以上は安藤,1990)

S: 好汚濁性種 U: 広適応性種 T: 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe,1995)

R: 陸生珪藻 (RA:A 群, RB:B 群, RE: 未区分、伊藤・堀内,1991)

される。産出した種は、淡水～汽水生種の *Rhopalodia gibberula*、淡水生種で流水不明種の *Pinnularia* spp. である。

試料番号 3 (S012 のⅣ a 層) からは、3 個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Amphora ovalis* var. *affinis*、止水性種の *Stauroneis phoenicenteron* var. *signata*、流水不明種の *Pinnularia* spp. である。

試料番号 4 (S015 のⅣ a 層) からは、2 個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Pinnularia viridis*、淡水生種で流水不明種の *Pinnularia* spp. である。

(2) 花粉分析

結果を表 2、図 1 に示す。花粉化石は、試料番号 6 (S022 のⅣ a 層) で豊富に、試料番号 2 (S017 のⅣ a 層) でかろうじて定量解析が行える程度の産出が見られたが、その他の 4 試料では産出が少ない。花粉化石の保存状態は、検出された殆ど花粉外膜が破損や溶解しており、全体的に悪い。

花粉化石の産出が多い試料番号 6 (S022 のⅣ a 層) と試料番号 2 (S017 のⅣ a 層) の花粉群集組成は類似しており、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が多産し、マツ属、コナラ属コナラ亜属、シイ属―マテバシイ属などもやや多く認められる。その他ではモミ属、ツガ属、スギ属、ヤマモモ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科などを伴う。

花粉化石の産出が少なかった試料番号 1 (S019 のⅣ a 層)、試料番号 3 (S012 のⅣ a 層)、試料番号 4 (S015 のⅣ a 層)、試料番号 5 (S002 の③層) も、上記の 2 試料で多産した種類などが確認されている。

表 2. 花粉分析結果

種 類	S019 IV a 層 1	S017 IV a 層 2	S012 IV a 層 3	S015 IV a 層 4	S002 ③層 5	S022 IV a 層 6
木本花粉						
マキ属	—	—	—	1	—	—
モミ属	—	5	—	3	—	14
ツガ属	—	4	—	1	—	8
マツ属	4	15	—	5	3	33
スギ属	2	2	—	—	—	5
ヤマモモ属	—	—	—	—	—	4
クマシデ属—アサダ属	1	1	—	1	—	—
ハンノキ属	—	1	—	—	1	—
ブナ属	—	—	—	—	—	1
コナラ属コナラ亜属	1	17	—	4	4	29
コナラ属アカガシ亜属	20	43	—	15	13	124
シイ属—マテバシイ属	4	13	1	5	5	30
エノキ属—ムクノキ属	—	1	—	—	—	—
アカメガシワ属	1	1	—	—	—	—
モチノキ属	—	—	—	—	—	1
ツツジ科	—	—	—	1	—	1
イボタノキ属	—	1	—	—	—	—
草本花粉						
ガマ属	—	—	—	—	—	1
オモダカ属	1	—	—	—	1	—
イネ科	14	55	2	28	15	131
カヤツリグサ科	5	3	—	—	2	13
クワ科	—	—	—	—	1	—
サナエタデ節—ウナギツカミ節	—	3	—	2	1	3
アカザ科	—	—	—	—	—	2
ナデシコ科	—	5	—	2	—	4
アブラナ科	—	—	—	—	—	8
セリ科	—	—	—	—	—	2
ヨモギ属	8	26	—	5	16	44
キク亜科	—	9	—	6	—	14
タンポポ亜科	2	5	—	3	2	4
不明花粉						
不明花粉	3	12	—	1	4	20
シダ類孢子						
ヒカゲノカズラ属	—	2	—	2	2	1
イノモトソウ属	1	7	—	8	2	11
他のシダ類孢子	17	68	1	39	37	141
合 計						
木本花粉	33	104	1	36	26	250
草本花粉	30	106	2	46	38	226
不明花粉	3	12	0	1	4	20
シダ類孢子	18	77	1	49	41	153
合計（不明を除く）	81	287	4	131	105	629

(3) 植物珪酸体分析

結果を表 3、図 2 に示す。各試料からは植物珪酸体が数多く検出されるものの、概して保存状態が悪い。

植物珪酸体含量は、水田層とされる試料番号 1 (S019 の IV a 層) で 63,200 個 /g と最も多く、対して試料番号 3 (S012 の IV a 層) で 16,900 個 /g と最も少ない。他の試料では、30,000 個 /g 前後である。

各試料からは、栽培植物であるイネ属の産出が目立ち、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。概して機動細胞珪酸体の含量が多く、水田層とされる試料番号 1 (S019 の IV a 層) で 9,300 個 /g と最も多く、対して試料番号 3 (S012 の IV a 層) で 1,000 個 /g と最も少ない。他の試料では、5,000 個 /g 前後である。

この他に検出される分類群は同様であり、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などである。こ

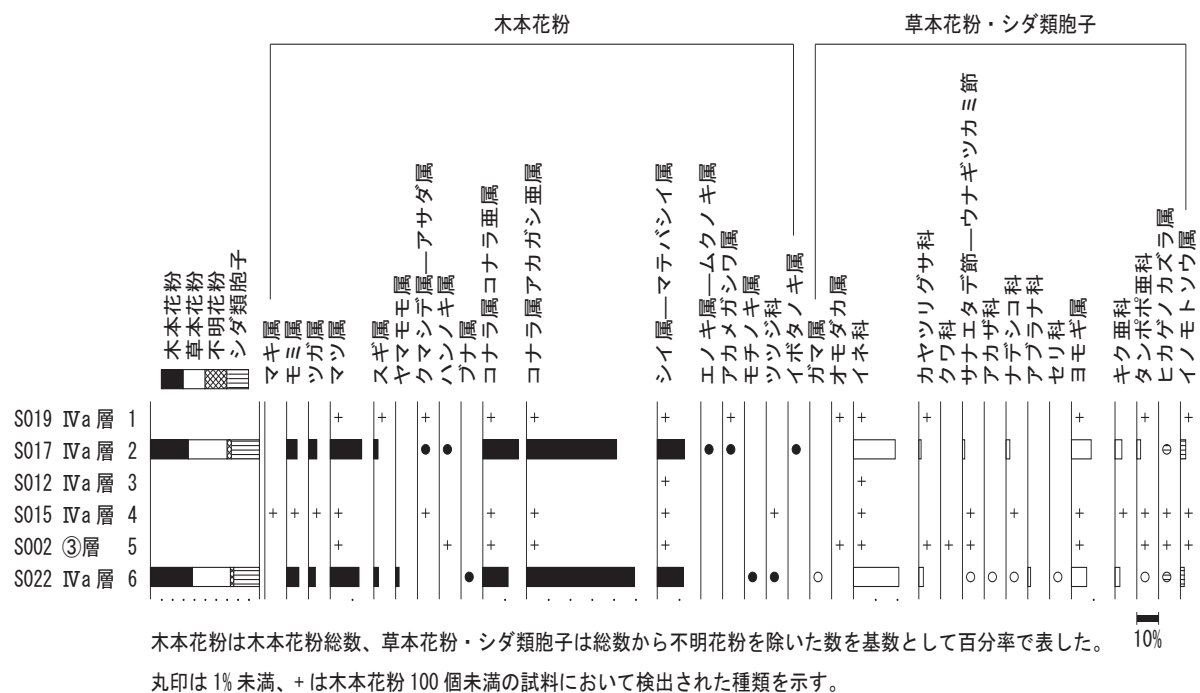


図1. 花粉化石群集

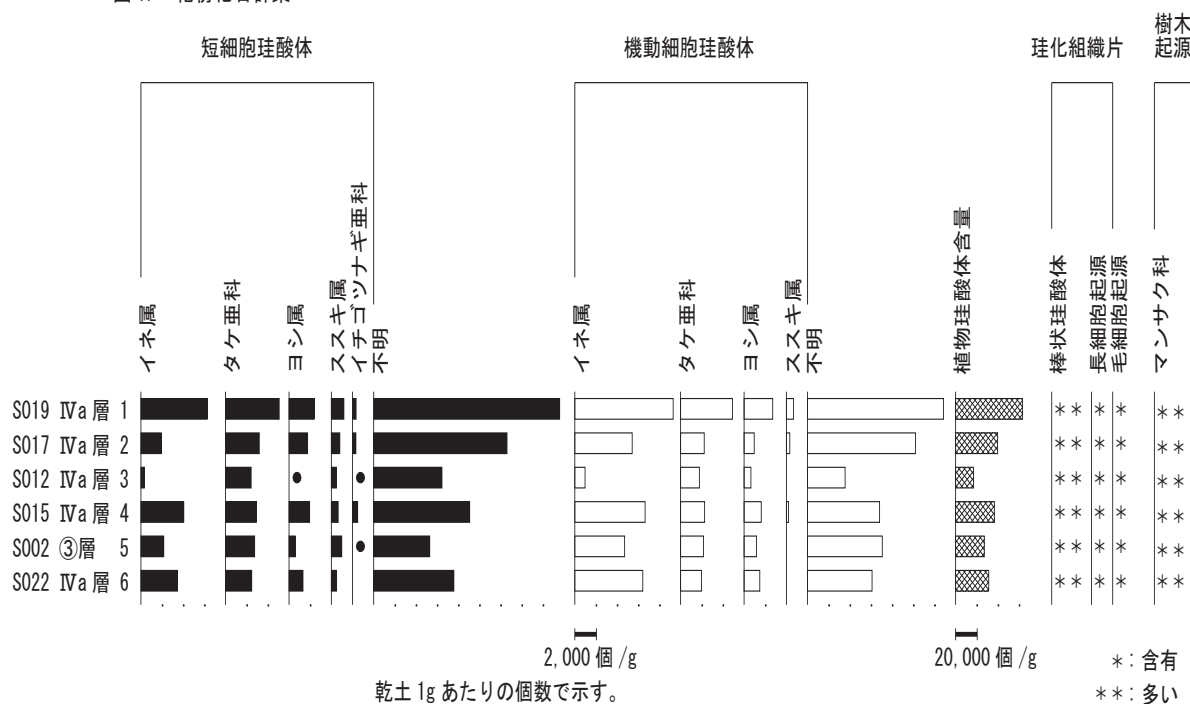


図2. 植物珪酸体含量

れらの中ではタケ亜科やヨシ属の含量が多い。また、イネ科起源（棒状珪酸体，長細胞起源，毛細胞起も検出されるが、分類群の特定には至らない。

なお、イネ科起源の他に樹木起源としてマンサク科（イスノキ属を含む）が多く検出される。

4. 考察

(1) 堆積環境

今回分析した6試料は、いずれも珪藻化石の産出が非常に少ない、あるいは全く産出ししない。そのため、珪藻化石の生態性や群集の生育特性による、直接的な堆積環境の推定は困難である。経験的には、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。次に、珪藻化石を構成するシリカ鉱物は、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度指数が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいこ

表 3. 植物珪酸体含量

分 類 群	(個 /g)					
	S019	S017	S012	S015	S002	S022
	IV a 層 1	IV a 層 2	IV a 層 3	IV a 層 4	③層 5	IV a 層 6
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ属	6,300	1,900	300	4,100	2,200	3,500
タケ亜科	5,100	3,200	2,400	2,900	2,700	2,500
ヨシ属	2,400	1,800	200	1,900	600	1,300
ススキ属	1,200	800	500	600	1,000	500
イチゴツナギ亜科	300	300	200	500	200	-
不明	17,600	12,600	6,500	9,100	5,300	7,600
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ属	9,300	5,400	1,000	6,600	4,700	6,400
タケ亜科	4,900	2,200	1,800	2,300	2,200	2,000
ヨシ属	2,700	1,000	600	1,600	1,200	1,500
ススキ属	700	300	-	200	-	-
不明	12,800	10,200	3,500	6,800	7,100	6,100
合 計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	32,800	20,600	10,000	19,100	12,000	15,300
イネ科葉身機動細胞珪酸体	30,400	19,100	6,900	17,500	15,100	16,000
植物珪酸体含量	63,200	39,700	16,900	36,600	27,100	31,300
イネ科起源(その他)						
棒状珪酸体	* *	* *	* *	* *	* *	* *
長細胞起源	*	*	-	*	*	*
毛細胞起源	*	*	*	*	*	*
樹木起源珪酸体						
マンサク科	* *	* *	* *	* *	* *	* *

1) 含量は、10 の位で丸めている(100 単位にする)。

2) 合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。

3) - : 未検出、* : 含有、* * : 多い。

とが実験により推定されている(千木良, 1995)。このため、各土層で堆積時に取り込まれたほとんどの珪藻化石は、好気的な環境下になる等の原因で分解・消失した可能性が高い。

産出数が少ない中、中世の水田層とされるIV a 層のうち、S019(試料番号 1)、S017(試料番号 2)、S012(試料番号 3)、S015(試料番号 4) から産出した種の生態性について述べる。まず、淡水～汽水生種の *Rhopalodia gibberula* は、田中(1987)によると、群馬県で発掘された古代水田からも本種が多産しており、当時の水田土壌に、多量に出現したことは、水田の水が塩類を豊富に含んでいたことを示しているとしている。また、Cholnoky(1968)によれば、本種は高 pH の水域を好むとしている。本種は、基本的には淡水生種と考えられるため、海域には生育できないと思われるが、前述のように塩分に対しては、他の種群にくらべて耐性が高いため、沿岸部の海水の影響がおよんで、塩分濃度が高くなる後背湿地をはじめ、湿地や河岸などで比較的、水が停滞することの多い場所(淀み)などの水中の塩類濃度が高い水域に特徴的に認められる。次に、淡水生種で流水不定性種の *Amphora ovalis* var. *affinis* は、環境に対する適応能力が高い種であり、基本的に淡水生であるが、汽水～淡水のさまざまな環境の水域から認められる。止水性種の *Stauroneis phoenicenteron* var. *signata* は、塩分、pH および流水のいずれに対しても不定であるが、承名変種の *Stauroneis phoenicenteron* に伴って生育していることが多いため、概ね湿地や池沼・湖沼の縁辺等の止水域に生育する種と考えられる。淡水生種で流水不明種の *Fragilaria* spp.、*Pinnularia* spp. は、属自体がいずれも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。

以上のことから、これら 4 地点のIV a 層からわずかに産出した種は、湿地等に生育する種類であり、水田の水域環境に生育していても矛盾しない。

(2) 古植生

今回分析した試料のうち、S017(試料番号2)とS022(試料番号6)のIV a層以外の4試料では、花粉化石の産出が少なく古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。また、いずれの試料でも花粉化石の保存状態が悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められた。花粉やシダ類胞子の腐蝕に対する抵抗性は種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998 など)。検出された花粉化石は、全体的に保存状態が悪く、比較的分解に強い花粉やある程度分解の影響を受けても同定可能な種類が多く確認された。珪藻分析の結果も踏まえると、得られた花粉化石群集は好気的環境下による分解・消失の影響を受けており、分解に強い花粉が選択的に多く残されている可能性がある。したがって、当時の周辺植生を正確に反映していない可能性がある。このことを考慮した上で、古植生の検討を行う。

周辺の森林植生を反映する種類を見ると、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属が多産する。アカガシ亜属は暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要構成要素であり、シイ属—マデバシイ属、ヤマモモ属なども同様である。また、植物珪酸体分析で検出されたマンサク科も、イスノキなどが照葉樹林に生育する。よって、中世頃の本遺跡周辺は、アカガシ亜属を主体とする照葉樹林が分布し、部分的に温帯針葉樹のモミ属、ツガ属、スギ属や、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属なども伴っていた可能性もある。また、マツ属は生育環境の適応範囲が広いので、他の広葉樹の生育に不適な尾根筋や海岸沿い、あるいは二次林として生育する種類であることから、当時の海岸沿いや林縁部などに分布した可能性がある。

草本植生についてみると、花粉分析ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科などを伴う。植物珪酸体でも、栽培種を除くと、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科が確認された。これらはいずれも開けた明るい場所に生育する種を含む分類群であり、生育していたと考えられる。その他に認められる草本花粉も、同様の種群が認められる。よって、これらは当時の水田周辺の草地などに生育していた可能性が高い。また、花粉分析で認められたガマ属、オモダカ属などの水湿地生植物は、水田雑草としても一般的であることから、当時の水田などに生育していた可能性がある。

(3) 水田の検証

植物珪酸体分析を実施した6ヶ所では、いずれも栽培種のイネ属が産出し、S012のIV a層(試料番号3)を除いた5ヶ所で、その産出が目立った。特に機動細胞珪酸体の含量は、水田層とされるS019のIV a層(試料番号1)で9,300個/gと最も多く、他の地点でも5,000個/g前後であった。安定した稲作が行われた水田跡の土壌では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され、植物珪酸体含量(植物珪酸体密度)が高くなる。水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山, 2000)。この事例と比較すれば、試料番号3を除いた5ヶ所は同等もしくは多いと判断される含量である。

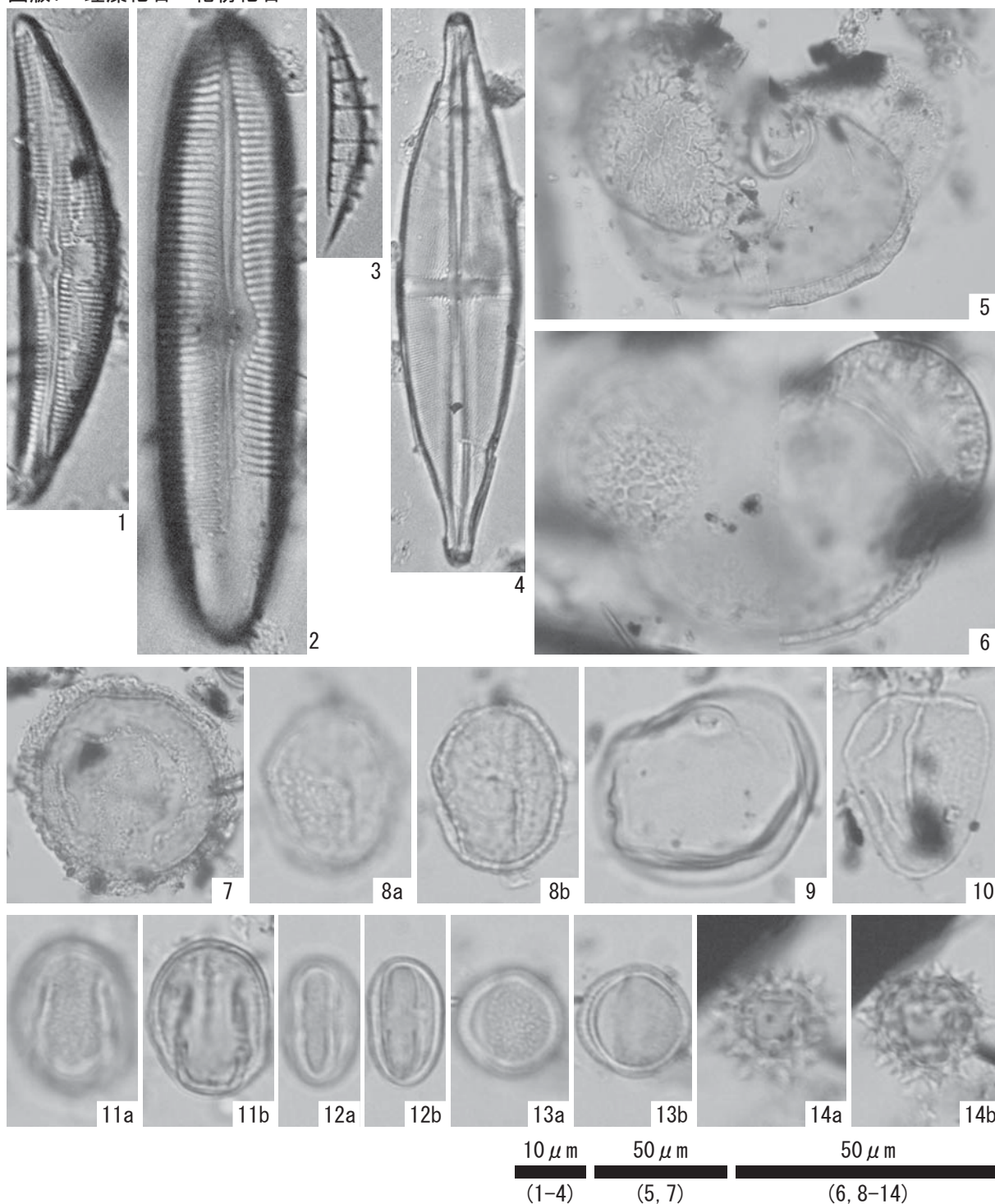
今回の産状を考慮すれば、中世の水田層とされるIV a層のうち、S019(試料番号1)、S017(試料番号2)、S015(試料番号4)、S022(試料番号6)では、水田稲作が行われていたと考えられる。また、畦畔とされるS002の③層(試料番号5)でも水田土壌と同等のイネ属機動細胞珪酸体含量を示すことから、畦畔を形成する際に水田土壌を用いたことや、稲藁などの植物体を混ぜていたことなどの可能性がある。

イネ属珪酸体が産出したものの、その含量が少なかったS012のIV a層(試料番号3)では、花粉化石も他の地点と比べて産出個体数が少ない。この点については、調査地点での稲作が短くイネ属が蓄積しにくかったことや、他の地点と比較して分解が進みやすかったことなどが想定される。この点は、今後さらに土壌の状態や詳細な堆積過程などを検討することが望まれる。

引用文献

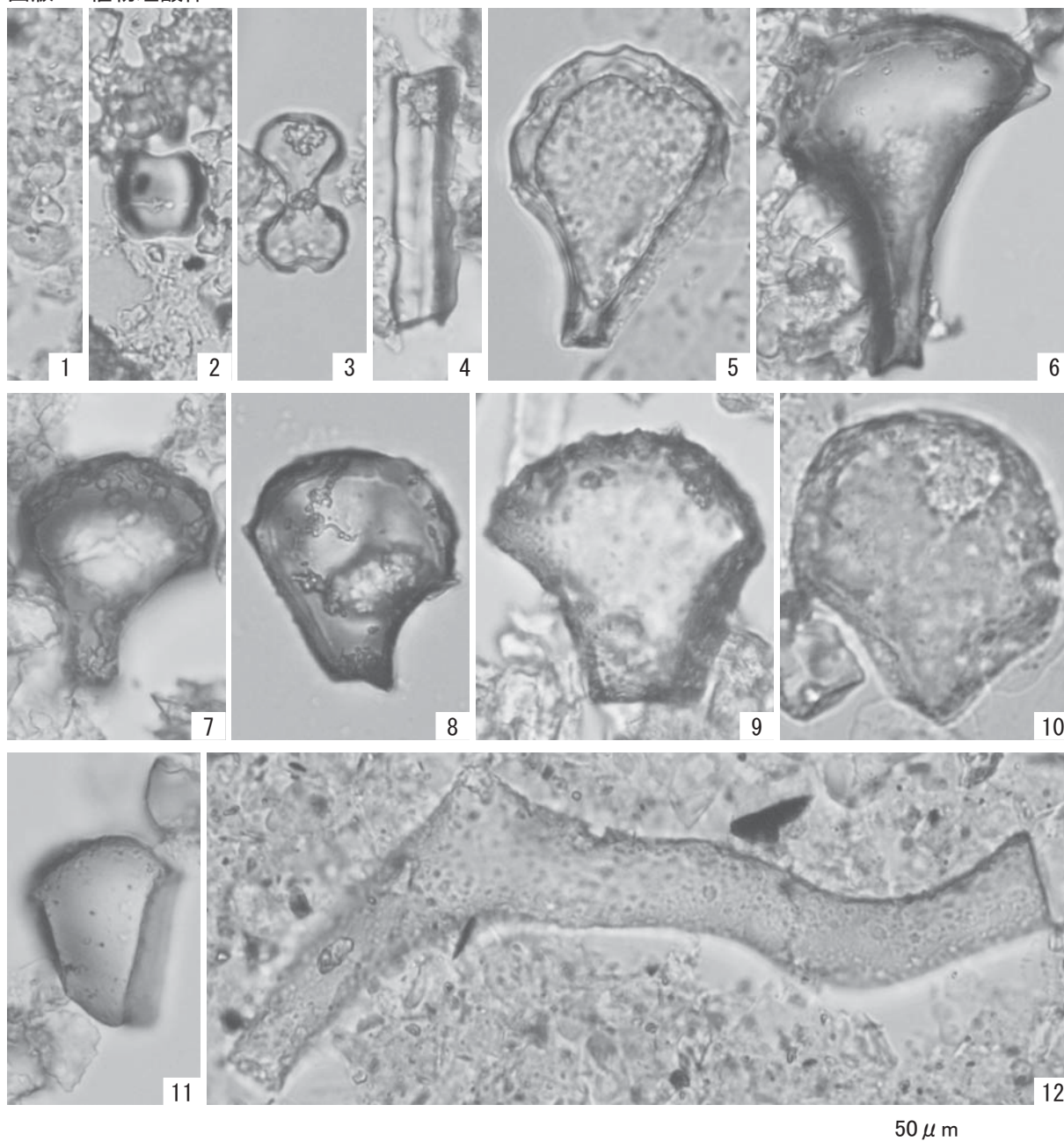
- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35 - 47.
- 千木良雅弘, 1995, 風化と崩壊. 近未来社, 204p.
- Cholnoky, B. J., 1968, Die Oekologie der Diatomeen in Binnengewässern. Lehre (Cramer), 699p.
- Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps and Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.
- 藤木利之・小澤智生, 2007, 琉球列島産植物花粉図鑑. アクアコーラル企画, 155p.
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809, 1-155, 274-349.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23-44.
- 近藤鎌三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- 小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica, 9, 250p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Süßwasser flora von Mitteleuropa, 2(1): 876p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Süßwasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Süßwasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Süßwasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.
- Lange-Bertalot, H., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA: Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 pls. 4504 figs, 925p.
- 三宅 尚・中越信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会, 824p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- 島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- 杉山真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オパール). 辻 誠一郎 (編著) 考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.
- 田中宏之, 1987, 群馬県高崎市北部から発掘された古代水田の珪藻. 群馬県立歴史博物館紀要, 8, 1-20.
- 徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

図版1 珪藻化石・花粉化石



1. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck (S012 IVa層;3)
2. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (S015 IVa層;4)
3. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) Mueller (S017 IVa層;2)
4. *Stauroneis phoenicenteron* var. *signata* Meister (S012 IVa層;3)
5. モミ属 (S022 IVa層;6)
6. マツ属 (S022 IVa層;6)
7. ツガ属 (S022 IVa層;6)
8. コナラ属コナラ亜属 (S022 IVa層;6)
9. イネ科 (S022 IVa層;6)
10. カヤツリグサ科 (S022 IVa層;6)
11. コナラ属アカガシ亜属 (S022 IVa層;6)
12. シイ属—マテバシイ属 (S022 IVa層;6)
13. ヨモギ属 (S022 IVa層;6)
14. キク亜科 (S022 IVa層;6)

図版2 植物珣酸体



- | | |
|-------------------------------|---------------------------------|
| 1. イネ属短細胞珣酸体 (S019 IVa層;1) | 2. ヨシ属短細胞珣酸体 (S019 IVa層;1) |
| 3. ススキ属短細胞珣酸体 (S002 ③層;5) | 4. イチゴツナギ亜科短細胞珣酸体 (S015 IVa層;4) |
| 5. イネ属機動細胞珣酸体 (S017 IVa層;2) | 6. イネ属機動細胞珣酸体 (S015 IVa層;4) |
| 7. イネ属機動細胞珣酸体 (S002 ③層;5) | 8. イネ属機動細胞珣酸体 (S022 IVa層;6) |
| 9. タケ亜科機動細胞珣酸体 (S015 IVa層;4) | 10. ヨシ属機動細胞珣酸体 (S017 IVa層;2) |
| 11. ススキ属機動細胞珣酸体 (S017 IVa層;2) | 12. マンサク科葉部珣酸体 (S019 IVa層;1) |

第5章 総 括

第1節 各時代の様相

玉名平野遺跡第3次調査では、柳町遺跡の南縁にあたる箇所が調査区であったため、柳町遺跡が立地する微高地の広がり調査区の北側まで認められ、その南側一帯には自然流路が走る状況であった。調査の結果、縄文時代晩期、弥生時代早期、弥生時代末～古墳時代前期、古代・中世と4つの時代の人々の営みの痕跡が確認されたが、こうした地形的状況に応じて遺跡が形成されている様子が明らかとなった。以下に、調査区内における各時代の成果についてまとめる。

縄文時代晩期

調査区内における最も古い時代が縄文時代晩期となる。この時代の遺構として、北側微高地の南斜面上から、弥生時代早期の遺物包含層（基本層序Ⅶa層）に覆われる状態で、竪穴建物1基（竪穴建物S128）、土坑1基（土坑S143）を検出した。竪穴建物S128は3.65 m×3.35 mの隅丸方形を呈する比較的小さな竪穴建物で、黒川式土器が伴うものであった。これは、縄文時代晩期には玉名平野内の微高地にも居住域が広がることを表わすものといえる。

弥生時代早期

続く弥生時代早期の遺物として、北側微高地の南斜面上、自然流路内の堆積層（基本層序Ⅶa層）から突帯文土器が出土した。微高地から自然流路への落ち際にさほど摩耗せずに集積している状況が認められることから、土器が廃棄された後、あまり移動していない状況と考えられた。柳町遺跡発掘調査（H6～H9）においても同様な状況が認められ、その北側一帯に展開する弥生時代末～古墳時代前期の集落の造成の際に流れ込んだ可能性が指摘されている。このことから北側微高地上に集落があったものと思われる。

弥生時代末～古墳時代前期

弥生時代末～古墳時代前期には、竪穴建物跡7基（S025～027、029～031、077）、竪穴状遺構2基（S063、125）、溝状遺構5条（S028、032、060、095）、土坑、ピット等を検出した。いずれも北側微高地上に位置する。竪穴建物7基については、①4.06 m×2.64 m以上（竪穴建物S027）→3.15 m×1.92 m以上（竪穴建物S025）、4.63 m×3.20 m（竪穴建物S026）の先後関係、②3.64 m×2.36 m（竪穴建物S031）→3.27 m×3.65 m（竪穴建物S030）→3.35 m×3.15 m（竪穴建物S029）の先後関係が確認され、そのうち②の方では、平面プランが長方形から方形に推移している状況が把握された。柳町遺跡発掘調査（H6～H9）においても調査Ⅰ区で7基、調査Ⅵ・Ⅶ区で5基、調査Ⅷ区で6基の同時代の竪穴建物が検出され、玉名平野条里跡発掘調査（H12～H20）においても柳町遺跡の北側から同時代の竪穴建物を検出されている。今回検出した建物群は、その南端に位置するものである。なお、柳町遺跡発掘調査（H6～H9）では切り合い関係、出土遺物の検討から5期の時期区分を行っている。

古代・中世

古代は遺物の出土が数点認められるのみで判然としないが、中世の遺構としては、北側微高地の南側一帯から中世の水田の畦畔8条（S002～006、009～011）とそれに付随する溝状遺構2条（S007・008）を検出した。うち南北を走る畦畔S002は裾部幅1.2～2.2 mを測り、中畦畔と考えてよいものであった。

第2節 玉名平野における土地利用の変遷

玉名平野遺跡群は、柳町遺跡、両迫間日渡遺跡、玉名平野条里跡などの遺跡を包括する遺跡群で、菊池川右岸の玉名平野に位置する。玉名平野における土地利用の変遷について、これまでの発掘調査事例から見ていくことにする。



第45図 玉名平野遺跡群第3次調査区と周辺の遺構分布図

玉名平野は縄文海進退により縄文時代前期をピークに少しずつ陸地化するが、縄文時代晩期以前は、その大部分は低湿地であったものと推定されている。第3次調査においても、その最下層に有明層（基本層序Ⅷ層）が認められ、縄文海進が調査区まで及んだことがわかる。縄文時代後期以前の遺跡の分布を見ても、その大部分は台地や丘陵の裾部に点在しており、玉名平野遺跡群におけるこれまでの調査を見ても、縄文時代中期の廃棄土坑（阿高式土器）1基を検出したのみである。

縄文時代晩期になると、玉名平野の陸地化が進み、平野内にも集落が形成されるようになるものと考えられ、今回の調査で検出された黒川式土器を伴う竪穴建物1基はそれを物語るものといえる。このように、縄文時代晩期以降、菊池川の自然堤防とその後背地、さらに平野に点在する微高地に集落が形成されるようになるものと推察される。弥生時代早期には、柳町遺跡、両迫間日渡遺跡で突帯文土器の遺物包含層が確認されている。特に柳町遺跡では自然流路内に比較的まとまった形で出土しており、今回の調査でも微高地の斜面部に集中して廃棄された状況が見て取れる。現在のところ遺構は確認されていないものの、弥生時代早期の集落が微高地上に存在したことは確実視される。

弥生時代前期になると、柳町遺跡調査Ⅹ区で杭列、堰など、水田に付随する施設と考えられる遺構が検出されており、少なくともこの頃には玉名平野において水稻耕作が行われていたと考えられるが、その開始については弥生時代早期の様相の解明を待つ必要がある。中期には、玉名平野遺跡群の令和2年度（2020年度）に実施した第1次調査で竪穴建物1基と小児骨を納めた甕棺墓1基（黒髪式）が検出されており、柳町遺跡より500m程南の河崎天満宮付近の微高地に集落が形成されていたものと思われる。弥生時代後期の住居も一部認められるが、柳町遺跡において比較的大規模な集落が形成されるのが、弥生時代末から古墳時代前期にかけてである。柳町遺跡調査Ⅰ区では、遺構の切り合い、出土遺物の検討から5期に及ぶ時期区分がなされるなど、1世紀余りの間、集落が継続していった状況が見て取れる。古墳時代中・後期の遺構としては、柳町遺跡では見つかっておらず、両迫間日渡遺跡で竪穴建物等や水田跡が確認されていることから、居住域が移り変わった状況が見て取れる。

古代には、柳町遺跡Ⅷ区で規格性のある掘立柱建物群が出現するが、円面硯、墨書土器、石帯などの出土遺物が認められることから官衙的な施設であったことが指摘されており、その周辺部に7世紀末からの集落が形成されたものと思われる。令和2年度実施の第1次調査においても、竪穴建物1基と成人骨を納めた木棺墓1基を検出しており、それ以外の低地に、水田や水路、溝などが造営されたものと思われるが、柳町遺跡調査Ⅱ区で大畦跡（8世紀第4四半期～9世紀前半頃）や第1次調査では水田に伴う小畦畔が検出され、両迫間日渡遺跡においても水田跡が確認されている。また、南北に縦断するトレンチ調査を実施した令和2年度実施の第2次調査では部分的に水田層が確認されていることから、広範囲に水田が造営されたものと考えられる。

中世になると、水田の大規模な改修が行われたものと思われ、古代の水田が部分的な検出にとどまるのは、これにより消失した可能性が考えられる。

第3節 今後の課題

玉名平野遺跡群は、菊池川右岸の玉名平野一帯に及ぶ柳町遺跡、両迫間日渡遺跡、玉名平野条里跡などの遺跡を包括する遺跡群で、個別に論じられてきた各遺跡の様相も、水稻耕作をキーワードに相互に関連して論じることができるものと思われる。今後、玉名平野全体を視野に入れ、玉名平野における土地利用の歴史として捉えていくことが重要であるとともに、さらなる調査が期待される。

〔参考文献〕

- 熊本県教育委員会 2001 熊本県文化財調査報告第 200 集「柳町遺跡Ⅰ」
- 熊本県教育委員会 2004 熊本県文化財調査報告第 218 集「柳町遺跡Ⅱー一般国道 208 号玉名バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査ー」
- 熊本県教育委員会 2010 熊本県文化財調査報告第 261 集「玉名平野条里跡（古閑前地区）ー九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ー」
- 熊本県教育委員会 2012 熊本県文化財調査報告第 268 集「長山前田遺跡・両迫間日渡遺跡 1 ー九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ー」
- 熊本県教育委員会 2014 熊本県文化財調査報告第 299 集「玉名平野条里跡 3・両迫間日渡遺跡 2・玉名の平城跡ー県道玉名山鹿線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査・県道 6 号（玉名立花線）拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査ー」
- 熊本県教育委員会 2022 熊本県文化財調査報告第 345 集「玉名平野遺跡郡 1 ー玉名立花線（河崎工区）活力基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ー」
- 玉名市教育委員会 2009 玉名市文化財調査報告第 19 集「両迫間日渡遺跡 1 ー九州新幹線玉名駅周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査ー」

写真図版

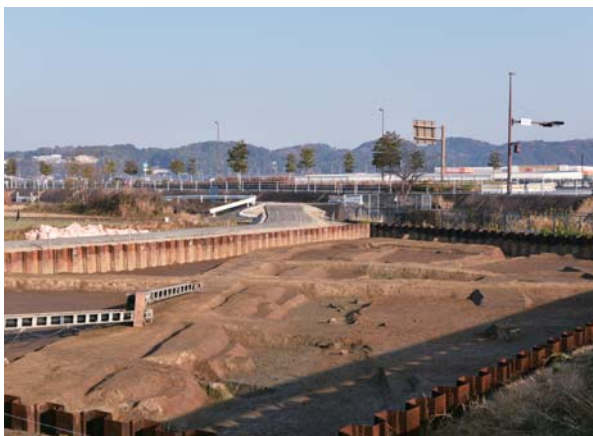
図版 1



1. 3 面目完掘状況（西から）



2. 2 面目完掘状況（俯瞰）



3. 1 面目完掘状況（南から）



4. 竖穴建物 S128 遠景（南から）



5. 竖穴建物 S128 完掘状況（東から）



6. 竖穴建物 S025・026、溝状遺構 S028 検出状況（南西から）



7. 竖穴建物 S025 遺物出土状況（南東から）



8. 竖穴建物 S026 遺物出土状況（東から）



1. 竪穴建物 S025・026・027 完掘状況（北から）



2. 竪穴建物 S029・030・031、溝状遺構 S032 検出状況（西から）



3. 竪穴建物 S029・030・031、溝状遺構 S032 完掘状況（東から）



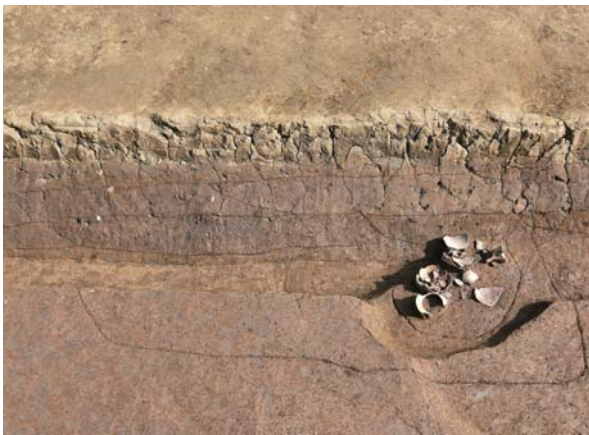
4. 溝状遺構 S095 完掘状況（西から）



5. 竪穴建物 S077 完掘状況（北から）



6. 竪穴状遺構 S063 完掘状況（西から）



7. 竪穴状遺構 S126、土坑 S125 検出状況（西から）



8. 土坑 S125 遺物出土状況（北から）

図版 3



1. 土坑 S127 完掘状況（東から）



2. 畦畔完掘状況（俯瞰）



3. 畦畔 S002・003・004 完掘状況（南西から）



4. 畦畔 S004・009 完掘状況（南から）



5. 畦畔 S005・006 完掘状況（東から）



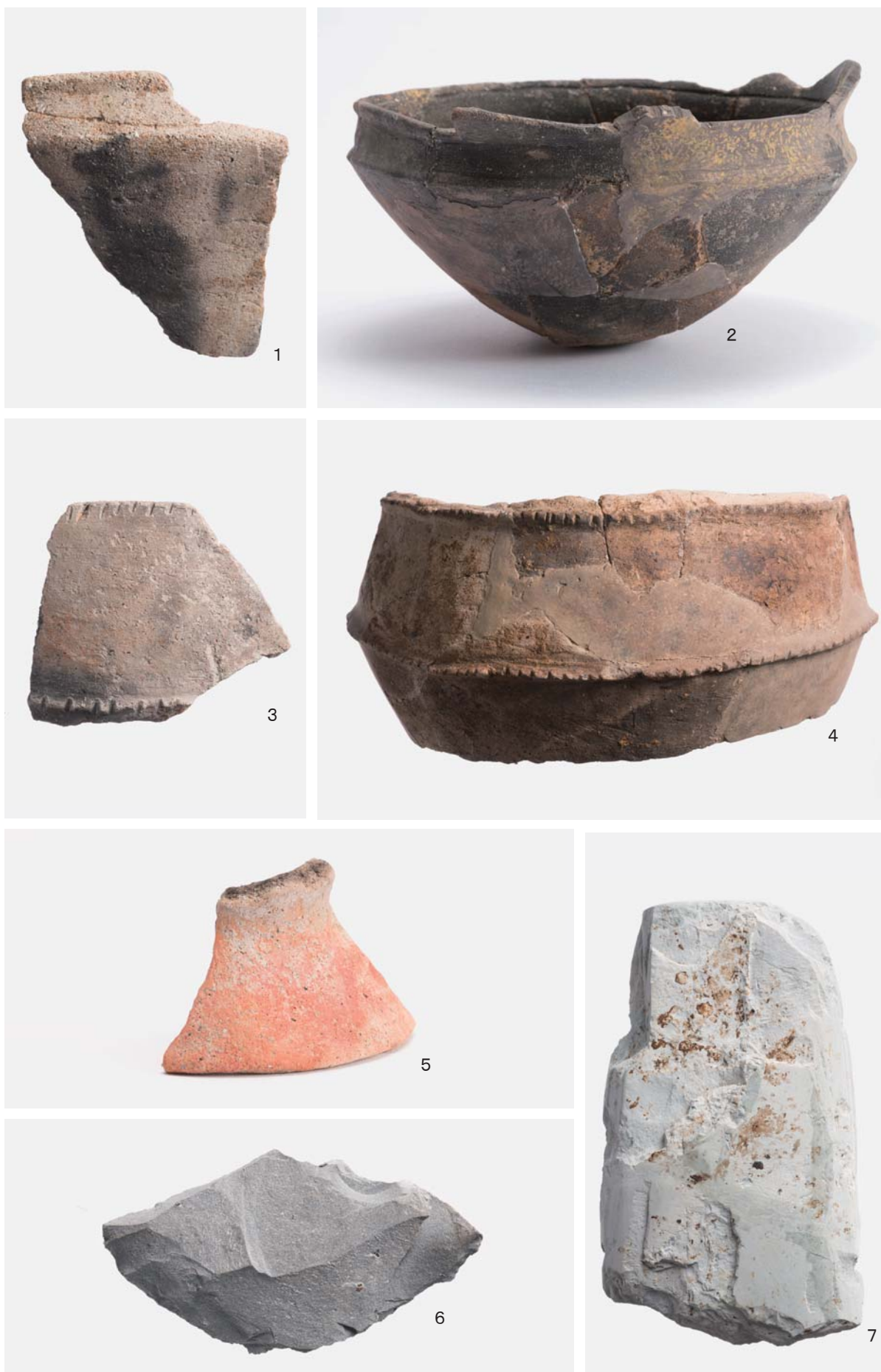
6. 畦畔 S010 完掘状況（東から）



7. 溝状遺構 S008、畦畔 S011 完掘状況（北西から）



8. 畦畔 S003、溝状遺構 S007 完掘状況（東から）



竖穴建物 S128 出土遺物

图版 5



Ⅶ a 層出土遺物①

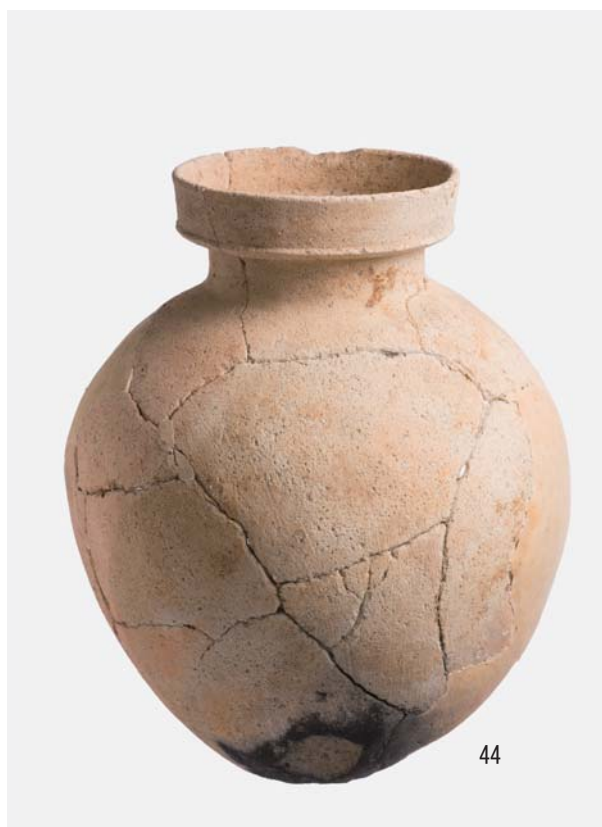
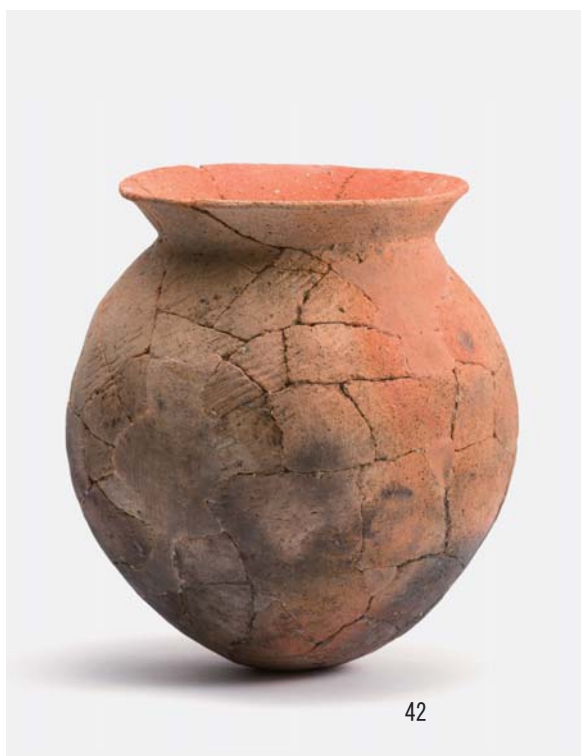


VII a 層出土遺物②

图版 7



豎穴建物 S025 出土遺物



竖穴建物 S025、土坑 a (46・47) 出土遺物

图版 9



竖穴建物 S026 出土遺物



55



58



56



59

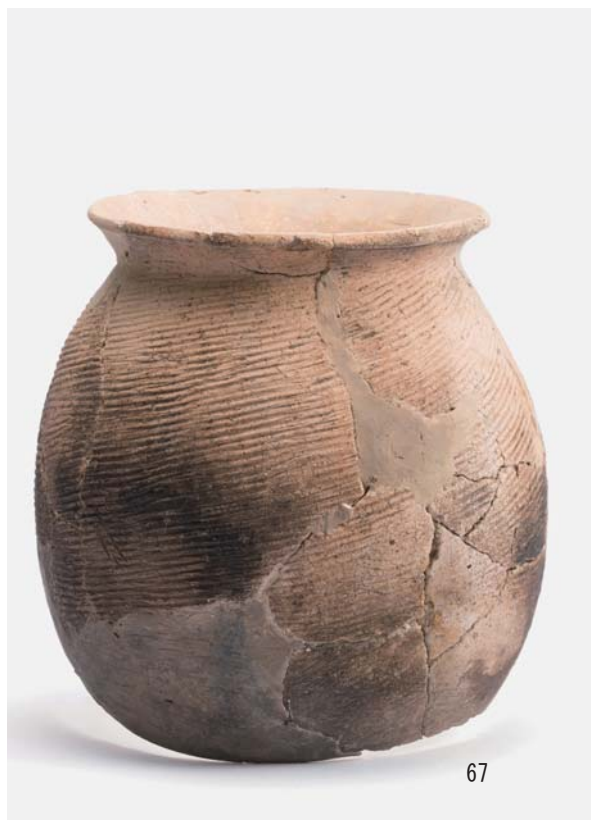


57



60

竪穴建物 S027(55 ~ 57)・S029(58・59)・S077(60) 出土遺物



土坑 S125(61 ~ 64) · S127(65 ~ 67) 出土遺物



溝状遺構 S028 (68 ~ 72)・S032 (73・74)
土坑 S036(76)・S044 (77・78) 出土遺物

圖版 13



Ⅳ層 (79 ~ 82) · Ⅱ層 (84 · 85) · Ⅲ層 (88)
Ⅳ a · Ⅳ c 層 (91 ~ 93 · 96) 出土遺物



IV a・IV c 層 (94・95・97)・V 層 (98～102) 出土遺物
紡錘車 (75・83)

図版 15



石器 (27・28・29・86・30・31・32)

古銭 (87・89・90)

報 告 書 抄 録

ふりがな	たまなへいやいせきぐん 2
書 名	玉名平野遺跡群 2
副書名	玉名立花線（河崎工区）活力創生基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第 347 集
編著者名	矢野 裕介
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒 862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号 Tel. 096-383-1111
発行年月日	令和 5 年（2023 年）3 月 24 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
たまなへいやいせきぐん 玉名平野遺跡群	くまもとけんたまなし 熊本県玉名市 かわさき ちない 河崎 地内	206	483	32° 56′ 15.94812″	130° 34′ 16.20425″	2021.10.18 2022.01.31	1234.07 m ² × 3 面	県道 6 号線 拡張工事の為

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉名平野遺跡群	集落跡 水田跡	縄文 弥生 古墳 古代 中世 近世	竪穴建物 土坑 溝 溝状遺構 畦畔	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 石器	竪穴建物 8 基、土坑 5 基、溝 1 条 溝状遺構 6 条、畦畔 8 条を検出。

要約	熊本県玉名市秋永・河崎に所在する玉名平野遺跡群は、柳町遺跡、両迫間日渡遺跡、玉名平野条里跡を包括する遺跡群で、縄文～中世の複合遺跡である。菊池川の右岸、玉名平野一帯に所在し、古代・中世の条里跡が推定されている。玉名立花線（河崎工区）活力創出基盤交付金（改築）事業に伴い、令和 2 年度（2020 年度）から発掘調査が実施され、今回の調査で 3 次を数える。第 1 次調査では、弥生時代中期の竪穴建物、甕棺墓（小児骨一部残存）、古代の竪穴建物、土坑墓（成人骨残存）が確認され、第 2 次調査と併せて、古代から近世にかけての水田の広がり確認されている。今回の第 3 次調査では、縄文時代晩期の竪穴建物 1 基、弥生時代早～前期の突帯文土器の包含層、弥生時代末～古墳時代前期の竪穴建物 7 基、中世の水田跡などが確認され、各時代の様相が明らかとなった。これは、玉名平野の土地利用の変遷を考えるうえで重要な成果といえる。
----	--

本書の仕様

- 版型 A 4 判
- 組版 13 級 MS 明朝
Adobe In DesignCS5.1 (forWindows)
- 印刷 オフセット
- 製版 本紙のモノクロ及びカラー印刷
写真は全てスクリーン線数 220 線で製版
- 用紙 表紙：アートポスト紙 220 g
見返し：上質紙 110 kg
大扉・序文・目次等・本文・抄録・奥付 上質紙 110Kg
口絵・写真図版：特アート SA 金藤 135Kg
- 製本 糸かがり綴じ
- 本紙加工 PP（ポリプロピレン）貼り

熊本県文化財調査報告 第 347 集

玉名平野遺跡群 2

—玉名立花線（河崎工区）活力創生基盤交付金（改築）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

発行年月日 令和 5 年（2023 年）3 月 24 日刊行

発 行 熊本県教育委員会

熊本県熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

印 刷 シモダ印刷株式会社

熊本県熊本市中央区上水前寺 2 丁目 16 番 16 号

発 行 者 : 熊本県教育委員会
所 属 : 教育総務局文化課
発行年度 : 令和4年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第347集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：熊本県文化財調査報告第347集 玉名平野遺跡群2

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<https://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2025年9月30日